

350
250

6 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16

始



特 202
569

岸原鴻太郎編述

類經色脈篇



東京・本郷 半田屋書店發行

類經色脉篇 目次

緒言	……………	一
第一 診法常に平且を以てす	……………	一
診法、生尅、病の眞假順逆等		
第二 部位	……………	二
是れ後世の寸關尺診脉部位也古の診脉は第五に載す		
第三 呼吸至數	……………	六
少氣定養、温病、風病、痺病の脉候等		
第四 五藏の氣脉に常數あり	……………	七
一日夜に脉五十周天地の運行は同じ、氣口脉口寸口三名一實、代脉の解		
第五 三部九候	……………	一〇
鍼道は即ち天地の道也、五は中正の數也、至數と易及び洛書、黃鍾の數、天地人三才と三部九候、寸關尺診法は後世の捷法、候法及治法、古今診及治の疎密		
第六 素問七診	……………	一五
七診に異説あり之を辨正せり		
第七 診に十度有り診に陰陽有り	……………	一六
脉度、藏度、肉度、愈度也左右合て十度、貴賤診法異なり		
第八 診に大方有り	……………	二二
醫の德行、神明、人情不 _レ 失		
第九 脉を四時陰陽規矩に合す	……………	二三
天人合一、天地陰陽の消長と脉の合致、補寫は天地と一なる可し、脉診の要訣虚心靜定精誠		
第十 四時の藏脉、病に太過不及有り	……………	二六
春夏秋冬の脉と其病、脾脉と其病		
第十一 脉を四時に分つ胃無きを死と曰ふ	……………	三二
春夏秋冬の胃、長夏の胃、胃の大絡		
第十二 四時に逆從しても胃無きは死す	……………	三九
傳病の間藏及び不間藏、脉逆、無胃氣、望聞問切四診早治、治す可き病候、難治の病候、四時の逆脉		
第十三 五藏、平、病、死の脉、胃氣を本と爲す	……………	四三

第十四 三陽の脈體……………**四**
心脈の形、肺脈の形、肝脈の形、脾脈の形、腎脈の形
太陽の脈至は洪大にして長、少陽の脈至は乍ち數乍ち疏
乍ち短乍ち長、陽明の脈至は浮大にして短

肝邪は五藏皆畏る、心肺肝脾胃腎の搏堅長脈は皆邪也、
脈與散は正氣の虛也、各々病名を擧記す、心脈急と心
病、胃脈病形

第十五 六經獨至、病脈分治……………**四七**
六經の脈單獨に至る病候と其補寫六經に分て記載あり

第二十一 諸脈症診法……………**七五**
脈は血の府也併し血中に氣を含む、諸脈と其病、察脈の
要は上下來去至止の六字訣、脈に由りて病の内外上下を
決す、脈を按して病を知る

第十六 寸口尺脈諸病診……………**五〇**
鴻謂く此の法及び次の十七十八甚簡易にして學び易きに
似たり

第二十二 關格……………**八〇**
陰陽和せず互に拒隔するを云ふ、後世改惡の關格説あり

第十七 三診六變尺と相應……………**五五**
色脈合診、五藏所生病形、類脈中に異有り、從て治殊な
り、上醫中醫下醫の診に三等有り從て其治蹟に天地の差
を生ず

第二十三 孕脈……………**八四**
生子の男女を豫見する診法もあり

第十八 診尺論病……………**五九**
鴻謂此法最も簡易にして學び易すかる可し

第二十四 諸經脈症、死期……………**八六**
腫滿、小便閉、跛と偏枯、痲痺、筋攣、瘡驚駭、癢、石
水、風水、死症、驚を慙す、痲病、痲と癢、五藏六府皆
病有り、痲厥驚、下痢痲血、偏枯、死症及懸鉤の脈症、
暴厥、暴驚と數に似たる脈、以下死期

第十九 藏脈六變、病刺不同……………**六二**
緩急小大滑瀉の六は脈の提綱也、心肺肝脾胃腎に各々脈の
六變有り、其六變に就て各々病有り、其六變の脈形、其
六變の刺法、諸小脈は虛症也鍼を禁ず、灸用ひ得可き也
如何

第二十五 死生を決す……………**九四**
戴眼、死の時刻、噦噫、診察の順序次第、治法即ち經病
治、絡病治、血病治、繆刺、留瀉治、上實下虛の治、上
視戴眼の治

第二十 搏堅、奕、散、病を爲す同じからず……………**七三**

第二十六 脈に陰陽、眞藏有り……………**一〇三**

第二十七 骨枯れ肉陷り眞藏見はる者は死……………**一〇六**
卒死は期を爲し難し、肝の眞藏死、毛折死の理由、心肺
腎脾の各眞藏死、胃氣と眞藏との結論

甚微と脈候、又人迎脈と寸口脈と大小等しきは病愈へ
難し、又藏府病愈へ易き脈候、寒傷脈、食傷脈、古脈診と今
脈診との優劣、色診及治、色の内外と治の内外、病外よ
り來る脈及治、風痺厥三病の色診、卒死の理、病小愈し
て卒死病候、不病卒死の兆候、死の期日、以下全身の諸
病を總て面部にて診斷する簡易法也、又曰此法萬舉萬當
也と又曰色を見て内外の病を知る又曰色を見て病種を知
る又曰五色を以て病の淺深成敗遠近病處を知る、神醫の
診法は神を心に積む、色の明暗、色の散して聚らざる症
男子而玉即鼻の上下の色と諸病、女子同上の諸病、邪色
の在る所即ち病處、五色の正色と邪色、邪色の進む方向、
上文の總結正色と五藏の配合

第二十八 眞藏脈の死期……………**一〇九**
眞藏死は五行尅賊の日に於てす

第三十三 色脈諸診……………**一二八**
諸病の目診、目痛診法、寒熱病死の目診、齟齬痛の目診
絡脈の色診、黃疸の病候、寸口と人迎と小大等き者は病
愈へ難し、妊娠脈候、嬰兒頭毛逆上と死、耳間青脈と掣
痛、大便血穢及痰泄の治愈難易、陰を重れば陽と爲り、
陽を重れば陰と爲る是れ四時の序

第二十九 陰陽虛搏病候死期……………**一一二**
妊娠脈、腸辟即ち痢血死、汗の理、血崩

第三十四 能く脈色を合すれば萬全……………**一三二**
脈は指を以て別つ、脈の小大滑瀉浮沉の形體、五藏の象
は類を以て推知す、五藏の相と音、五色の微診は目を以
てす、脈色合診は萬全、赤脈至と心痺、白脈至と肺痺寒
熱、青脈至と肝痺及痛、黃脈至と厥脈、黑脈至と腎痺、
面色に黃を兼る者は死せず、之に反し黃色無き者は死す

第三十 精明、五色……………**一二三**
精明五色は氣の華也、赤色の善惡其他白青黃黑色の善惡
精明の盛衰

第三十五 經に常色有り絡に常の變無し……………**一三五**

第三十一 五官五閱……………**一二五**
五官は耳目等也五閱は其効用の見聞等也、完全壽相の人
には鍼を用ゆ可し、虛弱の者には鍼を用ゆ可からず、五
官の解五官を以て五藏の病を知る

是れ人相の書也以て壽相等の記載あり又其面部の色を視
て病を知るの法也色診の法也即ち面部の五色と病症、病

第三十二 色藏部位、脈病の易難……………**一二八**

按るに經には常色有り、陰絡には常色有れども陽絡には常色無し、陽絡變色の理由、常色あれば無病也、五色具り見はるれば往來寒熱す

第三十六 新病、久病、毀傷脉色……………一三七

新病は脉小にして色奪はれず、久病は脉奪れざるも色奪はる或は脉色俱に奪はる、脉色俱に不奪は新病、毀傷の

脉色候

第三十七 五藏五色、死生……………一三六

惡青色と死、惡黃色と死、惡黑色と死、惡赤色と死、惡白色と死、善五色生兆、五藏所生の正色外榮、五色五味五藏皆五行の一理に本づく、五色と皮筋骨も亦合す

右各章下の細註は原書の無き所也索引の爲め譯者之を附す

目次終

緒言

【原書類經の事】本書は有名なる明の大醫張介賓、景岳先生か非凡質を以て醫道研鑽の後、三十年間の精力を竭して素問靈樞の類則を一處に聚録して三十二卷の書を作り稿を改むること四回之を分類すること十二、其第一は攝生、第二は陰陽、第三は藏象、第四は本篇の色脉、第五は經絡、第六は標本、第七は氣味、第八は論治、第九は疾病、第十は鍼刺、第十一は運氣、第十二は會通と爲す、尙ほ之を佐くるに附翼二卷圖翼十一卷を著はし、圖說其詳を極め、天地萬物の理具備せざる無し、又其註には甲乙經、難經、張仲景、王叔和、啓玄子、新校正、滑伯仁、劉守眞其他諸大家の説を援て其義を明にし、以て天下の後學をして其玄機幽微にして測知し難き、内經の門戸を窺ふを得せしめたり、眞に霧海の大燈臺、斯道の指南車にして蓋し世界第一の書と爲す、今回は僅かに其十二分類の一たる色脉篇を譯出するに過ぎざるも、相次て其鍼刺篇を出し、漸く進みて全部を刊行し、以て神聖なる醫道を後世に遺さんと期す、若し幸に諸君の贊助を得ば、更に一步を進めて、眞文明の光を世界に及ぼし、蓬萊醫王國を建て、因て以て富國強兵の基を開きたしと思へり。

然るに此の篇を世に出さば、從來の漢方家は首肯せんも、西洋家は之を見て此れ何物ぞ、易書のやうでもあり、天文書のやうでもあり、人相學のやうでもあつて、醫書とは思はれず、勿論科學的で

も無く解剖的でも鏡檢的の物でも無く、其上に器械的診察法でも、無ひから、不便不完全の者だ、定て未開蒙昧時代の妄想説であらうなと、誹議排斥せらるるであらうから、我はイヤ／＼ながら、茲に豫め一言し置か無ければ、折角の聖道復興の前途を、障碍せらるるやも知る可からず、乃で先づ漢方と謂はず、洋方と謂はず、黄帝を去ること遠き末世の醫弊を指摘して、根本的に聖道の復古を策することか、公平無私で且つ有益と思へり依て先づ漢方醫の弊から述べれば、末世には種々の醫流ありて其の内流行醫たる者は多くは無學の輩で幫間的阿諛を是れ事とし間には詐欺醫者もあつた模様である―診宗三昧と云ふ古書にも「古聖人は只一の善政を立てられたが後世は専ら事を繁くして民を天折せしめた、即ち小疾あれば直ちに醫療を施せし爲め、往々生を求めて生を失ふ者かあれども、無知の輩は前車の覆るを悟らすして、命を失ふ者甚だ多し、而て當世の醫に三種あり、其一は世醫の名（數代の醫）に藉りて志を學問に絶ち家傳を株守して恣に劇薬を用ひ人の元氣を損するを顧みず、是れ大道を知らざる故なり、其二は儒を棄てて醫を業とし、徒らに博覽を務めて専ら溫補の薬を用ひ、苦寒の劑を用る者を誹りて、變通の術を知らず、其三は世を欺き名を盗む醫にして、口給便佞に藉りて、聲望ある人に交り、其威を頼みて、車を高ふし術を衒ひ、體を曲げ時流を追ふて、日に無辜の民を殺して、我が腸を充し、心力を竭して以て、妻妾の笑を博す、是の如きは皆地獄の種子也」と又古大醫丹溪曰我三十歳の時に母脾痛を病む衆醫治するを得ず、之に因

一の善政は蓋し中道不偏と云ふ下文に記す太極論と思ふ

て我醫を學へり、追念するに先子の内傷、伯考の脊悶、叔考の鼻衄、幼弟の腰痛、家人の積痰皆誤薬に歿す、悲痛に堪へず」と又永富獨嘯庵曰人を山野に劫して、其口腹を養ふ者を賊と云ふ、而て其の人を殺す一生涯に五十人若くは一百人に過ぎず、今の醫術拙くして、流行する者は、知らず識らず人を殺す、一日に三五人は蓋し少しとせず、生涯なれば、其幾千人なるを知る可からず、其心固より人を害するに非ざれども、非命に死せしむるに至りては則ち一也、是の如くんば、其隱惡劫盜より甚し、仁の術果して何の處にかある」と

貝原益軒先生曰其器量無くして醫師と爲る可からず、人を害し已を損す、白隱禪師曰中醫は益なしと雖とも、害なし、下醫は管に益なきのみに非らず、却て害す、招かざるを賢とす」と是れ古賢班固の言に「病有りて治せざれば常に中醫を得る」とあるに基く者と思はる而て古の中醫とは如何なる者ぞと云ふに、本篇第十七に「上工は十に九を全ふす、中工は十に七を全ふす、下工は十に六を全ふす」とありて上醫は病人の九割、中醫は病人の七割、下醫は六割を治し得るを云ふ也、即ち病有て醫者に掛らず自然に任せ置けば、病の七割は、自然に平愈するを云ふなり、借問す現代の醫師は其幾割を治し得るや

轉じて洋方醫家の情態を觀察せん○丘理學博士曰病を愈すは自然であつて、御禮を貰ふは醫者である、薬に病氣の原因を除く者は極めて少ない」土田博士曰澤山な病氣の中で治療法の分りて居る

のは三つか四つしか無ひ鼻風ですら其病原は分りて居らぬ○寺田醫學士曰實際薬を用て愈る病氣は僅に急症「リウマチス」「マラリヤ」「チブテリヤ」梅毒位の者で其他の病氣か薬で愈ると思ふは大間違ひだと、然らば上古の漢方は如何と顧るに靈樞經に左の如く云へり

五藏の疾あるや譬へば刺の如く汚の如く結の如く閉の如し、刺久しと雖も猶ほ抜く可し、汚久しと雖も猶ほ雪ぐ可し、結久しと雖も猶ほ解く可し、閉久しと雖も猶ほ決す可し、或は久疾取る可からずと言ふは其説に非らざる也と」此れ黄帝等神聖の語なり誇張虚偽の説と見る可からず、併し彼の上工は十に九を愈すと云へるに比し相違するか如きも、其十中の一は命數盡きて愈へざる者と見れば相違にも爲らざる也。之を要するに黄帝時代の治跡と後世の漢方なり洋方なりの治跡とは全く比較にならざる也更に一步を進めて現代醫界を觀察するに三四年前日本醫學總會に於ける帝國大學教授藥學博士朝比奈泰彦君の講演の要旨に曰臨床家か現今一般に使用し居る内服薬に就ては、其効力を確信して居るか何かは、甚だ疑問である、多くは只習慣的に使用して居るのではあるまいか、日本藥局方中六百に近き普通薬が如何ほど其効力か信認せられて居るか、或人は内服薬は重曹と「モルヒネ」の二品だけあれば十分と言ふて居る（他は無効の意ならん）此の點に關し漢法醫流の態度は全く反對で、一品一物も其効を確信して居るやうである、又元來薬品の發見は歐洲人では無ひ、歐洲の山林は「モミ」「ツカ」「フナ」で原野は牧草のみ、特産の薬品は「チキタリス」と「ゲン

東洋と西洋と
天恵に大差あり
其性を知らざる
其大聖なるをば
東洋の産物を皆
に祭す可し

傳染病豫防及
治療の爲め此
の牛殺は吾人の
知る所也

チアナ」位の者であらう、自然人（非科學者）天賦の能力が熱帶亞熱帶の豊富なる植物中から撰擇した結果を云ふならば南米に於ては「キナ」の發見と爲り蒙古に於ては大黃を知り小亞細亞に於ては、阿片を見出し（鴻曰此等は本草に古より記す）支那に於ては神農以來本草綱目に擧げた千八百種の薬品と爲れり」西洋醫流の採用と共に盲目的に西洋崇拜の結果彼等の製品でなければ効力ない者のやうに、信ぜられしも何ぞ知らん前記の如く効力顯著の薬品は自然人の發見である歐洲人は之を變形して科學の語を以て説明せしも東洋に於て千年以上經驗した薬品を土塊視するは無謀と云ふか、迷信と云ふか、是の如き誤見は打破せなければならぬ、又十九世紀以來薬品から單一の成分を抽出して、單味の化學品と爲したれども、此の單味主義は決して完全の者で無ひ、第一藥理的試驗か殆んど健康なる生體に對して、行れたる者なること（鴻云病人に試みず健人に試し意ならん）第二應用した薬品の運命に就て不明の者多き事である、其結果は角を撓て牛を殺す弊は無いであらうか云々、第三化學的操作は動植物の成分を分離抽出するに完全の方法無き事である即ち現在の抽出方は不完全で一の生薬（草根木皮）から其抽出した物質は生薬の性質と異なる結果を生するのである（鴻云是れ自然を變して不自然と爲す科學の罪なり他の手術及器械診察の如きも亦同一理に歸す可し下文に論ず）如何に近世の化學を以てしても亦藥理學的試驗の効果を以てしても、生薬の全部を代表することは出來無いと云ふ事實は近來多く人の注目する所と爲つた、而も漢法に於ては多數の

藥品を混和して使用して居る予は漢法調劑の方針は西洋の單味主義より大に意義ありと思ふ」と鴻曰漢方は一藥に多きは七十二味も加合する者がある凡そ藥品は其性質上相忌み相惡み相反する者があるのに七十二味も加合することは神醫で無くては、出來ぬ者である、之を一味ですら代表し得ぬ化學藥と比較す可くもない今諸人に解りよき實例を擧るなら西洋の化學藥の代表品は、「アルマー」で漢方の調味劑の代表は正宗金露等の銘酒である、諸君之を飲みくらべて何れか身心に適するやを體驗したならば自然物か宜しきか、不自然物か宜しか、判然す可きである總て醫藥の優劣は孰れか、自然を得るかと云ふ問題に歸着する者である人も自然なれば天地も自然であるからだ更に一轉して刀療即ち手術の可否を觀察せんに、田中氏病理總論に曰脾臟を摘除すれば糖尿病を發生す又甲狀腺を摘除すれば惡液狀態を來し全身發育の障礙を來す又曰一般に結締組織及被蓋上皮に屬せざる組織の局所再生は官能的意義を有する者に非ず又心臟筋に至ては全く再生せず、又曰新生せる小血管は抵抗力弱く容易に破裂出血す又曰神經の再生は筋よりも更に不完全にして高等の神經即ち腦脊髓の再生は殆んど之を證明すること能はず」と云へり

簡明生理學には曰神經細胞は再生せず腺は悉く再生する者に非ず

山極氏病理總論に曰軟骨組織は再生不十分なり筋纖維及び神經纖維の再生も不十分也

長谷川氏病理通論に曰施術の爲め大出血、若くは創傷熱を發して、死を促す事あれば、施術の可否

は注意せざる可からず又曰癌腫は切除するも、通例再發し數年内に、全身貧血皮膚汚色、羸瘦脱力等を起して、癌惡液に陥り、死に歸するを常とす」と云へり

右に關し上古の漢方に於ては如何んと云ふに素問に曰筋を斬り脈を絶つ身體舊に復して行くと雖も津液を滋息するを得ざらしめ、精氣耗減す、故に傷敗結留して血氣内に、結び、陽脈に薄まる時は化して膿と爲り、久く腹中に積む時は、外則ち寒熱を爲す、庸醫之を治すれば、數々陰陽を刺し、身體解散し、四支轉筋す、死日期して待つ可し」と

以上擧る所に依れば西洋の手術即ち刀療は其効力頗る薄弱にして殆んど何の爲めに銳意之を研究し之を實施すか呆然たらざるを得ぬ

次に西洋解剖學の價直を檢討するに、其目的たる手術にして右に陳る如くなる以上外に如何なる効力を有するや、不肖之を識破するに困む、換言すれば今日其解剖學を鍼灸に應用せられつあるやうだが、夫れか如何なる効能を有するかを承りたひのである、不肖の知る限りに於て今の解剖書は身體の内部外部を寫真に取つた丈けの者で、五藏六府其他の官器の無形的關係即ち病理的關係は知れて居らぬやうだ若し其病理か知れて居るならば前文上田博士か鼻風の病原さへ知れて居らぬと申す理由も無く寺田學士や朝比奈博士の如き前論ある可き道理もあるまひのに之を鍼灸に用ひて如何なる効果を生ずるかが不審に堪へぬ我は公益の爲め切に承りたい。

次は醫道の生命は補寫であるが、其病理か知れぬのに何を補ひ何を寫す可きてあらう歟又假りに病理か知れて居りても各官器の無形的關係が知れて居らぬとすれば、何れの官器を寫して何れの官器に効力を發生せしむ可きであらう歟。

次は補寫の主眼たる迎隨であるが、死體を解剖せし西洋流のことだから、手の三陽は藏より手に走り手の三陽は手より頭に走り足の三陽は頭より足に走り足の三陰は足より腹に走ると謂ふ、東洋神聖の生體洞視と同一なる發見の有る可き道理も無ひが其れにも拘はらず其氣に逆ふを迎と爲し、寫と爲し、其氣に順ふを隨と爲し補と爲す所の、所謂迎隨を何の手段を以て行ひ得るであらう歟若し其迎隨の術を用ひずとすれば鍼道は根本的に破壊せられて鍼術は却て人を傷害する具となることは素靈の明言し禁止する所である。

次は脈の井榮膈經合である即ち脈の出る所を井と爲し、溜る所を榮と爲し、注ぐ所を膈と爲し、行く所を經と爲し、入る所を合と爲し、春は榮を刺し冬は井を刺す等の定めであるが、是れも神聖の生體洞視に由て發見せられし者で西洋死體解剖では知れて居ると思はれぬか、如何して之を刺しつゝある歟。次は驗溫器であるが、是れは甚だ危險物と存ずる。何となれば凡そ熱には表熱もあれば内熱もある、大概外熱内寒、内熱外寒である又實熱もあれば、虛熱もある、肺結核の如きは虛熱である故に惡熱は熱に非ず明に是れ虛症、惡寒は寒に非ず明に是れ熱症と云ふ格言もある位だから驗溫

器は人を迷はす危険と思ふ。

次は脈診に器械を使用することは歐米の如き物質一偏の國に於ては已むを得ざることなれども東洋中正圓滿の精神國に於ては只一笑に附し去る可きのみ夫れは本篇を一讀すれば直くに了解し得る、現に脈は必ず指に限り色は必ず眼に限る事になつて居て要は至誠的感應にあるからだ、以上論する所を以て聖道再興に對する障礙は略ほ豫防せられたる可ければ以下東洋醫道の綱要を一言して以て讀者の参考に資す可し。

【醫道論】田中氏病理總論に曰醫療は一種の方便に過ぎず疾病其者の治癒は固より自然に依るのみ醫は之を補佐するに過ぎず、故に曰眞に病を治する者は醫に非ずして自然なり醫聖「ヒポクラテス」曰醫は自然の僕なりと、又羅馬の名醫「カーレン」氏も曰「自然は疾病の醫師なり」と我か東洋醫道より之を評すれば醫療を一種の方便と視ることは全然之を非認す此れと同時に西洋醫術の如何に無價直なるかを證明するに足れり而て東洋醫藥の有効は前段に於て反覆論辨せし所なれば復た贅せず次は「自然を醫と爲し、醫を其僕と爲す」と云ふ説也、此の説は條件附にて之を認む、何をか條件と云ふ、曰自然中にも精神的と物質的とある、太陽其他諸星界地球等の如きは物質にして之を支配する者は無形的の靈即ち神及び人である何を以て之を言ふとなれば天御中主神天照太神の如きは即ち天地を支配せらるる神なり而て人も亦修養を重ぬれば之れと合同するを得る、所謂神人合一也、

素問に曰上古に真人あり天地を提挈し陰陽を把握し、天地を盡すも其壽窮り無しと、正に是れ我前記の諸神也、釋迦曰天上天下唯我獨尊と、正に是れ神人合一也、漢書の禮記に曰人は天地の心也と王陽明之を釋して曰人は天地萬物の心也、心なる者は則ち天地萬物の主也と、老子莊子も亦云ふ人は天地を使役する力ありと、太公望も曰陰陽を調和して萬民を樂しましむる能はざる者は、我か宰相に非ずと、孔子も亦易に於て云へらく聖人は天地の和を調へ萬物を曲成すと是を以て東洋醫道に於ては天地陰陽を調へて天下國家を泰山の安きに置くを以て末病の治と稱す、其術たる前記其人か陰陽を把握すると同く、至誠以て之を動す也、而て其之を動す感應に就ては不肖か神道神武興國論に詳述せし所也又手術上より言へば類經二十八卷即ち素問遺篇刺法論に云へる如く木氣天に升らんと欲して天桂（金星）窒て之を抑へ爲めに病を起す時には足の厥陰の井に鍼し又火か天に升んと欲して、天蓬（水星）か窒て之を抑へ爲めに、病を起す時には、包絡の榮に鍼して其病を去るとあるの類也、故に前文に病有て治せざれば中醫に掛りし効ありと云ひて、上醫とは云はざりしなり、此れ不肖が條件附にて田中氏の説を認めし所以なり以下其精神的自然を以て醫道を爲して以て之を觀んと欲す。

古人曰「醫なる者は理也」と是れ天理を指す也又曰「醫なる者は意也」と是れ吾人か固有する良知能を指す者にして上文へ云へる人の至靈也故に佛を醫王と稱し藥師と號し上醫を國手と名く醫は決

して藥賣のみに非らずと知る可し又意なる者は思慮に涉らざる清淨心より發する、直覺即ち當意即妙は其端也、禪客之を稱して活句と稱せり、要は金剛經に「住する所無くして其心を生ず可し」とある、是れ也日本の醫聖徳本翁のの診察法に「心中に一點の念慮無く臍下丹田に氣を收めて病人も無く我も無き所より手を下せば自然に診し得る」とあるのか即ち夫れである、此を本篇の診察法に照して會得す可きである老子に「學を爲せば日に益し、道を爲せば日に損す、之を損して又之を損し無爲にして爲ざる所無し」と云へるも此の事である、其意味は學問すれば現代學者の如く日に惡知識を増す、眞道を得るには日に知識を損す之を損し盡して無爲即ち不動心の地位に至れば自由自在の働か出来ること云ふことである、委細は前に記する神道神武興國論に述べたり兎に角妙術を得るは心の練磨である古より劍術を學ぶ者は劍術よりは禪の悟道か捷徑であると云ふである、鐵舟先生の如き實に其實行者で先生は一夕悟道してからは誰も擊劍の相手と爲り得る者か無く、其師匠さへ兜をぬいたのである、其理由は無欲無心となりて、神人合一に到るからである、我等は返くすも此の事を勸告して止まぬ、是れか歐米人で出来なくて東洋殊に日本人の特有する大寶である。

次は陰陽太極論である「西洋學者は前文の如く自然の良醫たることは認めて居るが自然の内容に至りては全く以て未知數のやうである、此れが爲めに、其醫術か發達せずして、鏡檢や死體解剖や、化學分析等の邪路に迷ひ込み、遂に行き詰りたる次第で、恰も礦物を掘るに礦脈に由らずして濫鑿し

て段層に陥りしと一般である、夫れと云ふも、物質的知識ならては有し得ぬ、西方陰土に生れし不幸の結果である、之に反して東洋は陽土である、前記朝比奈君講話中に歐洲の山林は貧弱にして藥品無く、東洋の熱帶亞熱帶は植物も藥石も豊富なりとある如く自然たる伏羲に由て自然の内容が發見せし者か、即ち陰陽太極なので、是れか宇宙の完全なる解剖的至妙至理であつて、之に基けは如何なる疑も解けぬことは無ひのである、今其大原則大剛要を擧ぐれば、

黃帝曰陰陽なる者は天地の道也、萬物の綱紀變化の父母、生殺の本始、神明の府也病を治る必ず其本に求むと此の數句にて宇宙の一切事を窮盡し了せり、今之を俗解すれば天地未だ割判せざる時は渾沌として雞子の如く清濁未分なりき、之を太極と名く、天地の至數より云へば之を一と爲す、次に清者は昇て天と爲り濁者は降りて地と爲れり、是に於て清天を陽と爲し、濁地を陰と爲す、至數にて之を二と爲す、天地既に分れて後ち天の熱氣は下行し地の水氣は蒸發して中天に相會して雨露と爲りて萬物斯に生成す、之を至數の三と爲す、而して其萬物中の優秀なる者を人と爲す是に於て天地人なる三方の位定る、而て其水熱の中天に交接する者を物的太極と爲し、天徳と地徳と會同して生ずる所の人を靈的太極と爲す此れ人が前文の如く天地萬物の主人たる所以也、此の状態即ち陰陽太極を更に諺解すれば自轉車の運行是れ也即ち車の兩輪は陰と陽也而て其車を操る所の中心たる鞍は即ち其主人公たる太極也之を鳥の翼に見、之を時計の運轉に見、之を天地の吸心力遠心力其他

一切事物に照し見よ、一も此の原理に合はざる者無し故に老子曰道、一を生じ一、二を生じ二、三を生じ三萬物を生ず」と是れ至數を以て陰陽太極を狀する也、故に朱子曰太極分開すれば陰陽と爲る、陰氣流行すれば則ち陽と爲る陽氣凝聚すれば則ち陰と爲る、是の如く消長進退千變萬化して、天地間限り無きの事を做し出し來る、故を以て往くとして陰陽に非らずと云ふこと無く、亦往くとして太極に非すと云ふこと無しと云へり、之を能く記憶し居て本篇を理會するを要す、次は此の陰陽を變化する内容の機要たる五行を述ぶ可し。

【五行とは何ぞや】天地既に判れるや天は無形の氣にして、地は有形の物を生ず、天の氣は風熱濕燥寒の五者也、地の物は木火土金水の五者也、人に於ては肝心脾肺腎の五藏也、物の味は酸苦甘辛鹹の五味也、物の色は青黃赤白黒の五色也、是れ皆五行の主た者にして醫道に大關係有る者也、而て之を陰陽變化の機要と爲す、故に天元紀大論にも其概を擧示して曰、夫れ變化の道たる天に在ては氣と爲り地に在ては形と爲る、形氣相感じて萬物化生す、故に天に在ては玄と(深遠不可測)爲り、人に在ては道と爲り、地に在ては化と爲る、化は五味を生じ道は智を生じ(故に道を失ふたる現代には智者無し)玄は神を生ず(現代神仙を生せざるは玄を學ばざる故也)神、天に在ては風と爲り地に在ては木と爲る、神、天に在ては熱と爲り地に在ては火と爲る、神、天に在ては濕と爲り地に在ては土と爲る、神、天に在ては燥と爲り地に在ては金と爲る、神、天に在ては寒と爲り地に在て

は水と爲る」而て風寒暑濕燥の五氣か天に相錯し木火土金水か地に交互して春夏秋冬を爲し歳を爲す人に在ては五藏六府が天地の運行と同く循環して生を遂く、又五行中例へば風木肝酸青の同氣物は肝病風病の診察若くは藥品に見はれ若くは使用せらる、即ち肝病に青色を見はし酸を藥に用ゆ之を本篇に見よ。

尅は殺也制也

次は其陰陽變化の機として五行に生と尅の二方面あり【五行の生】とは木は火を生じ火は土を生じ土は金を生じ金は水を生じ水は木を生ず、是れ五行の生にして母子の關係を有する也【五行の尅】とは金は木を尅し、木は土を尅し、土は水を尅し、水は火を尅し、火は金を尅す是れ五行の尅にして仇讎の關係を有する也、然れども天地の道は圓轉滑達不即不離なるが故に生は生に終る可からず、尅は尅に終るを得ずして、相節制調和する所無る可からず、是れ天道は盈を虧て謙に益し、鬼神は盈を害して謙に福する所以也、此を以て木が土を尅せんとすれば、土の子たる金が出て來て木を制す、又金が木を尅せんとすれば、木の子たる火が出て來て金を制す、又火か金を尅せんとすれば、金の子の水が出て來て火を制す、又水か火を尅せんとすれば、火の子の土が出て來て水を制す、又土か水を尅せんとすれば、水の子の木が出て來て土を制す、之を實際に見れば兩濕甚しければ風起て吹き拂ふは、木か土を制する也、風甚ければ涼燥の氣生じて風を止むるは、金か木を制する也、又暑熱甚しければ驟雨到るは、水か火を制する也」而て此の五行生尅こそ鍼灸に於ける補寫の根本

義にして亦診察唯一の兆候なり之を外にして何の補寫あらん何の診察か之れあらんや見よ本篇の字句句陰陽五行の四字にあらざるは之れ無きを終りに一言す人の喜怒哀憂恐の五志を療するも亦此の理を用る也、即ち喜は火に當り怒は木に當り悲は金に當り憂は土に當り恐は水に當る故を以て精神病に上法を使用して之を醫する也例へば怒を制するには病人をして悲感を起さしめ、悲を制するには喜樂の話を用る類也餘り緒言か長くなるから茲に擱筆致します冀くは識者の御叱正を不文意を盡さず。謹白

昭和八年一月吉日

相州腰越之蝸廬

岸原鴻太郎

七十九歳

類經色脉篇

張介賓類註

岸原鴻太郎譯述

第一 診法常に平且を以てす

○素問脉要精微論に黄帝問て曰診法何如ん(診は視察也脉色問皆診と言ふ)岐伯曰診法常に平且を以てす、陰氣未だ動かす陽氣未だ散せず、飲食未だ進めず、經脈未だ盛ならず、絡脈調勻し、氣未だ亂れず、故に過有るの脉を診す可し

△平且は陰陽の交(鴻云類經十四卷に寅卯の刻と記す)陽は晝、陰は夜なり、平且に至て陰と陽との諸脉は皆寸口に會する也、是の故に難經に曰寸口は脉の大會、五藏六府終始する所也と【中略】有過とは脉か中を得ずして過失有る也、夫れ脉は氣血の先驅也氣血盛なれば脉盛也、氣血衰れば脉衰ふ、氣血熱すれば脉數也、氣血寒すれば脉遲也、氣血微なれば脉弱く、氣血平なれば脉和す、又長人は脉長く、短人は脉短く、性急人は脉急に、性緩人は脉緩なるは此れ皆其常也、之に反する者を逆と爲す、凡そ此等は皆有過也

脉の動靜を切して、精明を視、五色を察し、五藏の有餘、不足、六府の強弱、形の盛衰を觀る、此を以て參伍して、死生の分を決す

△切は指を以て按索する也、即ち脉の動靜を切し陰陽を診す、目の精明を視るは神氣を診す、五色變見を察す

診察は早朝なる可し

過の解

診法

生尅の生は例へば水か木を
生ずるか如き
也尅とは例へば
金か木を尅す
るの類也
眞假とは眞症
と似て非なる
症を言ふ例へ
ば寒極れば熱
症に似るかか
如き也

尺内の兩傍

前後内外の義
は後文頭書下

尺寸の義

二難は難經

るは生尅、邪正を診す、故に凡之病診は脉色、内外を合せ、參伍して以て求れば則ち陰陽表裏、虛實寒熱の情
遁る所無くして先後緩急、眞假、逆從の治、必ず差ふこと無し、故に死生の分を決す可し、而も況や疾病おや、
此れ最も醫の妙用なり、夫れ參伍とは三を以て相比較するを參と謂ひ、伍を以て相類似するを伍と謂ふ、彼此
れ反觀し、異同互證して其隱微を求むる也」鴻曰逆從は逆順也」

第一 部位 (鴻云是れ後世の脉位也古の脉位は第五に載す)

○素問脉要精微論に曰尺内の兩傍は則ち季脇也

△尺内とは關前を寸と曰ひ、關後を尺と曰ふ、故に尺内と曰ふ、季脇は小肋也脇下の兩傍に在り、腎の近き所
と爲す、故に季脇の下より皆尺内之を主る○按るに尺は寸に對して言ふ、人身の動脈多きも唯だ此の氣口三部
獨り長さ一寸九分なり故に總て寸口と曰ふ、分て之を言へば外を寸部と爲し、内を尺部と爲す、外を陽と爲す、
故に寸内九分を得る陽の數也、内を陰と爲す、故に尺内一寸を得る陰の數也○二難に曰關より尺に至るまでは
是れ尺内、陰の治る所也、關より魚際に至るまでは是れ寸口内、陽の治る所也と、然れば則ち關の前を寸と曰
ひ、關の後を尺と曰ふ、而て所謂關は乃ち尺寸の間に間して、陰陽の界限と爲す、正に掌後の高骨の處に當る
是れ也○滑伯仁が曰手の太陰の脉は中焦に由て出で行く、一路直に兩手大指の端に至る、其魚際の後一寸九分
を通して寸口と謂ふ、一寸九分の中に於て寸と曰ひ尺と曰て關其中に在り、其尺寸と云ふ所以の者は内外本末
對待を以て言を爲して、而て其名を分つ也と【下略】

尺脉診

尺外は以て腎を候ひ尺裏は以て腹を候ふ

△尺外とは尺脉の前半部也、尺裏とは尺脉の後半部也、前は以て陽を候ひ後は以て陰を候ふ、人身は背を以て
陽と爲す、腎は背に附く故に外は以て腎を候ふ、腹は陰と爲す、故に裏は以て腹を候ふ、所謂腹とは凡そ大小
腸、膀胱、命門皆其中に在り、諸部皆左右を言て而て腎獨り分たざる者は、兩尺皆腎を主るを以て也、藏府左
右の義は附翼三卷、脉候部位論及三焦包絡命門も同卷に詳鴻曰是れ長文也

中にして上に附くは、左の外は以て肝を候ひ、内は以て鬲を候ふ

△中にして上に附くとは、尺の上に附て中に居る者は、即ち關脉也、左の外とは、左關の前部を言ふ、内と
は、左關の後半部を言ふ、餘之に倣へ、肝は陰中の陽藏と爲りて而て亦背に附近す、故に外は以て肝を候ふ、
内は以て鬲を候ふ、鬲を擧て言へば、中焦の鬲膜、膽府皆其中に在り

右の外は以て胃を候ひ、内は以て脾を候ふ

△右關の前は胃を候ふ所、右關の後脾を候ふ所なり、脾胃は皆中州の官なり、表裏を以て言へば胃を陽と爲
し脾を陰と爲す、故に外は以て胃を候ひ内は以て脾を候る○按るに寸口は手の太陰也、太陰は氣を三陰に行る
故に曰三陰手に在て五藏を主ると、所以に本篇に止だ五藏を言ふて六府に及はず、即ち始終禁服等の篇も亦皆
寸口を以て三陰を候ひ、人迎は三陽を候ふ也、然して胃も亦府也、而て此に獨り胃を言ふは何そや、玉機眞藏
論に曰五藏は皆胃を氣に受く、胃は五藏の本也、藏氣は自ら手の太陰に至ること能はず、必ず胃氣に因て乃ち
手の太陰に至る也、故に胃氣を載せたる理を察す可し【中略】然れば此の篇止だ胃と言ふと雖も、六府の氣も亦

内外前後の義
は後文頭書を
見よ
六府は陽にし
て外也
府は陽にして
藏は陰也是れ
一定不變の理
也
人迎は頸に在
り
三陰外に胃を
言ふは何そや

六府の氣も亦見はる
寸口脈診

寸關に五藏配置の理由

人か南に面して立たる位置

上下前後内外の但し下文△印に諸説あり参閱

上脉診の身部下脉診の身部

此に見はれざる無し

上にして上に附くは右の外は以て肺を候ひ、内は以て胸中を候ふ

△上にして上に附くとは、上にして又上を言ふ則ち寸脉也、五藏の位、惟だ肺のみ最も高し故に右寸の前は以て肺を候ひ、右寸の後は以て胸中を候ふ胸中とは膈膜の上也

左の外は以て心を候ひ、内は以て臍中を候ふ

△心肺は皆臍上に居る故に左寸の前は以て心を候ひ、左寸の後は以て臍中を候ふ、臍中は兩乳間なり之を氣海と謂ふ、心包の居る所の分也○按るに本論五、藏應見の位、火は南に王す故に心は左寸に見はる、木は東に王す故に肝は左關に見はる、金は西に王す故に肺は右寸に見はる、土は中央に王す而て位を西南に寄す、故に脾と胃とは右關に見はる、此れ河圖五行の序也（鴻云此れ人か南に面して立ちたる位置）

前は以て前を候ひ、後は以て後を候ふ

△此れ重て上下内外の義を申て之を詳明にする也、統て之を言へば、寸を前と爲し、尺を後と爲す、分て之を言へば上半部を前と爲し下半部を後と爲す、蓋し上は以て上を候ひ下は以て下を候ふを言ふ

上にして上を竟すは胸喉中の事也、下にして下を竟すは少腹、腰股、膝脛足中の事也

△竟は盡也、上にして上を盡すとは、脉に在ては則ち魚際を盡し、體に在ては則ち胸喉に應ず、下にして下を盡すとは、脉に在ては則ち尺部を盡し、體に在ては則ち少腹足中に應ず、此れ脉、上下の事を候する也○按るに本篇の首に尺内を言ひ、次は中にして上に附て關を爲すを言ひ、又次は上にして上に附て寸を爲すと云ふ、

脉の内外本末輕重即ち尺脉を以て本と爲す

△印内外の二字と諸家の説

後世左手を小腸と爲し右手を肺大腸と爲すの誤を辨ず其意たる寸關と藏府の配置は因る者にあらざり

皆内よりして以て外に及ぶ者は、蓋し太陰の脉は胸より手に走るを以て、尺を以て根本と爲し、寸を枝葉と爲す也、故に凡そ人脉は、寧ろ根有て葉無る可きも、葉有て根無る可からず、論疾診尺篇の如き、曰其尺の緩急

浮大、滑濇、肉の堅脆を審にして、而て病形定ると是れ蓋し重する所本に在るのみ（鴻曰是れ第十八に詳也）○按るに本篇内外の二字諸家の註、皆内側外側と云ふ、夫れ内側外側と曰ふ者は、必ず脉形の扁濇にして或は兩條有る者は乃ち可なり、若し診者の指側と謂へば則ち本篇の文義は乃ち脉體を擧げ言ふなり、且つ診者の左の外

は則ち病者の右手也當に胃を候すと云ふ可く、肝を候と云ふ當からず、義に於て不通也、又下文の前は以て前を候ひ、後は以て後を候ひ、上にして上を竟し、下にして下を竟すか如き者、是れ皆内外の謂ひなり、易卦の六爻を觀るに、凡そ卦を畫する者は、下よりして上る、上の三爻を外卦と爲し、下の三爻を内卦と爲す、則ち上下内外の義明なり、又浮して取るを外と爲し、沈めて取るを内と爲す者有り、義に於て亦通づ、均く明者の辨正を俟つ○又按るに本篇上にして上を竟すとは、胸喉中の事を言ひ、下にして下を竟すとは、少腹足膝中の事を言ふ、分明に上は以て上を候ひ、下は以て下を候ふ、此れ自ら本經不易の理也、王氏の脉經に「心部は

左手の關前寸口に在りと是れ也、手の太陽と表裏を爲す、小腸を以て合して府と爲し上焦に會す、肺部は右手關前の寸口に在りと是れ也、手の陽明と表裏を爲す大腸を以て合して府と爲し上焦に合す」以て後人遂に左は心小腸、右は肺腸の配有ることを致す、下反て上に居る其謬ること甚し、其云ふ所に據るに、藏府の配合を以て此の如なるに過ぎず、豈に知んや、經表裏を分つや脉自ら同じからざることを、脾經の如き是より上行して腹に走る、胃經は頭より下行して足に走る、升降交通して以て陰陽の用を爲す、又豈に必ず上は則ち皆上、下は則ち皆下にして而て盡く一處に歸せんや、且つ秦漢以來未だ大小腸を以て兩寸に取る者有るを聞かず、扁鵲

仲景諸君の心傳考ふ可し、晋より今に及て此の謬り有り云々此の不經の言を創る者叔和に非ずして誰そ

第三 呼吸至數

○素問平人氣象論に黃帝曰平人何如ん

△平人とは氣平和の人、(鴻云即無病人)

岐伯曰一呼に脈再動し、一吸に脈亦再動し、呼吸定息に脈五動し閏するに太息を以てす命けて平人と曰ふ平人とは不病者なり

△出氣を呼と曰ひ、入氣を吸と曰ふ、一呼一吸を總て一息と名く、動は至也常人の脈は一呼に兩至、一吸亦兩至也、呼吸定息とは、一息既に盡て換息未だ起らざる際を謂ふ、脈又一至故に五動と曰ふ、閏は餘也閏月の如し【中略】此れ平人不病の常度なり然れば總計するに定息太息を合て一息に脈約六至なる可し故に五十營篇に曰呼吸定息脈行くこと六寸と乃ち一至か一寸に合す、呼吸脈行丈尺は經絡類二十六に見ゆ、鴻云是れ靈樞五十營篇常に不病を以て病人を調ふ、醫は不病なり故に病人の爲めに息を平けて以て之を調ふるを法と爲す

少氣の定義
病溫定義

(鴻云醫の息を準則と爲す) 人一呼に脈一動、一吸に脈一動を少氣と曰ふ

△常人の半に當る正氣衰竭也十四難に之を難經と云ふ

病風定義

人一呼に脈三動、一吸に脈三動して躁しく、尺熱するを病溫と曰ふ、尺熱せず、脈滑なるを病風と曰ふ、脈濇なるを痺と曰ふ

痺病定義

△躁は急疾なり、尺熱とは、尺中臂に近き處に熱有る者は、必ず通身皆熱す、脈數躁にして身有熱は病瘧とす、數滑尺不熱は陽邪盛也故に風を病む可し、然して風傷は其變一ならず獨り肌表に在るのみならず故に尺熱せず、濇は血不調也痺を病む當し、風痺二症の詳は疾病類本條に見ゆ、鴻云風は素問金匱真言論、同風論、同玉機真藏論、同熱論等痺は素問痺論、靈樞周痺篇、同經筋篇、素問四時刺逆從論等也、○脈法に曰滑は不濇也、往來流利す、濇は不滑也、雨の砂を霑すか如し、滑は血實氣壅と爲す、濇は氣滯血少と爲す

人一呼に脈四動以上を死と曰ふ、脈絶へて不至を死と曰ふ、乍ら疎に乍ら數を死と曰ふ

△難經に四至を脱精と曰ふ五至を死と曰ふ六至を命盡と曰ふ是れ皆一呼四至以上也、乍ら數乍ら疎は陰陽敗亂無主均く死脈

第四 五藏の氣脈に常數有り

○靈樞根結篇に曰一日一夜五十營して以て五藏の精を營す、數に應せざる者を名て狂生と曰ふ

一日一夜に脈五十周轉を常とす

△營は運也人の經脈の身を運行する一日一夜に五十周して以て五藏の精氣を營す、靈樞五十營篇の義なり、其數は周身上下左右前後凡て二十八脈、共に長さ十六丈二尺なり、人の宗氣は胸中に積み、呼吸を主て經隧を行く、一呼に氣行くこと三寸、一吸に氣行くこと三寸、呼吸定息に脈行くこと六寸を以て之を推せば、一晝夜凡て壹萬三千五百息なり、通計身を五十周す、則ち脈行くこと八百一十丈なり、其太過不及して、此の數に應ぜざる者を狂生と名く、狂は妄の意、生くと雖ども必ず可からざるを云ふ

氣口脈口寸口
三名一實也

代脈義解

所謂五十營すれば、五藏皆氣を受く其脈口を持て其至るを數ふる也

△其至を數れば藏氣の衰王知る可し脈口の義は藏象類十一に詳也、鴻曰是れ素問五藏別論也曰氣口五藏の主たり註に曰氣口其名三有り氣口脈口寸口也其實は一也

五十動して一代せざる者は五藏皆氣を受く

△代は更代の義なり、平脈中に於て忽ち軟弱或は乍ら疎、或は斷て復た起るを謂ふ、蓋し其藏に損所有れば、氣虧る有り、故に變易す、名て代と爲す、若し五十動して一代せざる者は、五藏氣を受ること皆足る乃ち平和の脈と爲す

四十動に一代する者は一藏に氣無し

一代は腎の無氣

△是れ一藏虧損する也○按るに十一難に曰經に言く、脈五十動に満ずして、一止するは、一藏氣無しとは、何の藏ぞや、答曰吸は陰に隨て入り、呼は陽に因て出づ、今吸、腎に至る能はずして、肝に至て還る、故に知ぬ一藏無氣は腎氣先づ盡くる也と、然則ち五藏和する者氣脈長く、五藏病む者は氣脈短し、此を觀れば一藏無氣は、必ず腎を先にす、下文に所謂二藏三藏四藏五藏は當に遠よりして近く、次を以て短なる可し、則ち腎より肝に及び、肝より脾に及び、脾より心に及び、心より肺に及ぶなり、故に凡そ病の危からんとする者は、必ず氣促りて喘に似、僅に胸中數寸の間に呼吸す、蓋し其眞陰下に絶し、孤陽上に浮ぶ、此れ氣短の極也、醫此の際に於ても、尙ほ之を平にし之を散せんと欲す、未だ撲に隨て滅せざる者有らず、良に哀む可し、夫れ人の生死は氣に由る、氣の聚散は陰に由る、而て殘喘以て尙ほ延ることを得る者は、一綫の氣の未絶に頼るのみ、此れ藏氣の察せざる可からざる所也

仲景叔和代脈の說

王氏の説同上

滑伯仁の説及結促代

三脈の辭

代脈は本篇の如き至數の代のみならず數種の相異なる代脈あるを辨

三十動して一代する者は二藏無氣なり、二十動して一代する者は三藏無氣なり、十動して一代する者は四藏無氣なり、十動に満ずして一代する者は五藏無氣なり之に短期を予ふ、要は終始に在り

△予は與と同じ、短期は死期也五藏無氣は死期を定む可し、終始は本經の篇名十二經終の義を具す

所謂五十動して一代せざる者を以て常と爲す也、以て五藏の期を知る、之に短期を予ふ者は、乍ら數、乍ら疎也

△以て常と爲すとは、人の常脈是の如し故に此に因て五藏の氣を察す可し、若し其短期を知らんと欲せば、乍ら數、乍ら疎に在り、云々三部九候論に曰乍ら疎乍ら數は死す○按るに代脈の義は仲景叔和より俱に云ふ、動て中止して自ら還る能はず、因て復た動く、脈代する者は死す、又曰脈五つ來て一つ止て復た増減せざる者は死す經に名て代と曰ふ、脈七つ來る是れ人一息半の時なり復た増減せざるも亦名て代と曰ふ正に死す疑はずと、故に王太僕が代脈を釋するも亦云ふ、動て中止して自ら還る能はざる也と、白後、滑伯仁、因て之を述て曰動て中止して自ら還る能はず、因て復た動く、是に由て復た止る、之を尋るに良久して乃ち復た強て起るを代と爲す、故に後世結促代を以て並へ言ふ、均く之を目て止脈と爲す、豈に以て其義を盡すに足らんや、夫れ緩にして一止するを結と爲す、數にして一止するを促と爲す、其至は則ち或は三或は五或は七八至にして等しからず、然れども皆至數分明にして起止力有り、主る所の病は氣逆痰壅に因て間阻を爲す者有り、血氣の虚脱に因て斷續を爲す者有り、生平稟賦の多滯に因て脈道流利せざる者有り、此れ自ら結促の謂也、代脈の辨に至ては則ち同からざる有り、宣明五氣篇の如き曰脾脈は代す、邪氣藏府病形篇には曰黃者は其脈代すと皆藏氣の常候を言ふ、代を謂て止と爲すに非ざる也、又平人氣象論に曰長夏は胃微にして稟弱を平と曰ふ但代にして胃

至數の代と形
體の代とあり
又氣候の代
り各其變に因
て其情を察す
可し

無きを死と曰ふ者は、乃ち胃氣去て眞藏見はる者を死と言ふて、代を謂て止と爲すに非らざる也と、此に由て之を觀れば代本と一ならず各々深義有り、五十動して一代せざるか如きは、乃ち至數の代なり。即ち本篇云ふ所是れ也、若し脉本と平均して、忽に強く忽に弱き者は、乃ち形體の代なり、即ち平人氣象論に云ふ所の者は是れ也、又脾は四季を主て、時に隨て更代するか若き者は、氣候の代なり、即ち宣明五氣等の篇に云ふ所の者は是れ也、凡そ脉に定候無く更變常ならざれば則ち均く之を代と謂ふ、但だ當に各々其變に因て其情を察す可し、庶くは其妙を得ん、設し此を明めざれば、唯だに經の大義を失ふのみに非ず、即ち脉象の吉凶に於て皆茫然として辨する所を知ること莫し、又烏んぞ以て診を言ふに足らん哉、二篇の詳義は後の十一及び疾病類二十五に見ゆ、(鴻曰十一は素問平人氣象論二十五は素問宣明五氣篇也、原註王氏説載せあるも略す)

第五 三部九候

○素問三部九候論に黄帝問曰余九鍼を夫子に聞く、衆多博大勝て、數ふ可からず、余願くは要道を聞て以て子孫に屬け之を後世に傳へ、之を骨髓に著し、之を肝肺に藏し、血を軟て而て受け、敢て妄りに泄さじ

鍼道は即ち天地の道也

△屬は付也著は紀也血を軟るは血を飲て誓ふ也、鴻云古人の道を重することは是の如し故に其學深を極む天道に合せしむるに必ず終始有り、上は天光、星辰歴紀に應じ、下は四時五行に副しめ、貴賤更る立ち、冬は陰に夏は陽に、人を以て之に應すること奈何ん、岐伯曰妙なる哉、天地の至數なり

至數の義

周易に見よ

五は一三三四
五七二九の
中央に位す

是れ大禹の洛書

黃鍾の數

奇は陽也偶は陰也參は陰陽の合也即太極也人最も貴し是を天地萬物の主と爲す天の御中主神是れ也

△天地の大萬物の衆も能く數を出る莫し故に至數と云ふ

帝曰願くは聞ん、天地の至數を人形血氣に合せ通して、死生を決することを、岐伯曰天地の至數は一に始て九に終ふ

△是れ天地自然の數也、易に太極有り兩儀を生ず、兩儀四象を出し四象八卦を生して、太極其中に運行するか如きは陽九の數也、又四象の位の如きは則ち老陽は一、少陰は二、少陽は三、老陰は四なり、四象の數は則ち老陽は、九少陽は八、少陰は七、老陰は六なり、一三三四を以て九八七六に連て而て五其中に居るも亦陽九の數也故に天を以て歳を言へば、一歳は四季を統べ一季は九十日を統ぶ是れ天の數の九也、地を以て位を言へば九を戴き一を履み三を左にし七を右にし二四を肩と爲し六八を足と爲し五は中宮に位す是れ洛書の九也、人を以て事を言へば黃鍾の數は九に起る、九にして之を九にすれば、九九八十一分にして、以て萬事の本と爲す、れ人事の九也、九數の外を十と爲す、十は復た變して一と爲る故に曰天地の至數は一に始て九に終ふと

一は天、二は地、三は人なり、因て之を三にす、三三は九なり、以て九野に應ず

△一は奇數也故に天に應ず、二は偶數也故に地に應ず、三は參也故に人に應ず、故に曰天は子に聞き、地は丑に聞き、人は寅に生ずと所謂三才也、三にして之を三にして以て九野に應ず九野とは即ち洛書の九宮なり、禹貢九州の義は詳に九宮星野等の圖に見ゆ、鴻曰禹貢九州は蓋し支那國內に洛書の九宮を配當せし者に過ぎず地球全體より見るときは洛書の九宮に因る可き者也

故に人に三部有り部に三候有り、以て死生を決し、以て百病を處し、以て虚實を調て邪疾を除く

天地人三才
三部三候の理
三部九候の診
を本法とす今
の寸口に三部
九候を配する
は後世の捷法
也

三部

△天地人を以て、上中下を言ふ之を三才と謂ふ、人身を以て上中下を言ふ之を三部と謂ふ、三部中に於て各々
其三を分つ之を三候と謂ふ、三にして之を三にす、是を三部九候と謂ふ、其通身の經隧此に由て出入す、故に
以て死生を決し百病を處し虚實を調て邪疾を除く○按るに三部九候は本經に於て明に人身上中下の動脈を指す
こと下文の如し、獨り寸口のみならず、仲景が脈法の如きも上は寸口を取り、下は跌陽を取る然るに十八難に
曰三部は寸關尺也、九候は浮中沉也と乃ち單に寸口を以て三部九候の診を分つ、後世皆之を宗とす、是れ診察
の捷法也 雖も黃帝岐伯の本旨に非ず學者詳にす可し

上部

帝曰何をか三部と謂ふ岐伯曰下部有り中部有り上部有り、部に各々三候有り、三候には天有り地有
り人有る也、必ず指して之を導く、乃ち真と爲す
△指して導くとは、師の指授を受け其真を得る也
上部の天は、兩額の動脈なり
△額傍の動脈、額脈の分に當る足の少陽脈氣の行く所也鴻曰瞻經

上部の地は兩頰の動脈なり
△即ち地倉大迎の分足の陽明脈氣の行く所也鴻曰胃經
上部の人は耳前の動脈なり
△即ち和髎の分手の少陽脈氣の行く所也鴻曰三焦經

中部

中部の天は手の太陰也

下部

下部は何を候
ふや
中部は何を候
ふや

△掌後寸口の動脈經渠の次、肺經脈氣の行く所也鴻曰次は位置也
中部の地は手の陽明也
△手の大指と次指の岐骨の間動脈、合谷の次、大腸經の脈氣の行く所也

中部の人は手の少陰也
△掌後の銳骨下の動脈、神門の次、心經脈氣の行く所也

下部の天は足の厥陰也
△氣衝の下三寸の動脈、五里の分、肝經脈氣の行く所也臥して之を取る、女子は太衝を取る、足の太指の本
節の後二寸陷中に在り

下部の地は足の少陰也
△内踝後へ跟骨の傍の動脈、太谿の分、腎經脈氣の行く所也

下部の人は足の太陰也
△魚腹の上越筋の間の動脈、五里の下箕門の分に直る沈で取れば乃ち之を得る、脾經脈氣の行く所也、若し胃
氣を候する者は當に足跗の上の衝陽を取可し(鴻曰是れ仲景
跌陽の脈也)

故に下部の天は以て肝を候ひ、地は以て腎を候ひ人は以て脾胃の氣を候ふ○帝曰中部の候奈何ん岐
伯曰亦天有り、地有り人有り天は以て肺を候ひ

△手の太肺經

地は以て胸中の氣を候ひ

△手の陽明は大腸脉也、大腸小腸は皆胃に屬す、胃脘は胸中に通ず故に以て胸中を候ふ、鴻曰前の「中部の地は手の陽明也」とあるを参照會得す可し

人は以て心を候ふ

△手の少陰は心經也

帝曰上部は何を候ふや岐伯曰亦天有り亦地有り、亦人有り、天は以て頭角の氣を候ひ、地は以て口齒の氣を候ひ、人は以て耳目の氣を候ふ

上部は何を候ふや

△天は兩額、地は兩頰、人は耳前の動脈の故に

三部は各々天有り各々地有り各々人有り、三にして天を成し、三にして地を成し、三にして人を成す、三にして之を三にす、合すれば則ち九と爲る、九分れて九野と爲り、九藏と爲る、故に神藏五つ形藏四つ合て九藏を爲す

以下九野九藏

△九野の義解は前に在り、九藏は即ち上文九候の謂なり、神藏五とは肝は魂を藏し、心は神を藏し、肺は魄を藏し、脾は意を藏し、腎は志を藏する也、形藏四とは頭角、耳目、口齒、胸中なり、共に九藏と爲す、此れ人の九藏は地の九野に應じ天地至數の九に合するを云ふ也

五藏已に敗れば其色必ず天す、天すれば必ず死す

△色は神の幟、藏は神の舍なり、天とは枯暗不澤の色にて常に異なり

以下候法及び治法を述ぶ

帝曰以て候すること奈何ん岐伯曰必ず先づ其形の肥瘦を度りて、以て其氣の虚實を調ふ、實すれば之を寫し、虚すれば之を補ふ

古今診治の疎密

△虚實補寫は終始篇、九鍼、鍼解篇等を見る可し、此れ鍼法を以て言を爲すも、藥治も類推す可し○按るに上古鍼治の法、必ず三部九候を察して以て九藏を調ふ、今人但だ穴を按して以て、病を求め、諸經虚實の理に於ては茫然として知らず、神醫の出でざる其本を失ふに在り

必ず先づ其血脉を去て而後に之を調ふ

△凡そ瘀血の脉に在て壅塞を爲す者は、必ず刺し去て、後に虚實を調ふ

其病を問ふこと無く平を以て期と爲す

△凡そ病甚き者は奏功し易からず、故に其効の遲速を問はず血氣平和を以て期則と爲す可し、後の二十五と五に究む可し

第六 素問 七診

○素問三部九候論に岐伯曰九候を察するに、獨り小者は病む、獨り大者は病む、獨り疾者は病む、獨り遲者は病む、獨り熱者は病む、獨り寒者は病む、獨り陷下者は病む

七診

△此れ九候中に復た七診の法有るを言ふ、謂る脉其常を失て獨大獨小等皆病の在る所也、獨寒獨熱は其或は上

七診の異説を駁す

に在り或は下に在り或は表に在り或は裏に在るを謂ふ也、陷下は沈伏不起也、此れ三部九候を以て言を爲すと雖も、而も氣口部位に於て類推して用を爲すも亦此の法なり○此れと後の二十五と同篇なり七診の義並に考ふ可し（鴻曰風病と月經と七診に似て） 按るに七診の法は本と此の篇に出づ然るを勿聽子、謬あやまりて七診は診平且に宜し一也、陰氣未動二也、陽氣未散三也、飲食未進四也、經脈未盛五也、絡脈調勻六也、氣血未亂七也と謂ふ、夫れ此の七者焉いづくそ之を診と謂ふを得ん、平且の診法のみ、後世謬り傳て其本源を失ふ、鴻曰平且診法は第一に載す

第七 診に十度有り、診に陰陽有り

○素問方盛衰論に曰診に十度有りて人を度る、脉度、藏度、肉度、筋度、俞度なり

△診法十度有れども而も總て陰陽を外にせず、十度とは脉、藏、肉、筋、俞を五度と爲す左右各二有り合て十度也、脉度は經脉、脉度篇等の如し、藏度は本藏、腸胃、平人絶穀篇等の如し、肉度は衛氣失常篇等の如し、筋度は經筋篇の如し、俞度は氣府、氣穴、本輸篇等の如し、度は數也

陰陽氣盡して、人の病自ら具はる

△此の十度は人身陰陽の理之を盡せり、故に人の疾病も亦此に具見せざる無し

脉動常無く、散陰頗陽、脉脱して具らざるは診に常行無し

△脉動常無しとは、脉に常體無きを云ふ、散陰頗陽とは、陰氣散失する者は、脉頗る陽に類する也仲景の如き曰若し脉浮は氣實して血虚す、叔和曰諸の浮脉無根は皆死す、又曰表有て裏無きは死すと、謂いはる眞陰散して孤陽在り、脉頗る陽に似て、無根は、眞陽の脉に非らず、此れ脉の脱する所有て陰陽全く具らず、此を診する者は、陰陽の常法を以て行ふ可からず、蓋し其慎む可きを云ふのみ

診に必ず上下あり、民と君卿とを度る

△貴賤尊卑、勞逸異有り、美食と粗食と氣質不同あり、故に民と君卿と區別して診す可し

師に受ること卒つぐまざれば、術をして不明ならしむ、逆從を察せず是を妄行と爲す、雌メを持ち雄を失ひ陰を棄て陽に付き、診を并合せすることを知らず、故に不明なり

△卒は盡也雌雄は陰陽なり、生氣通天論に曰陰陽離決すれば精神絶すと、故に善く診する者は、其陰を見て必ず其陽を察し、其陽を見て必ず其陰を察す、陰陽逆從の理、并合の妙を知らざるは、庸醫のみ、診何ぞ明を得ん

之を後世に傳れば、反論自から章あははる

△理既に不明にして妄に後世に傳れば、其謬言反論、終に必ず自ら章露すあはる鴻曰醫書を作る者古の道に由らずして私見を弄すれば天下後世の人命を害する至大也恐れ慎まざる可からず、禍必ず其子孫に及ぶ

至陰虚すれば、天氣絶し、至陽盛なれば、地氣不足す

△至陰至陽は天地の道也、設し垂離有れば、敗亂乃ち至る、六微旨大論に曰氣の升降は天地の更用也、升り已

貴賤診異り

て降る、降る者を天と謂ふ、降り已て升る、升る者を地と謂ふ、天氣下降して、氣地に流く、地氣上升して、氣天に騰る、故に易に地氣の天上に在るを以て泰と爲す、其交るを言ふ也、天氣の地上に在るを否と爲す、其不交を言ふ也、地に至陰虚すとは、地氣若し衰て升らず、升らざれば則ち以て降ること無し、故に天氣絶するを云ふ也、至陽盛なりとは、天氣若し充りて降らず、降らざれば則ち以て升ること無し故に地氣不足す、蓋し陰陽の二氣互に其根を藏し更る用を相爲して偏廢す可らず、此れ天地自然の道を借て、以て人の陰陽和を貴ふことを喻す也○丹溪か陽常に有餘、陰常に不足の説は本篇の説に違へり

陰陽並ひ交るは、至人の行ふ所なり

△並ひ交るとは、陰陽其和を得る也此れ至人の行ふ所、調攝の妙、鴻曰其本く所は「陰陽應象大論に所謂陰陽なる者は天地の道也、萬物の綱紀、變化の父母、生殺の本始、神明の府也、病を治る之を本に求む」と云ふに在り又堯舜の執中、孔門の至善中庸及び我が天御中主神皆是れ也

陰陽並ひ交る者は、陽氣先づ至り、陰氣後に至る、是を以て聖人診を持つるの道、陰陽を先後して之を持つる

△陰陽の道は、陽は動き陰は靜に、陽は剛、陰は柔、陽は倡へ陰は隨ふ、陽は施し陰は受く、陽は升り陰は降る、陽は前み陰は後る、陽は上み陰は下も、陽は左陰は右、脈數を陰と爲し脈遲を陰と爲す、表は陽、裏は陰至は陽、去は陰、進は陽退は陰、發生は陽收藏は陰、陽行は速陰行は遲、故に陰陽並ひ交る者は陽先づ至て陰後に至る、是を以て聖人の診は陰陽の先後を察して其精要を測るに在り、鴻曰現代の人男女同權を云ふ者此の大自然を知らず此を以て人倫敗れ家道廢れ子孫に正人乏し嘆す可し

奇恒の勢、乃ち六十首、合微の事を診し、陰陽の變を追ひ、五中の情を章にす、其中の論、虚實の要を取て、五度の事を定む、此を知れば乃ち以て診するに足る

△奇は異也恒は常也、六十首は即ち禁服篇に所謂九鍼六十篇に通するの義なり今其傳を失ふ、合微の事を診すとは、諸診の法を參へて其精微を合する也、陰陽の變を追ふとは、陰陽盛衰の變を求る也、章は明也、五中は五藏也、五度は前文の十度也必ず能く此の數者を合して其妙を參伍すれば以て診を言ふに足る

是を以て陰を切して陽を得ざれば、消亡と診す、陽を得て陰を得ざれば、學を守て湛ならず、左を知て右を知らず、右を知て左を知らず、上を知て下を知らず、先を知て後を知らず、故に治久しからず

△陰を切して陽を得ざれば消亡と診すとは、人生陽を以て主と爲す、其陽を得ざれば何を亡ひざるを得ん、陰陽別論に曰陰は眞藏也見はるれば敗を爲す、敗すれば必ず死す、陽は胃院の陽也と平人氣象論に曰人胃氣無れば死す、脈に胃氣無きは死すと皆此の陽を言ふなり、湛は明也、若し唯陽を得ることを知て、陽中に陰有り、及び陰平に陽秘するの道を知らずば、之を偏に其學を守ると爲す、亦不明に屬す、左右上下先後の如き皆陰陽の道也、左右を知らざれば則ち升降の理を知らず、上下を知らざれば則ち清濁の宜を明めず、先後を知らざれば緩急の用を明めず、何ぞ其久安長治して萬世殆からざるを望まんや鴻云陰平に陽秘すとは、色欲を節すれば腎臓の水火調和平穩なる類を云ふ、左右を知らざれば升降の理を知らずとは、地氣は左より升り天氣は右より降るの類、上下を知らざれば清濁の宜を明めずとは、天は清く地は濁の類を云ふ

學を守るは變通の才なきを謂ふ

醜を知り善を知り、病を知り不病を知り、高を知り下を知り、坐するを知り起つを知り、行くを知り止るを知り、之を用るに紀有れば、診道乃ち具り、萬世殆からず

△凡そ此の數者は皆對待の理有り、若し之に差ふ毫釐なれば、千里を謬る、故に凡そ病の善惡、形の動靜皆辨す可し、能く此の義を明め用れば、紀有り診道備る故に萬世殆きこと無て、紀は條理也殆は危也
有餘する所に起て、不足する所を知る

△起は興起也其意、有餘を治せんとするには、其不足を察す可し、邪氣多くは有餘し、正氣多くは不足す、若し只其有餘を知て、其不足を忘れれば敗を取る、是れ根本を慎む可きを教ゆ

事の上下を度れば、脉事因て格る

△能く形情の高下を度れば、脉事之に因て格り至て知る、鴻曰格は至極の意

是を以て形弱く氣虚すれば死す

△中外皆敗る

形氣有餘し脉氣不足は死す

△外貌恙無く藏氣已に壞る

脉氣有餘、形氣不足は生く

△藏氣傷れざる者は形衰るも害無し、根本を主と爲す也、三部九候論の如き曰形肉已に脱すれば、九候調ふも猶ほ死す、と蓋し脱と不足と自ら同じからず、而て形肉既脱は脾元絶す、故に脉氣調ふも不治、當に此の節と

互に其意を求む可し

第八 診に大方有り

○素問方盛衰論に曰(前篇に連る)是を以て診に大方有り、坐起常有り

△大方は醫家の大法也坐起常有りとは、舉動苟もせず、先づ其身を正ふす、身、外に正しければ、心も正しに診法は必ず先づ身を正ふす

出入行ひ有て以て神明を轉ず

△行は德行也醫は人を活すを以て心と爲す、出。入。時。に。於。て。念。念。皆。眞。に。し。て。一。も。敬。せ。ざる。無。れ。ば。德。能。く。天。を。動。し、誠能く心を格す、故に轉運周旋して往くとして神にあらざる無し、鴻曰格は正也論語の格物是れ也

必ず清に必ず淨に、上に觀、下に觀る

△清淨なれば心志專一にして神明見はる、然後ち、上は以て其神色聲音を察し、下は以て其形體逆順を觀る

八正の邪を司ひ、五中の部を別にす

△司は候也、別は審也、八節八風の正邪を候て、以て其表を察し、五藏五行の部位を審にして、以て其裏を察す

脉の動靜を按じ、尺の滑濇、寒溫の意を循で

△脉の動靜を按して、陰陽を別つ、滑濇寒溫以て虚實を知る、凡そ脉滑なれば則ち尺の皮膚も亦滑なり、脉濇

診の大方は醫の德行神明

なれば則ち尺の皮膚も亦濇なり、寒温も亦然り故に尺を循て以て之を知る可し
其大小を視て、之を病能に合す

△大小は二便也二便は約束の門戸なり、門戸要ならざれば、則ち倉廩藏せず、守を得る者は生き、守を失ふ者は死す、故に大小便を視て以て病情に合す、能は情状也鴻云能は態

逆從以て得、復た病名を知る(逆從は逆順也)診十全なる可くして、人情を失はず

△診上法の如くなれば、十全なる可し其人情に於て尤も失ふ可からず○按るに人情を失はざるは、醫家の最難事なり、人情の説三有あり一に曰病人の情、二に曰傍人の情、三に曰同業醫の情也、鴻云原註之を説くこと極めて詳なり就て見る可し長文なり今略す

故に之を診するに或は其息を視、意を視る、故に條理を失はず

△息を視るとは、呼吸を察して、其氣を觀る、意を視るとは形色を察して其情を觀る云々故に條理を失はず、條は幹に枝あるか如く、理とは物に脈有るが如し、即ち脈絡綱紀を云ふ

道甚だ明察なり故に能く長久なり、此の道を知らざれば、經を失ひ理を絶ち、言を亡うしなひ、妄に期す、此を道を失ふと謂ふ

△此の道を知らざれば言を失ひ妄に期して危し

第九 脈を四時陰陽規矩に合す

○素問脈要精微論に帝曰脈其れ四時に動くこと奈何ん、病の所在を知ること奈何ん、病の所變を知ること奈何ん、病乍たまたまち内に在るを知ること奈何ん、病乍たまたまち外に在るを知ること奈何ん、此の五者を請ひ問ふ、岐伯曰請ふ其天の運轉と與に大なるを言ん

△凡そ此の五者は即ち陰陽五行の理なり、而て陰陽五行は即ち天地の道なり、故に天の運轉大中には五者の變動を具す

萬物の外、六合の内、天地の變、陰陽の應あり、彼の春の暖は夏の暑と爲り、彼の秋の忿うらみは冬の怒と爲る、四變の動、脈之れと與に上下す

△天地萬物は本と一氣なり故に天地の變は即ち陰陽の應なり是を以て春の暖は夏暑の漸もよと爲り、秋の忿は冬怒の漸と爲る、春は生し夏は生し秋は收め冬は藏す、是れ即ち陰陽四變の動、而も脈も亦之に隨て上下す

以て春の應は規に中り

△規は圓を爲すの器なり、春氣發生圓活して動くを云ふ、脈之に應じて圓滑す

夏の應は矩に中る

△矩は方を爲すの器なり、夏氣茂盛、盛極て止む、故に應矩に中る脈之に應じて洪大方正

秋の應は衡に中る

△衡は平なり秤は横也、秋氣は萬寶俱に成て地面に平なり、故に應、衡に中る、脈之に應じて、浮毛にして外に見はる

人情失はざる
は醫の最難事

冬の應は權に中る

△權は秤錘也冬の氣は閉藏す故に應は權に中る、脈之に應じて沉石にして内に伏す、凡そ此の規矩權衡は皆陰陽升降の理を發明して、以て四時脈氣の變象に合す

是の故に冬至四十五日に、陽氣微に上り、陰氣微に下る、夏至四十五日に陰氣微に上り、陽氣微に下る、陰陽時有り、脈と期を爲す期にして相失ふ、脈の分つ所の如し、之を分つ期有り、故に死時を知る

△冬至に一陽生ず、故に冬至後四十五日、以て立春に至るまで陽氣漸を以て微に上る、陽微に上れば則ち、陰微に下る、夏至に一陰生ず、故に夏至後四十五日以て立秋に至るまで、陰氣漸を以て微に上る、陰微に上れば則ち陽微に下る、此れ所謂陰陽時有り也、脈と期を爲すとは、脈が時に隨て變遷する也、期して相失ふとは、春規夏矩秋衡冬權の度に合はざるを謂ふ也、脈の分つ所の如しとは、五藏の脈各々屬する所有るを謂ふ也、之を分つ期有りとば、衰王各々其時有るを謂ふ也、此を知る者は死生の時を知る
微妙は脈に在り、察せざる可からず、之を察るに紀有り、陰陽より始む、之を始るに經有り、五行より生ず、之を生するに度有り、四時を宜と爲す

△脈の微妙は亦只陰陽五行之れが經紀を爲す、而て陰陽五行の生ずる、各々其度有り、陽は冬至に生じ、陰は夏至に生じ、木は亥に生じ、火は寅に生じ、金は巳に生じ、水土は申に生ずるが如し、此れ四時生王各々其宜有る也、紀は綱紀也經は常也即ち大綱小紀の義

天地陰陽の消長脈之に従ふ

補寫は天地と一なる可し

補寫失ふこと勿れば天地と一の如し

△天地の道は、有餘を損して不足を補ふなり、易に曰天道盈を虧て謙に益す、地道盈を變して謙に流すと故に不足は則ち補ふ可く、有餘は則ち寫す可し、補寫其宜を失はざれば、天地の道と一の如し

一の精を得て以て死生と知る

△一の精は天人一理の精微也、天地の道たる陽は動を主り、陰は靜を主る、陽來れば生じ陽去れば死す故に死生を知る

是の故に聲は五音に合せ、色は五行に合せ、脈は陰陽に合す

△聲は宮商角徵羽に合せ、色は金木水火土に合せ、脈は四時陰陽に合す、三者分ち有るが若きも其理は一也是故に脈を持るに道有り、虛靜を保と爲す

△脈を持るの道は一念精誠、最も擾亂を嫌ふ、故に必ず其心を虚にし、其志を靜にす、纖微も間無くして診全し、保は不失也

春日は浮、魚の遊て波に在るが如し

△脈春氣を得て浮動すと雖ども而も末だ全く出でず、故に魚の遊て波に在るか如し

夏日は膚に在り泛泛として萬物餘り有り

△脈夏氣を得れば外に洪盛なり故に泛々として萬物有餘の如し鴻曰泛は字典浮也流也

秋日は膚に下る蟄蟲將に去んとす

脈診の要訣

蟄は冬虫の土に蟄伏する也

冬日は骨に在り、蟄蟲周密の如く君子室に居る

△脈冬氣を得て沉伏骨に在り、故に蟄蟲の周密の如く、君子此の時亦天地閉藏の道を體して室に居る可し、鴻曰君子とは此の處にては富貴の人を指す

故に曰内を知る者は按して之を紀し、外を知る者は終て而て之を始む、此の六者は脈を持つるの大法なり

△内は藏氣を言ふ、藏象位有り故に按して之を紀す可し、外は經氣を言ふ、經脈序有り、故に終て而て之を始む可し、然して必ず此の四時内外六者の法を知れば、脈の時に動き、病の所在、及び病變の内外、皆得て知る可し故に脈を持つるの大法と爲す

第十 四時の藏脈、病に太過不及有り

春脈及病

○素問玉機真藏論に黃帝問曰春脈は弦の如しと何如して弦なるや岐伯曰春の脈は肝也東方の木也、萬物の始て生する所以也、故に其氣の來る奥弱輕虛にして滑なり、端直にして以て長し、故に弦と曰ふ、此に反する者は病む

△弦は端直に以て長く、狀弓絃の如くして有力也、然も奥弱輕虛にして滑かなれば、弦中に自ら和意有り、肝藏之を主る。○扁鵲曰春脈弦とは、肝は東方の木也、萬物始て生して、末だ枝葉有らず、故に其脈の來る濡弱に

して長し、故に弦と曰ふ○更軟同し

帝曰何如して反するや岐伯曰其氣の來る實して強き此を太過と謂ふ、病、外に在り、其氣の來る不實にして微、此を不及と謂ふ、病、中に在り

△其氣の來る實にして強は弦の過也、其氣の來る不實にして微は不及也皆之を弦脈の反云ふ、太過は病外に在り、不及は病中に在るは蓋し外病は多く有餘、内病は多く不足此れ其常也下も此に準ず

帝曰春脈太過と不及と其病皆何如ん岐伯曰太過なれば則ち人をして善く怒らしむ、忽忽として眩胃して而て巔疾す、其不及は則ち人をして胸痛て背を引かしむ、下は則ち兩の脇脹滿つ

△原書忘今怒に作る、本神篇、氣交變大論皆怒に作る、忽忽は恍忽不爽也、胃は悶味也、巔疾は頂巔の疾也足の厥陰の脈は巔上に會して膈を貫き脇肋に布く故に病此の如し○脇は音區腋下の脇也

○帝曰夏脈は鉤の如しと何如して鉤なる、岐伯曰夏の脈は心也、南方の火也、萬物の盛長する所以也、故に其氣來ること盛に、去ること衰ふ、故に鉤と曰ふ、此に反する者は病む

△鉤は指を擧れば來ること盛に、去る勢衰るに似たり、蓋し脈が外に盛にして、而て去るときは則ち力無し、陽の盛也、心藏之を主る○扁鵲曰夏脈鉤とは、心は南方の火也、萬物の所茂、枝を垂れ葉を布く皆下曲りて鉤の如し、故に其脈の來ること疾く、去ること遅し故に鉤と曰ふ

帝曰何如して反する岐伯曰其氣來ること盛に、去ることも亦盛なる之を太過と謂ふ、病、外に在り、其氣來ること不盛、去ること反て盛、此を不及と謂ふ病、中に在り

夏脈及病

△來去俱に盛は鈞の過也、其來不盛、去、反て盛は鈞の不及也皆鈞脉の反と爲す、去ること反て盛とは、強盛の謂に非ず、凡そ脉は骨肉の分よりして、皮膚の際に出るを來と謂ふ、皮膚の際より骨肉の分に還るを去と謂ふ、來ること不盛、去ること盛とは、來は則不足、去は則ち有餘なり、即ち消多くして長少しの意なり、故に扁鵲、春肝夏心秋肺冬腎に於て皆實強を以て太過と爲し、病外に在り、虛微を不及と爲し病、内に在りと爲す、辭異にして意は同し

帝曰夏脉太過と不及と其病皆何如ん岐伯曰太過なれば則ち人をして身熱し膚痛て浸淫を爲さしむ、其不及は則ち人をして煩心せしむ、上は欬唾を見はし、下は氣泄を爲す

△夏脉太過は陽有餘にして病、外に在り故に身熱膚痛して形體に浸淫流布せしむ、不及なれば君火衰て病、内に在り、故に上は心氣不足して煩心し、虛陽が肺を侵して欬唾す、下は固からずして氣泄を爲す、本經の脉は心中に起り、出て、心系に屬し、膈を下て小腸に絡ひ、又心系より却て肺に上るを以ての故也

○帝曰秋脉は浮の如しと何如して浮なるや岐伯曰秋脉は肺也、西方の金也、萬物の收成する所以也、故に其氣來ること輕虚にして以て浮ふ、來ること急に、去ること散ず、故に浮と曰ふ、此に反す者は病む

△浮は輕虚也、來ること急に、去ること散とは秋時は陽氣尙は皮毛に在るを以て也、肺藏之を主る○扁鵲曰秋脉毛とは、肺は西方の金也、萬物の終る所、草木華葉皆秋にして落ち其枝獨り在て毫毛の若し、故に其脉の來る輕虚にして以て浮ぶ、故に毛と曰ふ

帝曰何如して反するや岐伯曰其氣來ること毛にして中央堅く、兩傍虚す、此を太過と謂ふ病、外に在り、其氣來ること毛にして微、此を不及と謂ふ、病、中に在り

△中央堅は浮にして中堅也、凡そ浮にして太過、浮にして不及は、皆浮の反にして病の内に在り、外に在ると前文と同じ

帝曰秋脉太過と不及と其病皆何如ん、岐伯曰太過は人をして逆氣して、背痛て愠愠然たらしむ、其不及は人をして、喘し、呼吸少氣して欬し、上氣し血を見はし、下、病音を聞かしむ

△肺脉は中焦に起り下て大腸に絡ひ、還て胃口を循り、膈に上て肺に屬す、其藏背に附く、故に太過すれば逆氣壅を爲して、背痛て外に見はる、愠愠は悲鬱の貌、其不及は喘欬短氣す、氣が原に歸せず故に上氣す、陰虚内損す、故に血を見る、下病音とは喘息すれば喉下に聲有るを云ふ

○帝曰冬脉は營の如しと何如して營なるや岐伯曰冬脉は腎也北方の水也、萬物の合藏する所以也、故に其氣の來ること沉にして以て搏つ、故に營と曰ふ、此に反する者は病む

△營は營壘也、士卒の聚て散せざるか如し、亦沉石の義也、腎藏之を主る○扁鵲曰冬脉石とは腎は北方の水也、萬物の藏する所也、盛冬の時水凝て石の如し、故に其脉の來ること沉濡にして滑、故、石と曰ふ、又甲乙經にも沉にして濡に作る

帝曰何如して反するや、岐伯曰其來ること石を弾くが如くなる者、此を太過と謂ふ病、外に在り、其去ること、數の如くなる者、此を不及と謂ふ病、外に在り

△石を弾くか如しとは、其至る堅強、營の太過也、其去る數の如しとは、動止疾速、營の不及也、蓋し數は熱に屬す、此れ眞陰虧損の脉、亦必ず緊數なり、然て愈々虚すれば愈々數なり原と陽強實熱の數に非ず、故に數の如しと云ふ、則ち辨析の意深し若し之を誤れば大害生す云々

帝曰冬脉太過と不及と其病皆何如ん、岐伯曰太過は人をして解解し、脊脉痛て少氣し、言を欲せざらしむ、其不及は人をして心懸て懸餓を病むか如く、眇中清へ脊中痛み、少腹滿ち小便變せしむ、帝曰善し

△太過は陰邪勝つ也故に腎氣傷れ眞陽虚す、故に四體懈懈怠し、舉動精ならず是を解解と謂ふ、脊痛は腎脉の至る所也、腎は精を藏す、精傷れば氣無し、故に少氣にして言を欲せず、皆病の外に在る也、其不及は眞陰虚す故に心腎交らず心懸て怯く怯餓を病むか如し、季脇の下空軟の處を眇中と曰ふ腎の傍也、腎脉は脊を貫き腎に屬し膀胱に絡ふ、故に脊痛腹滿小便變等の症を爲す、變とは黄赤或は遺淋を爲し或は癃閉癃閉の類を爲す、腎水不足に由て然り、是れ皆病の中に在る也

脾脉及病

○帝曰四時の序は逆從の變異也然して脾脉獨り何をか主る

△上文肝心肺腎の脉を言ふ而て其逆從の變自ら皆異なり、然て脾も亦一藏なり故に問ふ

岐伯曰脾脉は土也、孤藏にして四傍に灌灌く者也

△脾は土に屬す、土は萬物の本なり、水穀を運行し津液を化し以て肝心肺腎の四藏に灌灌溉する者也、土には定位無く中央に位して分て四季に王す、故に孤藏と爲す詳は藏象類七に見ゆ、鴻曰此れ素門太陰陽明論也

帝曰然らば則ち脾の善惡之を見ることを得可きや、岐伯曰善者は見るを得可からず、惡者は見る可し

△脾無病なれば四藏安し故に見るを得ず、脾病めば四藏も亦隨て病む、故に惡候見はる

帝曰惡者何如して見る可きや、岐伯曰其來ること水の流るか如くなる者此を太過と謂ふ、病、外に在り、鳥の喙鳥の喙の如き者此を不及と謂ふ、病、中に在り

△水の流るか如しとは、滑にして動く也、鳥喙とは鋭にして短也、一本喙を喙喙に作る

帝曰夫子言脾は孤藏と爲す中央の土、以て四傍に灌くと、其太過と不及と其病皆何如ん、岐伯曰太過なれば人をして四支舉らざらしむ、其不及は人をして九竅通せざらしむ、名て重強と曰ふ

△脾土太過の病は外に在り、故に四支舉らず、脾四支を主て、濕之に勝つを以て也、不及の病は中に在り故に九竅不通す、脾氣弱ければ、四藏皆弱くして、氣行かざるを以て也、重強は柔和ならざる貌沉重拘強也○按るに本篇脾脉水の流るか如きを太過と爲す、然るに平人氣象論には水流れの如きを脾死すと曰ふ、一は太過を言ひ一は危亡を言ふ、詞同くして意異なり、豈に辨する所無らんや、蓋し水流の狀滔滔として洪盛は太過也、淺く疾くして返らざるは將に竭んとする也、均く之を流と云ふも、一は盛、一は危なり、詳に其狀を別つ可し、又太過四支不舉は此れ外に在るの標症、概して之を言へば太過なり、若し脾虚して濕に勝つ能はざる者は、豈に太過ならんや

帝瞿然として起て再拜し稽首して曰善し、吾脉の大要を得たり、天下の至數、五色、脉變、揆度、奇

恒、道一に在り

△瞿然くわは敬肅の貌、道一に在りとは、至數脉變多きも理は一のみ、鴻曰道は千差萬別なり其要は之を一に歸するに在り、然るに現代科學に溺れ更に之を歸納して一と爲す者を見ず國の政に於るも亦同し嗚呼是の如くにして何ぞ天下國家を利し疾病を治するを得ん

神轉かへじて廻かへらず、廻かへれば則ち轉せず、乃ち其機を失ふ

△神は即ち生化の理、不息の機也、五氣循環して其序ついでを愆あやらす、是を神轉かへして廻かへらすと爲す、若し却しよきて廻返すれば、其常候に逆て運轉する能はず、乃ち生氣の機を失ふ、鴻曰一言に約すれば天地運行の如くならざれば其機を失す

至數の要は迫近にして以て微なり

△至數の要は即ち道の一なるに在り、是れ誠に人身に切近して最も精微也〔下略〕

第十一 脉四時を分つ胃無きを死と曰ふ

○素問平人氣象論に曰平人の常は氣を胃に稟く、胃は平人の常氣也（鴻曰平人とは無病の人）○人胃氣無きを逆と曰ふ、逆する者は死す

△土は天地中和の氣を得て萬物を長養し分て四時に王す、而て人の胃之に應ず、平人は氣を穀に受け胃氣を生じ藏府を養ふ一刻も無る可からず、無れば則ち逆と爲す逆すれば死す、玉機眞藏論に曰脉弱にして以て滑、是れ

四時王とは四季の土用に其氣盛也

春の胃

凡そ王とは其旺盛を云ふ也

此の義下の本文を見て詳にす可し

春の胃は微弦を平と曰ふ、

胃氣有り、又終始篇に曰邪氣の來る緊にして疾とし、穀氣の來る徐にして和すと是れ皆胃氣の謂なり、大都、脉時宜かほりてに代て太過不及無く、一種緩和の狀有り、是れ胃氣の脉（鴻曰代は代表の意）

△春令は木王す其脉當に弦なる可し、只微弦にして太過に至らざるに宜し是れ春の充和故に平と云ふ弦の義は前章○按るに此の前後の諸篇皆春弦夏鉤秋毛冬石を以て四季に分屬する者は、或は春にしし鉤を見は是れ夏脉、毛を見は是れ秋脉、石を見は是れ冬脉、變に因て病を知る也之を圓活する人に有り、故に二十五變の妙有り、若し春は必ず弦、夏は必ず鉤と謂ふは殊に胃氣の精義を失ふ

弦多く胃少きを肝病と曰ふ

△弦多きは弦に過る也胃少とは和緩少き也、是れ肝邪の勝、胃氣の衰、故に肝病と爲す

但だ弦にして胃無きを死と曰ふ

△但だ弦急にして充和の氣無き者は春時の胃氣既に絶して肝の眞藏見はる故に死と云ふ

胃にして毛有るを秋病と曰ふ

△毛は秋脉と爲す、金に屬す、春時之を得る是を賊邪と爲す、胃氣尙ほ存するを以て秋に至て而て後病む

毛甚きを今病と曰ふ

△春脉毛甚は木か金傷を被るなり故に必しも秋に至らず即今病む

藏眞、肝に散ず、肝は筋膜の氣を藏す

夏の胃

△春は木が事を用ゆ其氣升散す、故に藏眞の氣肝に散す、而て肝の所藏は則ち筋膜の氣也、金匱眞言論に曰東方の青色入て肝に通ず是を以て病の筋に在るを知る(鴻云藏眞肝に散すの語之を後文夏秋冬の結文に照し)

○夏の胃は微鉤を平と曰ふ

△夏令は火王す其脉當に鉤なる可し但た微鉤にして太過に至らざるに宜し、是れ夏胃の和を得る故に平と云ふ鉤多く胃少きを心病と曰ふ

△鉤多は太過也云々義前に同し

但だ鉤にして胃無きを死と曰ふ

△是れ平和の氣無く夏時胃氣絶し眞藏見はる故に死す

胃にして石有るを冬病と曰ふ

△石は冬脉也水に屬す夏時之を得る是を賊邪と爲す、胃氣尙ほ存するを以て、冬に至て後ち病む

石甚きを今病と曰ふ

△夏脉石甚は胃氣無し、火が水に傷れる已に深し、故に必しも冬に至らして即今病む

藏眞、心に通ず、心は血脉の氣を藏す

△夏は火が事を用ゆ、其氣炎上す、故に藏眞の氣心に通ず、心の藏する所は血脉の氣也、金匱眞言論に曰南方の赤色入て心に通ず是を以て病の脉に在るを知る

○長夏の胃は微突弱を平と曰ふ

長夏の胃

△長夏は土に屬す未を建すの六月を主ると雖も、然も實は辰戌丑未なる四季の月を兼て言ふ、四季に土王する時の脉當に突弱なる可し、但た微突弱にして太過に至らざるに宜し、是れ長夏胃氣の和緩を得る、故に平と云ふ鴻曰長夏は夏の土用也

突弱多く胃少きを脾病と曰ふ

△弱多く胃少きは弱に過て胃氣不足す、土王する時を以て之を得る故に脾病と云ふ

但だ代のみにして、胃無きを死と曰ふ

△代は更代也脾は四季を主る、脉、當に時に隨て更る可し、然も必ず皆和突を兼て脾脉の平を得るを欲す、若し四季相代て而て但だ弦、但た鉤、但た毛、但だ石なるを、但た代にして胃無しと云ふ是れ眞藏を見はす也故に死と曰ふ○代脉の詳義は本類前四章及疾病類二十五に見ゆ鴻云二十五は素問宣明五氣篇也

突弱にして石有るを冬病と曰ふ

△石は冬脉と爲し水に屬す、長夏の陽氣正に盛にして沉石の脉を見はす、火土の氣衰て水反て乘するを以て也故に冬に至て病む

石甚きを今病と曰ふ

△原書石を弱に作る今改む、長夏石甚は火土の大衰也故に必しも冬に至らず即今病む

藏眞、脾を濡す、脾は肌肉の氣を藏す

△長夏は濕土が事を用ゆ、其氣濡潤、故に藏眞の氣、脾を濡す、而て脾の所藏は肌肉の氣也○金匱眞言論に曰

中央の黄色入て脾に通すと、是を以て病の肉に在るを知る

○秋の胃は微毛を平と曰ふ

△秋令は金が王す、其脉當に毛なる可し、但た微毛にして太過に至らざるに宜し云々毛は脉來ること浮濇にして羽毛の輕虚に類す

毛多く胃少きを肺病と曰ふ

△是れ金氣勝て和緩の氣少き也

但だ毛のみにして胃無きを死と曰ふ

△是れ秋時の胃氣既に絶て肺の眞藏見はる故に死す

毛にして弦有るを春病と曰ふ

△弦は春脉と爲す木に屬す、秋時之を得るは金氣衰て木反て乘する也、故に春木の王時に至て病む

弦甚きを今病と曰ふ

△秋脉弦甚は金氣の大衰にして木、畏れ寡し、故に必しも春に至らず即今病む

藏眞、肺に高して以て榮衛陰陽を行ふ

△秋は金が事を用ゆ、其氣清肅なり、肺は上焦に處る故に藏眞の氣が肺に高し、肺は氣を主る、而て營は脉中を行き衛は脉外を行く者皆肺より宣布す、故に以て營衛陰陽を行ふと云ふ

○冬の胃は微石を平と曰ふ

△冬令は水が王す、脉當に沉石なる可し、但だ微石にして太過せざるに宜し云々石とは脉來ること沉實、石の水に沉むか如し

石多く胃少きを腎病と曰ふ

△是れ水氣の偏勝にして水反て土に乗す

但た石にして胃無きを死と曰ふ

△是れ冬時胃氣既に絶て腎の眞藏見はる、鴻竊に謂らく四時の諸脉に胃氣無きは樹木か皮膚 總て剥き取れて枯死するに同じ

石にして鉤有るを夏病と曰ふ

△鉤は夏脉也冬時之を得るは、水氣衰て火氣反て侮る也、故に夏火王する時病む

鉤甚きを今病と曰ふ

△是れ水氣大衰し、火畏れ寡し、故に夏を待たず即今病む

藏眞、腎に下る、腎は骨髓の氣を藏す

△冬は水が事を用ゆ、其氣閉藏す故に藏眞の氣が腎に下る而て腎の所藏は骨髓の氣也○金匱眞言論に曰北方の黑色入て腎に通すと是を以て病の骨に在るを知る

○胃の大絡を名て虚里と曰ふ、鬲を貫き肺に絡て、左の乳下に出づ、其動衣に應ず、脉は宗氣也

△土は萬物の母と爲す故に上文四時の脉皆胃氣を以て主と爲す、此には胃氣の出る所の大絡を言ふ、名て虚里

大に動て衣に
應ずるは病也
常に然るに非
らず後文を讀
て知る可し

と曰ふ其脉、胃より膈を貫き上りて肺に絡ふて而て左の乳下に出づ、其動衣に應ず、是を十二經脉の宗と爲す。故に脉の宗氣と曰ふ也宗は主也本也蓋し宗氣膈中に積て水穀を化して胃より出づる也、經脉篇に載る所十五絡、此を并せて共に十六絡なり又脾の陰土たる義は疾病類五十二に詳なり鴻曰此れ素問歎論也

盛に喘し數く絶する者は則ち病中に在り
△若し虚里動甚くして喘の如き或は數く急に於て、兼て絶斷するは、中氣守らざるに由て然り故曰病中に在りと結つて横て積有り

△胃氣の出る必ず左の乳下に由る、若し停阻有れば結て横りて積と爲る、故に凡を癥を患る者、多くは左肋の下に在り、胃氣の積滯に因る、五十六難に曰肝の積を肥氣と曰ふ、左の脇下に在りと、蓋し左右上下を以て分て五行に配して言ふのみ、而て實に胃氣の主る所也

絶して至らざるを死と曰ふ

△虚里脉絶は宗氣絶也必死す

乳の下、其動の衣を應ずるは宗氣泄れる也

△前に衣に應ずと言ふは其微動して衣に應ずるに似たるを言ふ、虚里の胃氣を驗す可し、此に衣に應ずと言ふ者は其大に動て眞に衣と俱に振ふか若きは宗氣固らずして大に外に泄る中虚の候也○按るに虚里跳動は最も虚損の病本と爲す、故に凡そ陰虚勞怯を患れば則ち心下多く跳動す、及び驚悸慌張を爲すは、其證なり、人止だ其心跳を知て、虚里の動なるを知らず、動の微者は病尙ほ微なり、甚者は病甚し、此に因て病の輕重を察す可

虚里の大動

虚里跳動は虚損勞病の症

肺結核適藥と
思惟す症實に
相似たり

し、凡そ此を患る者余常に純甘、壯水の劑を以て眞陰を填補す活者多し、然して經には右の如く宗氣の泄と言ふ、余は眞陰の虚と言ふ其説左するに似たり、知らざる者は必ず謬誕と謂はん、然れども、今其義を述べんに穀、胃に入て以て肺に傳ふ、五藏六府皆以て氣を受く、是れ胃氣に由て上りて宗氣と爲る也、氣は水の母と爲す、氣聚れば則ち氣生ず、是れ肺氣に由て下りて腎水を生ずる也、今胃氣之を肺に傳て、而て腎虚して納ること能はず、故に宗氣上に泄れば則ち腎水下に竭く、腎愈々虚すれば、氣愈々歸する所無くして、陰愈々虚す、氣と水と類を同ふす、當に相濟す可し、故に氣を納れて原に歸せんと欲せば、只陰を補ふて、以て陽に配する一法有る也、鴻云是の故に古人多く六味丸八味丸四物湯の類を以て此の類症を治せり

第十二 四時に逆從して胃無きも亦死す

○素問平人氣象論に岐伯曰脉、陰陽に從へば病已易し、脉、陰陽に逆へば病、已難し

△陰病に陰脉を得、陽病に陽脉を得るを從と謂ふ已へ易し、脉と病と相反するを逆と爲す已へ難し

脉、四時の順を得るを、病他無しと曰ふ、脉、四時に反むき及び藏を問ざるを、已へ難しと曰ふ

△春弦を得、夏鉤を得るか如きを四時に順ふと云ふ已へ易し、脉四時に反する及び藏を問ざるを、已へ難しと云ふ、藏を問ずとは木が土に乗すれば、則ち肝病、脾に傳へ、土が水に乗すれば、則ち脾病、腎に傳るの類の如き、皆其勝つ所に傳ふ、相假借せず、脉と症と此を得るを鬼賊と名く、其氣相殘へば病必ず甚し、若し其勝つ所の藏を問て、而て其生する所に傳ふ、之を間藏と謂ふ、肝が脾に傳ずして、心に傳へ、心が肺に傳へずし

傳病間藏及び
不問藏

て、脾に傳るか如き、其氣相生ず、病むと雖も微なり、故に標本病傳論に曰間者は并び行くと、間藏を指し言ふ也、甚者は獨り行くと、不間藏を指して言ふ也、又五十三難に曰七傳する者は死す、間藏する者は生くと、七傳とは其所勝に傳ふる也、間藏とは其所勝の藏を間て相傳ふ也云々又玉璣眞藏論に曰五藏病有れば、則ち各々其勝つ所に傳ふ、治せざれば、法三月若くは六月若くは三日若くは六日五藏に傳て當に死す可しと、是れ所勝に傳ふの次、即ち此れ不間藏の義也藏象類二十四に詳、鴻曰此れ素問玉璣眞藏論也

脈、四に逆從する有りて、未だ藏形有らざれども、春夏にして脈瘦せ、秋冬にして脈浮大なるを、四時に逆ふと曰ふ

△逆は反也從は順也、凡そ脈の四時に逆從する者は、未だ眞藏の形あら見はれずと雖も、若し春夏木火の令を以て、脈當に浮大なる可きに、反て瘦小を見はし、秋冬金水の令を以て、脈當に沉細なる可きに、反て浮大を見はす者は、是れ皆四時に逆ふ也

風熱にして脈靜に、泄して脱血し脈實は、病、中に在りて脈虛は、病外に在り、脈濇堅は皆治し難し命なつて四時に反すと曰ふ也

△風熱は陽邪也脈大なる可きに反て靜、泄して脱血は其陰を傷る也脈虛なる可きに反て實す、病、藏中に在れば脈當に有力なる可きに反て虛は、病、肌表に在り、脈當に浮滑なる可きに反て濇堅は皆相反難治の症と爲す、亦猶ほ脈の四時に反するか如き也

人は水穀を以て本と爲す故に人水穀を絶てば則ち死す、脈胃氣無きも亦死す、所謂無胃氣とは但だ

無胃氣

春夏に脈小秋冬に脈大は逆也其他の逆候

望聞問切の四診及早治

眞藏の脈を得て、胃氣を得ざる也、所謂脈胃氣を得ざる者は、肝弦ならず、腎石ならず

△胃氣は水穀を本と爲す、五藏又胃氣を以て本と爲す、脈に胃氣無く、眞藏の脈見はる者は死す、即ち前篇の所謂但だ弦にして胃無く、但だ石にして胃無き類也、然て但弦但石は眞藏なれども、若し肝無氣なれば、則ち弦ならず、腎無氣なれば、則ち石ならず、亦五藏胃氣を得ずして然り眞藏無胃と等しきのみ

○素問玉璣藏論に黄帝曰凡そ病を治る、其形氣色澤、脈の盛衰、病の新故を察して、乃ち之を治して、其時に後ること無れ

△是れ六十一難の所謂望聞問切の法也既に病情を得ば速治す可し若し其時に後るれば病必ず日に深し切に戒む形と氣と相得る之を治す可しと謂ふ

△形盛に氣盛、形虛に氣虛是れ相得る也

色澤ふて以て浮あふ之を已いへ易しと謂ふ

△澤は潤也浮は明也顔色明潤者病必ず已へ易し

脈四時に從ふ之を治す可しと謂ふ、脈弱にして以て滑なる、是れ胃氣有り命なつて治し易しと曰ふ、之を取るに時を以てす

△穀氣の來る徐にして和す故に脈弱にして滑は胃氣有る也

形と氣と相失ふ之を難治と謂ふ

△形盛に氣虛し、氣盛に形虛す

難治の候

治す可き病候

色天し不澤、之を已へ難しと謂ふ

△天は晦惡也、不澤は枯焦也

脈實し以て堅き之を益々甚しと謂ふ

△邪氣の來る緊にして疾し故に然り

脈、四時に逆ふを不可治と爲す

△脈四時に逆ふの義下文の如し

必ず四難を察して明に之を告ぐ

△以上の四難を病家に明告す庶くは後の怨無けん

所謂四時に逆ふ者は、春に肺脈を得、夏に腎脈を得、秋に心脈を得、冬に脾脈を得るなり、其至る

こと皆懸絶、沉澹なる者を命て四時に逆ふと曰ふ

△春肺脈は金か木を尅する也、夏腎脈は水か火を尅する也、秋心脈は火か金を尅する也、冬脾脈は土か水を尅する也、之に懸絶沉澹を加れば則ち陰陽偏絶して、復た充和の胃氣無し、是れ四時に逆ふ脈

未だ藏の形有らざれども、春夏に於て脈沉澹、秋冬にして脈浮大なるを四時に逆ふと曰ふ也、病熱して脈靜に、泄して脈大に、脱血して脈實は病中に在り、脈實堅は病外に在り

△此の節上文平人氣象論と略ほ同じ、只病、中に在て脈實堅、病外に在て脈不實堅なる者、皆治し難しの文、上文平人氣象論に病、中に在りて脈虚、病外に在て脈澹堅なる者治し難し」と相反するに似たり、上文に「病

前後に於る經文の相反するに似て其實は皆理あることを論ず

中に在て脈虚と云ふは、内積の實する者は脈虚に宜しからざるを言ふ也、今此に病中に在て「脈實堅」と云ふは、内傷の虚者は脈實堅に宜しからざるを云ふ也又前に病外に在て「脈澹堅」と云ふは、外邪の盛者は、澹堅に宜しからざるを云ふ、澹堅は沉陰たるを以て也、今此に病外に在て脈不實堅と云ふは、外邪方に熾なる者は、無力に宜しからざるを云ふ、不實堅は無陽たるを以て也、四者の分、總て皆正か邪に勝ざるの脈なり、故に難治と曰ふ、詞相反するか若くして、理は則ち實に然り、新校正に以て經の誤りと謂ふは、未だ其妙に達せざるのみ、鴻云本註の要旨は盛陽に虚脈、虚病に實脈は形と氣と相失ふを以て之を難治と云ふに在る可し即ち前文に形氣相失ふ之を難治と謂ふとあり

第十三 五藏平、病、死の脈、胃氣を本と爲す

○素問平人氣象論に曰夫れ平心の脈來ること累累として連珠の如く琅玕を循るか如くなるを心平と曰ふ

△琅玕は玉にして光有る者也又曰珠に似たり、脈來て手に中る連珠の如く、琅玕の如しとは、其盛滿滑利を言ふ即ち微鉤の義也、心の平脈と爲す、前篇に脈四時に分て已に五藏平病死脈を悉し、而て此には詳に其形を言ふ、夏は胃氣を以て本と爲す

△鉤にして和

病心の脈、來ること喘喘として連屬し、其中微に曲るを心病と曰ふ

肺脈の形

△喘喘連屬は急促相仍る也其中微曲は即ち鉤多く胃少き義

死心の脈、來ること前へ曲り、後へ居て、帶鉤を操るか如きを心死と曰ふ

△操は持也前曲とは、軽く取れば則ち堅強にして柔ならざるを謂ふ、後居とは、重く取れば則ち牢實にして動かざるを謂ふ、帶鉤を操るか如しとは、全く充和の氣を失ふ、只鉤にして無胃也

○平肺の脈、來ること厭厭、聶聶として榆莢を落すか如くなるを、脾平と曰ふ

△厭厭聶聶は衆苗齊く秀る貌也榆莢を落すか如しとは、輕浮和緩の貌即ち微毛の義也

秋は胃氣を以て本と爲す(毛にし)病肺の脈來ること、上らず下らず、雞羽を循か如くなるを肺病と曰ふ

△上らず下らずとは、往來滯滞也、雞羽を循るか如しとは、輕浮にして虚也、毛多くして胃少き義

死肺の脈來ること、物の浮ぶが如く、風の毛を吹くか如きを、肺死と曰ふ

△物の浮ぶか如しとは、空虚にして無根也、風の毛を吹くか如しとは、散亂して無緒也、但だ毛にして無胃の義

○平肝の脈來ること、栗弱にして招招たり長竿の末梢を掲ぐか如きを肝平と曰ふ

△招招は猶ほ迢迢の如き也掲は高く長竿を掲ぐれば梢必ず柔栗即ち和緩弦長の義、鴻曰迢は字典音條迢迢は高き貌

春は胃氣を以て本と爲す(弦にし)病肝の脈來ること盈實にして滑、長竿を循るか如きを肝病と曰ふ

肝脈の形

脾脈の形

△盈實にして滑は弦の甚過也、長竿を循るか如しとは、末梢の和栗無き也、弦多胃少の義

死肝の脈來ること急にして益々勁く新に張れる弓弦の如きを肝死と曰ふ

△勁は強急也、新張弓弦の如しとは弦の甚き也但だ弦にして無胃

○平脾の脈來ること和平、相離れ、雞の地を踐か如きを、脾平と曰ふ

△和平は雍容として迫らず、相離とは勻淨分明也、雞の地を踐む如しとは、從容輕緩也、即ち充和の氣亦微して栗弱の義(雍は和也)

長夏は胃氣を以て本と爲す(栗にし)病脾の脈來ること實して盈數、雞の足を舉るか如きを脾病と曰ふ

△實にして盈數は強急不和也、雞の擧足の如しとは輕疾にして不緩也、前篇には弱多く胃少しと言ふ、此には實にして盈數と言ふ、皆中和の氣を失ふ

死脾の脈來ること銳堅にして、鳥の喙の如く、鳥の距の如く、屋の漏の如く、水の流の如きを脾死と曰ふ

△鳥の喙の如く鳥の距の如しとは堅銳不柔を云ふ、屋の漏の如しとは、點滴無倫也、水の流の如しとは、去て返らざる也是れ皆脾氣絶して怪脈見はる、亦但だ代にして無胃の義

○平腎の脈來ること、喘喘累累として鉤の如く、之を按して堅きを腎平と曰ふ

△冬脈は沉石、故に之を按して堅し、若し石に過れば、則ち沉伏して振はず、故に喘喘累累として心の鉤の如

腎脈の形

し、陰中に陽を藏して微石を得るの義

冬は胃氣を以て本と爲す(石にし)病腎の脈來ること葛を引くか如く、之を按して益々堅きを腎病と曰ふ

△葛を引くか如しとは、堅、搏牽連也之を按して益々堅は、石甚にして不和也、石多く胃少き義

死腎の脈來る、發すること、索なわを奪ふか如く、辟辟として、石を弾くか如きを腎死と曰ふ

△索相奪へは其勁きこと甚し、辟々石を弾くか如しとは、其堅きこと甚し、即ち但だ石にして無胃の義○按るに十五難に載る所の平病死脈本經と互に異同あり云々十五難の所載必ず誤り有らん、難經の義原と本論より出づ。當に本論を以て主と爲す可し

第十四 三陽の脉體

穀雨は四月廿九日頃

○素問平人氣象論に曰太陽の脈至る洪大にして以て長し

△此れ人の脉氣必ず天地陰陽の化に隨て卷舒ちんじゆするを云ふ也、太陽の氣は穀雨の後六十日に王す、是時陽氣太盛なり故に然り

少陽の脈至る乍ち數、乍ち疎、乍ち短、乍ち長

△少陽の氣は冬至の後六十日に王す、是時陽氣尙ほ微にして陰氣未だ退かず、故に長數は陽と爲す、疎短は陰と爲す、而て進退未だ定らず

陽明の脈至る浮大にして而て短

雨水は二月十九日頃

脱簡と七難

△陽明の氣は雨水の後六十日に王す、是時陽氣未だ盛ならず陰氣尙ほ存す故に脉浮と雖も仍ほ短を兼ね○按るに此の論但だ三陽を言ふて、三陰に及はず、諸家疑て脱簡と爲す者是れ也、七難を闕るに陰陽俱に全し、曰少陽の至る、乍ち大、乍ち小、乍ち短、乍ち長」陽明の至る、浮大にして短」太陽の至る、洪大にして長」と此れと皆同じ(鴻曰本經には乍大乍小の字無し)太陰の至る緊大にして長」少陰の至る緊細にして微」厥陰の至る沉短にして敦」と此れ三陰三陽の辨なり、乃ち氣令必然の理なり、蓋し陰陽更變有れば脉必ず時に隨へば也七難又曰其氣何月を以て各々王すること、幾日そと云ふに、冬至の後ち甲子を得て少陽王す」復た甲子を得て陽明王す復た甲子を得て太陽王す復た甲子を得て太陰王す」復た甲子を得て少陰王す」復た甲子を得て厥陰王す」各々六十日なり、六六三百六十日以て一歳を成す、此れ三陽三陰の時日大要也、此の二説に據れば則ち節を逐て之を推して知る可し○又至眞要大論に曰厥陰の至は其脉弦」少陰の至は其脉鉤」太陰の至は其脉沉」少陽の至は大にして浮」陽明の至は短にして濇」太陽の至は大にして長」と此れと不同有るか若きは何ぞや、蓋し此の篇は寒暑を以て陰陽を分ち、彼れば六氣を以て陰陽を分ては也、觀る者宜く各々其義を解す可し、詳は運氣類三十二に詳なり、鴻曰此れ素問至眞要大論也

第十五 六經獨至、病脉分治

○素問經脉別論に曰太陽の藏、獨り至れば厥し喘し虚氣逆す、是れ陰不足して、陽有餘也表裏當に

本經と至眞要大論と不同あるか如きもる觀察點異なるのみ

俱に寫す可し、之を下愈に取る

△此れ藏氣和せずして、一藏太過有れば、氣必ず獨り至る、諸症同じからず、鍼治亦異也、太陽は膀胱經也、太陽の獨至は、厥逆を爲し、喘氣を爲し、虚氣が上に衝逆す、蓋し膀胱と腎とは表裏たり、皆水藏也、水藏を以て陽氣獨り至れば、則ち陽有餘にして、陰不足す、當に二經に於て、其下愈を取る可し、膀胱の下愈は束骨と名く腎經の俞は太谿と名く、腎陰不足して亦之を寫するは、陽邪俱に盛なるを以て也、故に必ず表裏兼寫して、而て後に其熱を遏む可し

○陽明の藏、獨り至る、是れ陽氣重て并はず也當に陽を寫し、陰を補ふ可し、之を下愈に取る

△陽明は足の陽明胃經也陽明は十二經脉の海と爲て、氣を三陽に行ふ、若し其獨至は則ち陽氣が邪に因て、重て本藏に并す、故に胃の陽を寫し、脾の陰を補て、之を下愈に取る可し、陽明の俞は陷谷と名く太陰の俞は太白と名く

○少陽の藏獨り至るは是れ厥氣也、蹻の前へ卒に大なり、之を下愈に取る

△少陽は足の少陽膽經也膽經の病は肝に連る、其氣善く逆す、故に少陽獨至は厥氣也、然て厥氣は必ず足下に始る、故に蹻の前に於て之を察す、蹻は陽蹻也、足の太陽經の申脉に屬す、陽蹻の前は乃ち少陽の經なり、少陽氣盛なれば、蹻の前卒に大なり、故に少陽の下愈と取る可し穴名臨泣

○少陽獨至は一陽の過也

△此れ獨至の義を釋す、一藏の太過を擧て言ふときは、太陽陽明の獨至は其三陽二陽の太過たること知る可

○太陰の藏搏者は心を用て、眞を省る、五脉の氣少く胃氣不平は三陰也、宜く其下愈を治して、陽を補ひ陰を寫す可し

△太陰は足の太陰脾經也搏は堅強の謂、即ち下文の所謂伏鼓也、大陰脾脉は本と和緩を貴ふ、今鼓搏を見はすは、眞藏脉に類す、若し眞藏脉見はるれば死す、故に心を用て其眞を省す可し、今太陰の藏搏は即ち太陰の獨至なり、太陰の獨至は則ち五藏の脉氣俱に少ふして、胃氣も亦不平也、是を三陰の太過と爲す、故に宜く其下愈を治し、足の陽明の陷谷を補ひ、足の太陰の太白を寫す可し」鴻曰三陰は太陰也

○二陰獨り嘯くは少陰の厥也、陽、上に并せ四脉争ひ張り、氣、腎に歸す、宜く其經絡を治し、陽を寫し陰を補ふ可し

△原書の一陽は二陰に作る可し、少陽は少陰に作る可しと、故に今皆改作せり」二陰は足の少陰腎經也、獨嘯は獨り熾なる也、蓋し嘯は陽氣の發する所、陽は陰中より出つ、相火上炎すれば、則ち少陽熱厥して陽、上に并す、故に心肝脾肺の四脉爲めに、争張して其氣腎に歸す、故に獨嘯と曰ふ、宜く其表裏の經絡を治して、足の太陽を寫し、足の少陰を補ふ可し、太陽の經穴は崑崙と名く絡穴は飛揚と名く、少陰の經穴は復溜と名く絡穴大鍾と名く

○一陰至るは厥陰の治也、眞虚し疢心し、厥氣留薄し、發して白汗を爲す、食を調べ藥を和す、治、

下俞に在り

此篇皆足經也
熱論傷寒は足
經のみなが
如し
調食和藥其他
補寫の如き上
文を通して適
用す可し古經
略多し
鴻云藥治灸治
も亦上文の理
に準す可き歟

△一陰は足の厥陰肝經也、至は即ち獨至也、治は主也、肝邪獨至すれば、眞氣必ず虚す、木と火と相犯す、故に心、痛痛爲す、厥氣は逆氣也、逆氣散ぜざれば則ち留て經に薄る、氣虚して固らざれば、則ち表に白汗を爲す、藥食を調和する、其宜きを得んことを欲す、鍼治は乃ち其下俞に在り、厥陰の俞は太衝と名く痛音淵、酸疼○按るに此篇何を以て皆足經を言ふことを知るかと云ふに、下俞の二字を以て知る也、亦た熱論篇傷寒に足を言て、手を言はざるの義の如し」又諸經皆補寫を言ふて只少陽一陰言はざる者は少陽を以て三陽を承て言ふ、一陰、三陰を承て言ふ、前に因て後を貫くの義實に相同し、虚は補ひ實は寫す皆理會す可しき也、一陰に調食和藥を云ふか若きに至ては、蓋し總て上文を結して言ふ、獨り一經のみ然るにあらず、古經略多し當に其意を會す可し」鴻云之に由て之を觀れば鍼治の理は之を藥治灸治に推及す可し、灸治の法、詳悉を欠くが如き蓋し之れが爲め也

帝曰太陽の藏は何の象ぞ岐伯曰三陽に象て浮也、帝曰少陽の藏は何の象ぞ岐伯曰一陽に象る也一陽の藏は滑にして不實也、帝曰陽明の藏は何の象ぞ岐伯曰象太た浮也

△以下復た六經獨至の脉象を明す也、太陽の三陽に象る者は陽の極也故に脉、外に浮ぶ」少陽の一陽に象る者は、少陽は陽の裏、陰の表と爲す、所謂半表半裏にして、陽の微也、故に滑と雖も不實なり、陽明は太陽の裏と雖も、而も實に少陽の表なり、之を滑にして不實の者に比すれば、則ち大にして浮なり○仲景曰尺寸俱に浮は太陽の受病也、尺寸俱に長は陽明の受病也、尺寸俱に弦は少陽の受病也と義參會す可し

上文太

六經獨至の脉象

陰搏の解

少陰搏至
脱簡
少陰受病厥陰受病

諸病を寸口尺にて診す

○太陰の藏搏とは伏鼓を言ふ也

△此れ即ち上文太陰藏は、搏つと云ふ義を釋す、伏鼓とは沉伏して鼓擊す即ち堅搏の謂なり○仲景曰尺寸俱に沉細は太陰受病也

二陰搏て至れば腎沉て浮ならず

△二陰は少陰腎經也二陰搏て獨至とは、腎但だ沉て浮ならざるを言ふ也、二陰の脉を言て而て前に二陰の至無し、前に一陰の至有て而て此に一陰の脉無し、信に古經の脱簡と爲す、而て上文一陽少陽の誤は即ち此の節也○仲景曰尺寸俱に沉は少陰受病也、尺寸俱に微緩は厥陰受病也、

第十六 寸口尺脉諸病診 (鴻謂く此の法甚だ簡易の如し)

○素問平人氣象論に曰寸口の太過と不及とを知らんと欲す、寸口の脉、手に中る、短なるを頭痛と曰ふ

△寸口は氣口也詳に藏象類十一に見ゆ鴻云此れ素問五藏別論也其註曰寸口氣口脉口三名實一也」短は陽の不及と爲す、陽不及なれば陰之に湊まる故に頭痛す、一に曰短は下に短なり、脉か下に短なれば、邪か上に并す故に頭痛す

寸口の脉、手に中る長なるを足脛痛と曰ふ

△長は陰不足と爲す、陰不足なれば陽之に湊る故に足脛痛む

寸口の脉、手に中ること促にして上み撃つ者を肩背痛と曰ふ

△脉來る急促にして上部、手を撃つ者は陽邪、上に盛也故に肩背痛と爲す

寸口の脉沉にして堅き者を病、中に在りと曰ふ

△沉は裏に在りと爲す、堅は陰實と爲す故に病中に在り

寸口の脉浮にして盛なる者を病外に在りと曰ふ

△浮は表に在りと爲す、盛は陽強と爲す故に病外に在り

寸口の脉沉にして弱を、寒熱及び疝瘕少腹痛と曰ふ

△沉は陽虚と爲す、弱は陰虚と爲す、陽虚すれば外寒し、陰虚すれば内熱す、故に寒熱と爲す也然して沉弱の脉は多し陰少陽なり、陰寒下に在り、故に疝と爲し、瘕と爲し少腹痛と爲す、下文に曰脉急なる者を疝瘕少腹痛と曰ふと、此れと参看す可し、瘕は積聚也

寸口の脉沉にして、横なるを、脇下に積有り、腹中に横積痛有りと曰ふ

△横は急數也、沉は内に在るを主る、横は積有るを主る、故に脇腹に積有て痛む○仲景曰積は藏病也終に移らず、聚は府病也、發作、時有り、展轉して痛み移るは治す可しと爲す、諸積の大法、脉來ること細にして骨に附く者は積也、寸口は積、胸中に在り、微に寸口を出ば積、喉中に在り、關上は積臍の傍に在り、關上には積心下に在り、微に關を下らば積少腹に在り、尺中は積、氣衝に在り、脉左に出るは、積左に在り、脉右に出るは、積右に在り、脉兩に出るは、積中央に在り、各々其部を以て之に處す

寸口の脉沉にして喘を寒熱と曰ふ

積の所在部

△喘は急促也脉沉にして喘は熱、内に在る也、熱内に在て、寒熱を爲す、即ち諸禁、鼓慄皆火に屬するの謂

(鴻云原病式に曰禁は冷也俗慄に作る類註) 曰寒逆牙を咬を嚙と曰ふ又説文曰口閉)

脉盛に滑堅なる者は、病外に在りと曰ふ

△陽脉にして堅故に病外に在り

脉小實にして堅なるは病内に在り

△陰脉にして堅故に病内に在り

脉小弱にして以て濇之を久病と謂ふ

△小弱は氣虚、濇は血少し病久ふして然り

脉滑浮にして疾き者之を新病と謂ふ

△滑にして浮は陽脉也而て疾は邪盛也新病と爲す

脉急なるを疝瘕、少腹痛と曰ふ

△弦急は陰邪盛なり故に疝瘕少腹痛と爲す

脉滑を風と曰ふ

△滑脉流利は陽也風の性は動く亦陽也故に然り

脉濇を痺と曰ふ

△濇は陰脉と爲す血不足也故に痺を病む當し

緩にして滑を熱中と曰ふ

△緩は胃熱に因る、滑は陽強を以て也故に熱中を病む、啓玄子曰緩は縦緩の状を謂ふ動の遲緩に非ず盛にして緊を脹と曰ふ

△盛なれば則ち中氣滯り、緊なれば則ち邪有餘故に脹を爲す

臂に青脈多きを脱血と曰ふ

△血脱すれば氣去る、氣去れば寒凝て青黒なり即ち是れ尺診の義

尺脈緩濇之を解俯と謂ふ

△尺は陰分を主る緩は氣衰と爲す濇は血少と爲す故に當に解俯を病む可し、解俯は困倦状し難き名也、鴻曰解俯の義前の第十にも見ゆ又類經十六卷同三十二卷にも見ゆ

安臥して脈盛を脱血と謂ふ

△凡そ脈盛は邪必ず盛なり、邪盛なる者は、臥必ず不安也、今脈盛にして臥安きは、氣分の陽邪に非ずして、陰虚脱血なるを知る也、此れ亦上文尺脈を承て言ふ、凡そ尺脈盛は、多くは陰虚す、故に當に脱血す可し

尺濇に脈滑なる之を多汗と謂ふ

△尺膚濇て而て尺脈滑を謂ふ也、尺膚濇は營血少き也、尺脈滑は陰火盛也、陽盛に陰虚す故に多汗と爲す、陰陽別論に曰陽、陰に加る之を汗と謂ふ

尺寒へ脈細之を後泄と謂ふ

△尺膚寒は脾の陽衰ふ、脾は肌肉四肢を主るを以て也、尺脈細は腎の陽衰ふ、腎は二陰下部を主るを以て也、脾腎虚寒す故に後泄を爲す

後文第十八に尺膚粗なる枯魚の鱗の如しとあり

○脈尺麤く常に熱する者之を熱中と謂ふ

△尺粗は眞陰不足と爲す、常熱は陰火有餘と爲す故に熱中す(鴻曰尺診後の十七七八參閱)

第十七 三診六變、尺と相應(鴻曰く)

○靈樞邪氣藏府病形篇に黄帝問て曰余之を聞けり、其色を見て其病を知るを命けて明と曰ふ、其脈を按して其病を知る命けて神と曰ふ、其病を問て其處を知る命けて工と曰ふ、余願くは聞見して之を知り、按して之を得、問て之を極めんことを、之を爲すこと奈何ん

△色を見るとは、其容貌の五色を望む也、脈を按すとは其寸口の陰陽を切する也、病を問ふとは其所病の緣因を問ふ也是の三者を知るを明と曰ひ神と曰ひ工と曰ふ而て診法盡く○六十一難に曰望て之を知るを神と謂ふ、問て之を知るを聖と謂ふ、問て之を知るを工と謂ふ、脈を切して之を知るを巧と謂ふと蓋し此に本づく

岐伯答て曰夫れ色脈と尺との相應するや桴鼓、影響の相應するか如く也、相失ふを得ざる也、此れ亦本末根葉の出候也、故に根死すれば則ち葉枯る、色脈形肉相失ふを得ざる也、故に一を知れば則ち工と爲る、二を知れば則ち神と爲る、三を知れば則ち神にして且つ明なり

△此れ色脉形肉皆詳察す可き言ふ、色は望み、脉は按し、形肉は尺の皮膚を驗す可し、蓋し尺の皮膚を驗すれば、形肉の盛衰概ね知るを得る、何となれば、中に有れば必ず外に形はる、故に色と脉と、脉と形肉とは、猶ほ桴と鼓と影と響との如く相應じ本と末と根と葉の候、相失はざる也、三者皆參へ合す可し故に三を知れば神にして明なり

色脉合診

黄帝曰願くは卒くに之を聞ん、岐伯曰色青き者は其脉絃也、赤き者は其脉鉤也、黄なる者は其脉代也、白き者は其脉毛なり、黒き者は其脉石なり

△肝は木を主る其色青其脉絃也、心は火を主る其色赤其脉鉤也、脾は土を主る其色黄其脉代也、肺は金を主る其色白其脉毛也、腎は水を主る其色黒其脉石、五脉の義前の十一に見ゆ

其色を見て而て其脉を得ず、反て其相勝つの脉を得れば則ち死す、其相生の脉を得れば則ち病已ゆ

△其脉を得ずとは、其合色の正脉を得ざる也、相勝つの脉とは、青色の毛脉を得るか如き金か木を尅するの類也、相生の脉とは、青色か石脉を得るか如き、水か木を生ずるの類也

黄帝問曰五藏の生する所の變化の病形何如ん、岐伯曰先づ其五色五脉の應を定めて、其病乃ち別つ

可き也黄帝曰色脉已に定て之を別つこと奈何ん、岐伯曰其脉の緩急小大滑濇を調て而て病變定る

△鴻云調は察也此の註先づ後の本文と讀みて而て後に讀むを佳とす「緩急は至數を以て言ふ、小大滑濇は形體を以て言ふ、滑は不濇也往來流利して盤に珠を走すか如し、濇は不滑也虚細にして遅く往來難きを覺ゆ雨の沙を霑すか如く刀にて竹を刮るか如し、六者對待を相爲す、此の六者を調すれば則ち病變以て定る可し」鴻

五藏所生病の形如何

此の註は緩急小大滑濇を釋す

此の註は緩急小大滑濇の六者にて諸脉を總括するに足るや否を論ず

諸説總括

類中に異有り知り難し

浮にして升散す可からざる

沉にして内を攻む可からざる

温にして中を温む可からざる

數にして寒涼す可からざる

曰上註の至數とは脉の至る數也○按るに此の節緩急小大滑濇を以て病變を定む、謂へらく諸脉を總む可き綱領也と然るに五藏生成論には「小大滑濇浮沉」と云ふ又後世に至り難經には「浮沉長短滑濇」と云へり又仲景は曰脉に弦緊浮沉滑濇有り、此の六者を名て殘賊と爲す、能く諸脉病を作すと爲す也」と、滑伯仁は曰大抵、提綱の要は、浮沉遲數滑濇の六脉を出でざる也所謂六に出でざるとは、其表裏、陰陽、虚實、冷熱、風寒、濕燥、藏府、血氣の病を、統るに足るを以て也、【浮】は陽と爲し表と爲す、診、風と爲し冷と爲す、【沉】は陰と爲し裏と爲す、診、濕と爲し實と爲す、【遲】は藏に在りと爲し、寒と爲し冷と爲す、【數】は府に在りと爲し、熱と爲し、燥と爲す、【滑】は血有餘と爲す、【濇】は氣の獨滯と爲す」と此の諸説は詞、稍や異るも義は實に相通づ若し愚見を以て之を言へば、蓋し總て表裏寒熱虚實六者の辨に出でざるのみ、其【浮】は表に在りと爲すが如きは、則ち散大にして孔、類す可き也、【沉】は裏に在りと爲すは則ち細小にして伏、類す可き也、【遲】は寒と爲すは、則ち徐緩濇結の屬、類す可き也、【數】は熱と爲す、則ち洪滑疾促の屬、類す可き也、【實】は有餘と爲す則ち弦緊動革の屬、類す可し此れ其大概也皆人の知り易き所の者也、然して此の六者の中に即て、復た大に相懸絶するの要有るは、則ち人多く識る能はざる也夫れ、【浮】は表と爲す而て凡そ陰虚する者は脉必ず浮にして力無し是れ浮は以て概して表と言ふ可からず、升散す可けんや、【沉】は裏と爲す而て凡そ表邪初感の甚者は、陰寒が皮毛を束て、陽氣か外に達する能はざれば、則ち脉必ず先づ沉緊を見はす也、是れ沉は以て概して裏と言ふ可からず、内を攻む可けんや、【遲】は寒と爲す而て傷寒初て退き、餘熱未清は、脉多くは、遲滑なり、是れ遲は概して寒と言ふ可からず、中を温む可けんや、【數】は熱と爲す而て凡そ虚損の候は陰陽俱虧け氣血敗亂する者は脉必ず急數なり愈々虚し、愈々虚する者は愈々數なり、是れ數は概して熱と言ふ可からず、

微細にして補
ふ可からざる
症
洪弦にして消
伐す可からざ
る症
上文の如く脉
道は誠に辨し
難し是れ四診
參合の必要な
所以也

尺が寸か色か
にて診し得る
も合診の完全
に及ばず
上中下醫三等
の治蹟

寒涼す可けんや、【微細】は虚に類す而て痛み極り塞閉する者は、脉多くは伏匿す、是れ伏は概して虚と言ふ可からず、驟に補ふ可けんや、【洪弦】は實に類す、而て眞陰大に虧たる者は、必ず關格、常に倍す、是れ強は以て概して實と言ふ可からず、消伐す可けんや、是の如きは是れ綱領中に於て復た大綱領の存する有り、設し四診を以て相參る能はずして、孟浪に意に任せば則ち未だ人を反掌の間に害せざる者有す、此れ脉道の言ひ難き所以にして毫釐も辨せざる可からざる所也

黄帝曰之を調すること奈何ん(調は察也)岐伯曰脉急なる者は、尺の皮膚も亦急なり、脉緩なる者は、尺の皮膚も亦緩なり、脉小なる者は、尺の皮膚も亦減して而て氣少し、脉大なる者は、尺の皮膚も亦賁大にして起る、脉滑なる者は尺の皮膚も亦滑なり、脉澹なる者は、尺の皮膚も亦澹なり、凡そ此の變は微有り、甚有り

△此れ正に脉と尺と桴鼓影響の相應するか若し、而て其變を爲すことは、則ち微有り甚有る也、甚は病深く微は病淺し○論疾診尺論に曰其尺の緩急小大滑澹、肉の堅脆を審にして、病形定ると、義此れと同じ下章に見ゆ故に善く尺を調する者は、寸を待たず、善く脉を調する者は、色を待たず、能く參へ合せて、而て之を行ふ者は、以て上工と爲す、上工は十に九を全ふす、二を行ふ者を中工と爲す、中工は十に七を全ふす、一を行ふ者を下工と爲す、下工は十に六を全ふす

△此れ正に本末根葉の義也、尺寸を以て言へば、尺を根本と爲し寸を枝葉と爲す、脉色を以て言へば、脉を根本と爲し色を枝葉と爲す、故に善く尺を察する者は寸を待たず、善く脉を察する者は色を待たざる也然れども必ず能く三者を參合して之を兼ね行へば更に本末皆得て萬に一失無し、上工と爲すに足る云々然して六と曰ひ七と曰ふ者は輕易なる者なり前に在る也、八と曰ひ九と曰ふ者は最も難し後に在る也、易き者は何の難きこと有らん、難き者は豈に言ひ易かんや、其等差上下に分つと雖も、而も成敗の賢不肖相去るや、天地なり」鴻曰是れ六七は輕病、八九は重病多し故に天地懸隔する所以也

第十八 診尺論疾(鴻曰此の法更に簡易の如し)

○靈樞論疾診尺篇に黄帝問曰余、色を視、脉を摸ること無くして獨り其尺を調して以て其病を言ひ、外より内を知らんと欲す之を爲すこと奈何ん

△尺を診して藏府を知る故に外より内を知ると言ふ

岐伯曰其尺の緩急小大滑澹、肉の堅脆を審にして、病形定る

△寸口の脉は尺に由て寸に達す、故に但だ尺部の脉を診して、其内知る可し、通身形體は以て盡く見難し、然して肉の盛衰は必ず腕後に形はる、故に但だ尺部の肉を察して其外知る可し是を以て獨り其尺を調て病形定る人の目窠上を視るに微に癱して、新に臥し起る状の如く、其頸脉動き、時に欬す、其手足の上を按すに窅て起らざる者は、風水膚脹也

△目窠は目下臥蠶の處也癱は癰也即ち新に起て微腫の狀なり、頸脉は人迎脉也、窅て起らすとは之を按して窩有る也是れ風水膚脹の外候也風水の義疾病類三十一に見ゆ、膚脹の義は疾病類五に見ゆ、鴻曰三十一は素問評

尺及び肘臂掌
の診と諸病

熱病論也五は素問生氣通天論

尺膚滑にして其淖澤は風也

△陽は風氣を受く故に風を病む者は尺膚滑にして淖澤也

尺肉弱き者は解體して安臥す脱肉する者、寒熱せば不治

△尺肉弱は肌必ず消瘦す肉瘦せ陰虚せば解體す可し解體は身體困倦す故に安臥を欲す、邪無くして脱肉寒熱する者は眞陰の敗也故に不治

尺膚滑にして澤脂は風也

△澤脂は即ち前文の淖澤也云々鴻云前文には脂字無し是れ其異なる所ならん

尺膚濇は風痺也

△濇は血少し血管する能はず故に風痺を爲す

尺膚粗にして枯魚の鱗の如き者は水泔飲也

△枯魚鱗の如きは乾濇甚也、脾土衰を以て、肌肉消し水之に乗す、之を泔飲と爲す、泔濇同じ又下篇に肝脉濇甚を濇飲と爲す

尺膚熱甚しく、脉盛躁者は病温也、其脉盛にして滑は、病且に出んとする也

△尺膚熱する者は其身必ず熱す、脉盛躁は陽邪有餘なり、故に當に温病を爲す可し、若し脉盛と雖も滑を兼る者は是れ脉躁ならずして、正氣將に復せんとす、故に久しからずして當に愈ゆ可し、出は漸く愈るの謂

尺膚寒へ其脉小者は泄して氣少し

△膚寒へ脉小は陽氣衰る也故に泄及少氣を爲す

尺膚炬の然るか如く、先熱後寒は、寒熱也、尺膚、先寒し、久大にして熱する者も亦寒熱也

△炬然は火熱の貌なり或は先熱して後寒、或は先寒して後熱、皆寒熱往來の候也

肘獨り熱する所の者は、腰以上熱す、手獨り熱する所の者は、腰以下熱す

△肘は臂、臂の節也一に曰曲池以上を肘と爲す、肘は上に在り、手は下に在り、故に肘は腰上に應じ、手は腰下に應す

肘の前獨り熱する者は膺の前熱す、肘の後獨り熱する者は肩背熱す

△肘前は内廉也手の三陰の行く所なり故に膺前に應す、肘後は外廉也手の太陽の行く所なり故に肩背に應す
臂中獨り熱する者は腰腹熱す

△肘下を臂と爲す臂は下に在り故に腰腹に應す

肘後麤以下三四寸熱する者は腸中に蟲有り

△是れ三里以下内關以上の所を云ふ、此れ陰分也、陰分に熱有り、故に腸中蟲に應す

掌中熱する者は腹中熱す、掌中寒する者は腹中寒す

△掌中は三陰の聚る所、故に或は熱或は寒皆腹中に應す

魚上の白肉に、青血脉有る者は胃中に寒有り

△魚上の脉青は胃寒也○經脉篇にも曰胃中寒すれば手魚の脉多くは青、魚の義經絡類二に見ゆ鴻云是れ靈樞經脉篇也

尺炬の然るが如く熱するに、人迎大なる者は、當に奪血す可し、尺堅大に脉小甚しく、少氣愧加ること有るは立ろに死す

△尺炬然は、火陰に在り、人迎大は、陽の勝也、故に失血す可し、尺膚堅大にして小甚は、形有餘にして氣衰少也、陰虚既に極て煩悞再び加ふ故に死す悞は悶也

第十九 藏脉、六變病刺、不同

○靈樞邪氣藏府病形篇に黄帝曰脉の緩急小大滑濇の病形を請ひ問ふ何如ん、岐伯曰臣請ふ五藏の病變を言はん

緩急小大滑濇の六は脉の提綱
心脉六變及其病

△六者は脉の提綱と爲す故帝特に擧て之を問ふ、鴻曰前第十七參照

○心脉急甚は瘕瘕を爲す、微急は、心痛みて、背を引き食下らずと爲す

△急は弦の類也、急は風寒を主る、心は血脉を主る、故に心脉急甚は瘕瘕を爲す、筋脉引急を瘕と曰ふ、弛長を瘕と曰ふ弦急脉多くは痛を主る、故に微急は心痛引背と爲す、心胸に邪有れば食下らざる可し、大抵弦急の脉は當に此等の病を爲す可し、故に急甚も亦心痛を爲す可し、微痛も亦瘕瘕を爲す可し、學者當に理に因て、活變して可也餘は此の意に同じ

緩甚きは狂笑を爲す、微緩は伏梁、心下に在て、上下に行き、時に唾血を爲す

△心氣熱すれば、則ち脉縱緩故に神散して狂笑を爲す、心は聲に在ては笑を爲せば也、若し微緩は伏梁、心下に在て能く升降を爲す及び時に唾血す皆心藏清からざる也伏梁の義は疾病類七十三に詳、鴻曰此れ素問腹中論也伏梁は心の積也

大甚きは喉吟を爲す、微大は心痺して背を引き善く涙出を爲す

△脉大甚は心火の上炎也故に喉中吟然として聲有り若し其微大にして心痺背を引き善く涙出は手の少陰の脉が咽喉を挾て目系に連るを以て也、心痺の義は疾病類六十七に詳、鴻曰此れ素問痺論也又心痺は脉痺也今の神經痛夏を以て之を得る、吟は字典聲有る也

小甚は善く噦を爲す、微小は消瘴を爲す

△心脉小甚は陽氣虚して胃土寒す故に善く噦す若し其微小は亦血脉枯少と爲す故に消瘴を病む消瘴は肌膚消瘦也、鴻云噦は呃逆とも書く又消瘴は靈樞五變論曰熱すれば則ち肌膚を消す故に消瘴を爲す又同師傳篇に出づ滑甚きは善く渴す、微滑は心疝を爲し臍を引き小腹鳴る

△心脉滑甚は血熱す故に燥く故に渴す若し微滑は熱、下に在り當に心疝して、臍腹を引くを病む可し、脉要精微論に曰病を心疝と名く心は牡藏と爲す小腸之れか使たり故に曰小腹當に形有る可しと、鴻云心疝は類經十七卷を見る可し

滑甚きは瘖を爲す、微滑は血溢、維厥、耳鳴、顛疾を爲す

消瘴種下參
照下文肺下參

肺脉六變及其病

△心脉瀉甚は則ち血氣上に滯る、聲は陽に由て發す、滯れば則ち瘡を爲す也、微瀉は血溢を爲す瀉は當に血を傷る可し、維厥とは、四維厥逆也、四支は諸陽の本と爲す、而て血衰へ氣滯るを以て也、耳鳴顛疾は心竅を耳に閉く心虚すれば則ち神亂る也、鴻曰顛疾とは頭疾也又顛癰通用次の如し

○肺脉急甚は、癰疾を爲す、微急は、肺寒熱し怠惰し欬し唾血し腰背胸を引き、若くは鼻に息肉ありて不通を爲す

△急甚は風邪勝つ也、木反て金に乗ず故に癰疾を生ず、其微急は亦風寒有餘を以て熱を致す故に寒熱し怠惰等を爲す、鴻曰息肉は惡肉也鼻だけ類

緩甚は多汗を爲す、微緩はは痿、痺、偏風を爲す、頭より以下、汗出て止む可からず

△緩甚は皮毛固からず故に表虚して汗多し、微緩にしての諸病は陽邪陰に在るを以て也、鴻曰痿はナエ也痺は癰癰其他穴を穿つ瘡也偏風は中風半身不遂

大甚は脛腫を爲す、微大ば肺痺して胸背を引き、起て日光を惡むことを爲す

△大甚は心火肺を燥して、眞陰必ず涸る、故に脛腫を爲す、微大も亦肺熱に由る故に、肺痺して胸背を引く、肺痺とは、煩滿喘して嘔く也、起て日光を畏るは、氣分火盛にして陰精衰るを以て也「鴻曰類經十五卷即ち素問逆調論に曰陰氣少くして陽氣勝つ故に熱して煩滿す

小甚は泄を爲す、微小は消瘳を爲す

△小甚は陽氣虚して府固からず病當に泄を爲す可し、微小は亦金衰を以て也金衰れば水弱し故に消瘳を爲す

鴻曰消瘳の義前註に在り因に記す消瘳には數種あり茲に云ふ消瘳は前註の如く肌膚消瘦なれども、之を以て消瘳は總て同じと思ふ可からず、赤水支珠に曰上消は多飲す即ち所謂消渴也中消は善く食ふて瘦す即ち本文の消瘳也、下消は飲少く小便膏油の如し、今云ふ所の糖尿病也

滑甚ば息賁上氣を爲す、微滑は上下出血を爲す

△滑甚は氣血實熱す、故に息賁上氣を爲す、息賁は喘急也微滑も亦上下より出血す

瀉甚は嘔血を爲す、微瀉は鼠瘦を爲す頸支腋の間に在り、下か其上に勝たざれば其應善く痿す

△瀉甚は血を傷るに因る、肺は上焦に在り故に瀉甚は當に嘔血す可し、微瀉は氣當に滯有る可し、故に鼠瘦か頸腋の間に在り、氣滯れば陽病む、血傷れば陰虚す故に下は上に勝たずして足膝當に痿軟す可し、痿は音酸「鴻曰鼠瘦は癰癰也、痿は古へ多く酸と記す古人之を麻痺の意に見てシビレと訓す、然れども我は之をスピクと訓す其理由は酸は木の味なれば也詳は他日に譲る

○肝脉急甚は惡言を爲す、微急は肥氣を爲す、脇下に在て覆杯の若し

△急甚は肝氣強し肝氣強き者は怒多く、喜少し故に言嘔惡多し、微急も木邪土を傷る、故に肥氣を爲す、脇下に在り脇下は肝經也○按るに五十六難に曰肝の積を肥氣と名く左の脇下に在りと其義此に本く云々

緩甚は善く嘔こくとを爲す、微緩は水瘕と瘵を爲す

△緩は脾脉と爲す、肝脉を以てして、緩甚は木と土と相尅する也、故に善く嘔く、微緩にして水瘕を爲し瘵を爲す者は、皆土が木の爲に制せられて、運行する能はずして然り、水瘕は水積也、鴻云瘵は閉也五瘵即ちリウ

肝脉六變及其病

マチス神經痛又喉痺即喉閉等皆血氣壅閉し不通なるより生ずとは類經十三卷四十頁の説く所也

大甚は内癰を爲し、善く嘔吐す、微大は肝痺を爲し陰縮み欬して小腹を引く

△大甚は肝火盛也、木と火と交く熾なり故に内癰を爲す、血熱して藏せず故に嘔吐を爲す、微大は肝痺を爲し陰縮、欬、小腹引を爲す皆火の陰分に在るを以て也肝痺の義は疾病類六十七に見ゆ、嘔は鼻血也鴻曰内癰は腹内の瘡即ち肺癰胃癰腎癰等を云ふ癰は壅也血壅滯して生ず盲腸炎の如き能く人の知る所也疾病類六十七は素問痺論也肝痺はリウマチスの筋病にて夜中に驚き多飲し數少便す

小甚は多飲を爲す、微小は消瘰を爲す

△小甚は血少して渴す、微小は陰虛し血燥くを以て消瘰を爲す、鴻曰消瘰の解前文

滑甚は瘰癧を爲す、微滑は遺溺を爲す

△滑甚は熱か經に壅る故に瘰癧を爲す、微滑は遺溺を爲すは肝火か下に在て疏泄し、禁せざるを以て也、瘰癧相同し、鴻曰瘰癧は畢丸疝也原病式に曰少腹卵を控きて腫れ急絞痛する者は是れ也

瀦甚は溢飲を爲す、微瀦は痙攣、筋痺を爲す

△瀦甚は氣血衰滯也肝木不足して、土反て之に乗ず故に濕體に溢れ、溢飲を爲す、微瀦にして痙攣、筋痺は皆血を以て筋を養ふに足らざる故也、鴻曰筋痺の解は前條の肝痺下

○脾脈急甚は癰癧を爲す、微急は膈中を爲し、食飲入て還て出で、後に沫を沃ぐ

△急甚は木か土に乗ずる也脾は支體を主る而て風木の氣之に客す、故に癰癧す、微急も亦肝邪か脾を侮る故に

脾脈六變及其病

脾運化する能ずして、膈食還て出づ、土か水を制せずして涎沫多し、沃は水注然たる貌、鴻云注は字典水深廣、膈食は膈膜病也

緩甚は痿厥を爲す、微緩は風痿を爲し四肢用ひられず、心慧然として無病の若し

△脾脈は緩に宜し而も緩甚は則ち熱す、脾は肌肉四支を主る、故に脾熱すれば、肉痿を爲し、及び厥逆を爲す、微緩にして風痿四支用ひられざるは、土弱れば則ち風を生ずるを以て也、痿弱は經に在て藏は恙無し故に心慧然として無病の若し

大甚は擊仆を爲す、微大は疝氣を爲す腹裏大に膿血腸胃の外に在り

△脾は中氣を主る、脾脈大甚は陽極と爲す、陽極まれば則ち陰脱す、故に擊たる、如くして地に仆る、微大は疝氣と爲す、濕熱、經に在て、而て前陰か太陰陽明の合する所と爲るを以て也、腹裏大とは膿血腸胃の外に在るを以て也、亦脾氣壅滯の致す所

小甚は寒熱を爲す、微小は消瘰を爲す

△小は中焦の陽氣不足を以ての故に、甚は則ち寒熱を爲し、微は消瘰を爲す

滑甚は瘰癧を爲す、微滑は蟲毒を爲し蝮蝎腹熱す

△滑甚は太陰の實熱也太陰は宗筋に合す、故に瘰癧疝を爲す、微滑は濕熱か脾に在り、濕熱薰蒸す、故に諸蟲を生じ及び腹熱を爲す、蝮蝎同じ、鴻曰瘰癧は淋也小便不利

瀦甚は腸積を爲す、微瀦は内積を爲す多く膿血を下す

△脾脉瀦甚して腸積を爲す微瀦して内積を爲す及び多く膿血を下す者は瀦は氣滯り血傷ると爲す而て足の太陰の別か腸胃に入り絡ふを以て也、腸積内積は遠近の分ちのみ一に曰下腫の病と、蓋し即ち疝漏の屬、鴻曰疝漏とは疝氣に因て腸の内外に穴を穿つを云ふ歟

腎脉六變及其病

○腎脉急甚は骨癩疾を爲す、微急は沉厥、奔豚を爲し足收らず、前後するを得ず

△急甚は風寒腎に在り腎は骨を主る故に骨癩疾を爲す、義は鍼刺類三十七に詳鴻曰此れ靈樞熱病篇也曰骨癩疾は癩齒の諸論、分肉皆滿て骨のみ居り、汗出て煩惋し、嘔て多く沫を沃ぎ、氣下に泄る不治、微急にして沉厥足收らざるは、寒邪經に在る也、奔豚を爲すは、寒邪藏に在る也、前後するを得ざるは寒邪、陰に在る也○五十六難に曰腎の積を奔豚と云ふ、少腹に發して心下に至る、豚の狀の若く、或は上り或は下ること、時無しと、其義此に本づく

緩甚は折脊を爲す、微緩は洞を爲す、洞は、食化せず噎に下て還て出づ

△緩甚は陰不足故に折脊を爲す、足の少陰脉は脊を貫て脊内を循るを以て也、微緩も腎氣虧く故に命門の氣衰て、下焦化せず、復つて上り出づ、故に病洞を爲して食還て出づ

大甚は陰痿を爲す、微大は石水を爲し臍に起て已下小腹に至るまで睡睡然たり、上て胃脘に至れば死す不治

△大甚は水虧け火王す、故に陰痿を爲す、微大も腎陰虚す、故に化せず、氣停り水積で、石水を爲す、胃脘に至れば水邪盛極て、反て土藏に乘じ、泛濫して制無し故に死す、石水の義は後の二十四に見ゆ、睡は音垂、重

墜也原書の腕は腕に作る可し

小甚は洞泄を爲す、微小は消瘴を爲す

△小甚は元陽下に衰ふ故に洞泄を爲す微小も眞氣虧く故に消瘴を爲す鴻曰元陽は腎氣を云ふ消瘴の解は前に在り

滑甚は癰瘻を爲す、微滑は骨痿を爲し坐して起こと能はず、起てば則ち目見る所無し

△滑甚は陰火盛也故に癰瘻を爲す、瘻は小便不利也瘻は疝也、微滑も亦火王するに由る、火王すれば則ち陰虚す、故に骨痿て起つ能はず起てば目暗く見る所無し、鴻曰瘻は畢丸疝也陰虚は精液虚也

瀦甚は大癰を爲す、微瀦は不月沉痔を爲す

△瀦は精傷と爲す血少と爲す氣滯と爲す故に甚ければ大癰を爲す、微は不月を爲す、沉痔を爲す鴻云不月は月經不來也、沉痔は腸内結核所謂腸痔なる可し

○黄帝曰病の六變之を刺すこと奈何ん岐伯曰諸の急なる者は寒多し

△急は弦緊の謂也○仲景曰脉浮にして緊者を弦と曰ふ也緊は則ち寒と爲す○成無己か曰緊は則ち陰氣勝つ故に凡そ緊急の脉は風寒多し而て氣化肝に従ふ也

緩者は熱多し

△緩は縱緩の狀なり、後世遲緩の謂に非ず○仲景か曰緩なれば則陽氣長し又曰緩は胃氣有餘故に凡そ縱緩の脉は中熱多し、而て氣化、脾胃に従ふ也

以上六變の脉形急脉は弦緊也

緩脉は縱緩也遲にあらず

大脉は多氣少血

大者は多氣少血

△大は陽有餘と爲す、陽盛なれば則ち陰衰ふ故に多氣少血あり○仲景か曰若し脉浮大は氣實血虚也、故に脉の大者は浮陽多し、而て氣化、心従ふ也

小者は血氣皆少し

小脉は微細に近し

滑は陽氣盛に、微に熱有り

△小は微細に近し、陽に在ては陽虚と爲し、陰に在ては陰弱と爲す、脉體、陰に屬して、化、腎に従ふ也
△春脉は陽と爲し氣血實す、故に陽氣盛にして微に熱有り○仲景か曰滑は胃氣實す○玉機眞藏論に曰脉弱にして以て滑は、是れ胃氣有り、故に滑脉は胃に従ふ也

滑は多血少氣、微に寒有り

△滑は氣滯と爲し、血少と爲す、氣血俱に虚すれば、則ち陽氣不足す、故に寒有り ○仲景か曰滑は榮氣不足と、亦血少の謂なり、然るに此に多血と云ふは、誤有るに似たり、下文に滑者を刺すには、其血を出さしむること無れと、云ふを觀て、其少きこと知る可し、滑脉は毛に近し故に氣化肺に従ふ也

是の故に急者を刺すは深く内て久く之を留む

以上の六變脉刺法

△急者は寒多し、熱は陰に従て去り難し、内は納に同じ

緩者を刺すは淺く内て疾く鍼を發して以て其熱を去る

△緩者は熱多し熱は陽に従ふて散し易し

緩脉刺

急脉刺

大脉刺

大者を刺すは微に其氣を寫して、其血を出すこと無れ

△大者は多くは陰虚す故に其血を出すこと無れ、

滑脉刺

滑者を刺すは疾く鍼を發して、淺く之を内て、以て其陽氣を寫して、其熱を去る

△緩者刺と略ほ同じ

瀦脉刺

瀦者を刺すは必ず其脉に中て、其逆順に隨て久く之を留む、必ず先づ按して、循で、已に鍼を發して、疾く其痛を按し、其血を出さしむる無くして、以て其脉を和す

△瀦者は氣血俱に少くして、氣を得難し、故に必ず其脉に中て、而て其逆順を察し久く留め、疾く按して其血を出すこと無る可し、之を諸刺に較るに更に詳慎す可き者は、脉瀦は本と虚なるを以て、其眞氣を傷らんことを恐るのみ、循は摩按也、痛は委偉の二音、刺療也

諸小脉は鍼を禁し甘藥を用ゆ

諸小者は陰陽形氣俱に不足なり取るに鍼を以てすること勿れ、而て調るに甘藥を以てす

△小脉は不足と爲す鍼を以て取ること勿れとは、氣血俱に虚する者は必ず刺に宜しからず當に調るに甘藥を以てす○按るに此節、陰陽形氣俱に不足する者は調るに甘藥を以てす、甘の一字聖人の用意深し、蓋し藥食の入る必ず先づ脾胃にして而後に五藏其氣を稟るを得るなり、胃氣強ければ則ち五藏俱に盛也胃氣弱ければ則ち五藏俱に衰ふ、胃は土に屬して甘を喜む故に中氣不足する者は、其甘温に非れば不可也云々是れ陰陽俱に虚する者は、必ず調るに甘藥を以てする所以也、至眞要大論には、五味各々補寫有りと雖も、彼れは、五行生尅の理を以て、推衍して言ふなり、然して之を用る者は、但だ當に微に五味を兼ね、甘を以て主と爲す可し、庶くは

四季以下胃氣の人に必要缺く可からざるを言ふ、換言すれば胃氣無きれば甘藥を用いて微弦微鈞の義は第十一章を見る可し

灸用ゆ可きか

心脉搏堅長

肝邪は五藏皆長る

中を補ふに足らん、四季土氣無きは不可なるか如き、五藏胃氣無きは不可なり、而て春但だ微弦、夏但だ微鈞の義是れ也、陰陽應象大論に曰形不足の者は之を温るに氣を以てす、精不足の者は之を補るに味を以てす、と故に氣味の人に相宜き者を補と爲せば則ち可なり、若く苦劣堪へ難き味を用て補せんと欲するは誤れり、氣味攻補の學、大に妙處有り、若し調和を善くせずんば便ち錯まる此れ醫家第一の要なり、鴻云以上の註は補藥の選び難きを言ふ肺結核補藥の如き極て選び難し次に本文諸小脉に灸を用ること如何靈樞經脉篇に曰盛なれば則ち之を寫し、虚すれば則ち之を補ふ、陷下すれ則ち之を灸すと、類註に曰陷下は陽氣内に衰へて脉起らざる也と之を以て判す可し内熱あるには用ゆ可からず

第二十 搏、堅、栗、散、病を爲す、同じからず

○素問脉要精微論に曰心脉の搏堅にして長なるは、當に舌卷て、言ふ能はざるを病む可し

△搏は弦強にして手を搏撃するを謂ふ也、心脉搏堅にして長は、肝邪か心に乘じ、藏氣虧こと甚くして、和平の氣を失ふ也、手の少陰脉は、心系より上て咽を挟む、故に舌卷て言ふ能はず○按るに搏撃脉は皆肝邪盛也肝は本と木に屬す而て五藏皆之を畏るは何ぞや、蓋し五藏は皆胃氣を本と爲す、脉に胃氣無れば則ち死す、木強ければ土必ず衰ふ、脉搏は胃氣多くは敗る、故に堅搏は諸藏之を忌む今心、脉搏堅長は心藏の胃氣不足にして邪有餘也、搏の微は邪も亦微、搏の甚は眞藏脉に幾し、故に搏の微甚を以て、病の淺深を察す可し、後の四藏此に倣へ

肺脉搏堅長

肝脉搏堅長

胃脉搏堅長

其栗にして散ずる者は、當に消環して、自ら巳ゆ可し

△若し症前の如にして、脉則ち栗散する者は、心氣將に和せんとす、消は盡也環は周也、期、一周し盡して病自ら巳るを云ふ

○肺脉搏堅にして長は、當に唾血を病む可し、其栗にして散ずる者は、當に灌汗を病て、復た散發せざらしむるに至る可し

△搏堅にして長は、邪か肺に乗ずる也、肺系は喉に連る故に唾血を爲す、若し栗にして散する者は肺虚して斂らず、汗出ること水の如し、故に灌汗と曰ふ、汗多れば亡陽す、故に更に發散を爲す可からず

○肝脉搏堅にして長、色不青は、當に墜を病む可し、若し搏るれば血か脇下に在るに因て人をして喘逆せしむ、其栗にして散じ色澤へる者は、當に溢飲を病む可し、溢飲は渴して暴に多く飲て、而て肌皮腸胃の外に入り易き也

△肝脉搏堅にして長は、肝自ら病む也、藏か中に病めは、色必ず外に見はる、其色當に青なる可きに青ならざるは、病の藏に在らずして、經に在るを以て也、必ず墜傷有り、若し搏撃に由れば則ち血か脇下に停て氣利せず、故に人をして喘逆せしむ、若し其栗散は、則ち肝木不足にして、脾濕之に勝つ、濕は肌膚に在り、故に顔色光澤にして、病溢飲を爲す、又肝脉濇甚は、溢飲を爲す義は十九章に見ゆ

○胃脉搏堅にして長は、其色赤し、當に折脾を病む可し、其栗にして散は、當に食痺を病む可し

△胃脉搏堅は、木か土に乗ずる也之に赤色を加るは、陽明火盛にして木火交く熾に胃經必ず傷る、陽明下

脾脉搏堅長

る者、は氣衝より體に下り伏兔に抵る故に脾折るが如きを病む也、粟にして散する者は、胃氣本と虚す、陽明の支別上行する者は、大迎、人迎に由て喉嚨を循り、缺盆に入り、鬲に下り胃に屬して脾に絡ふ、故に食すれば、即ち氣逆し、滯悶して行かすして、食痺を爲す、食痺の義運氣類二十八に詳し、鴻云此れ素問至眞要大論也、食痺とは食入て化せず入れば悶痛し汁を嘔き必ず吐出して已む

○脾脉搏堅にして長、其色黄は當に少氣を病む可し、其粟にして散し色不澤の者は、當に足胎腫て水狀の若きを病む可し

△邪脉が脾に乗れば脾氣必ず衰ふ、脾虚して以て生ずる無れば、本藏の色外に見はる、脾弱くして肺を生ずる能はず、故に少氣を爲す、粟散して色不澤は、尤も脾虚に屬す、脾經の脉は拇指より内踝の前廉に上り、胛骨の後を循て、厥陰の前に交り出づ故に足胎腫て水狀の若き者は、脾虚して水を制する能はざるを以て也

腎脉搏堅長

○腎脉搏堅にして長、其色黄にして赤き者は、當に折腰を病む可し、其粟にして散する者は、當に少血を病て、復せざらしむ可し

△邪脉か腎を犯せば腎氣必ず衰ふ、其色黄赤は火土有餘にして腎水不足と爲す、故に腰折るが如きを病む、粟散は腎氣本と虚す、腎は水を主て以て津液を生化す、今腎氣化せず故に血少を病む、本原氣衰ふ故に遽に復する能はざらしむ○按るに本篇五藏の脉病、一に曰搏堅にして長、一に曰粟にし散て、而て其病を爲すこと多くは皆不足なるは何ぞや、蓋し搏堅にして長は邪か正に勝つなり是れ所謂邪の湊る所は其氣必ず虚する也、粟にして散は本原不足す、是れ所謂正氣奪れば則ち虚する也、一は邪有るを以て虚を致し一は無邪を以て本と虚す

搏堅にして長は邪の爲め也、粟にして散は無邪にして本原虚す

心脉急と心疝

帝曰診して心脉急を得る、此れ何の病と爲す、病形何如ん、岐伯曰病を心疝と名く少腹當に形有る可し

△心は牡藏と爲す、氣本と陽に屬す、今脉緊急は陰寒勝つ也、陽藏を以てして、陰の爲めに勝たる、故に心疝を病む、心疝は形、少腹に在て實す、寒が少陰に乗するを以て致す也、

帝曰何を以て之を言ふ、岐伯曰心は牡藏と爲す、小腸之か使と爲す、故に曰少腹當に形有る可し、牡は陽也心は火に屬して鬲上に居す故に牡藏と曰ふ、心と小腸とは表裏と爲す、故に脉絡相通して之が使と爲る、小腸は少腹に居る故に當に形有る可し

胃脉病形

帝曰胃脉を診し得て病形何如ん岐伯曰胃脉實すれば則ち脹し虚すれば則ち泄す

△實は邪有餘也故脹満す虚は正不足也故に泄利す

第二十一 諸脉症診法

○素問脉要精微論に曰夫れ脉は血の府也

脉は血の府也
此の血字中には氣を含む

△府は聚也府庫の謂也、血必ず經脉中に聚る、故に刺志論に曰脉實すれば血實す、脉虚すれば血虚すと、然れども此の血字は實は氣を兼て言を爲す、獨り血を指すに非ず、故に下文に曰長れば則ち氣治り短なれば則ち氣病むと又逆順篇の如き曰脉の盛衰は以て血氣の虚實有餘不足を候ふ所以也と義知る可し

長なれば則ち氣治り(氣充和)短なれば則ち氣病む(氣不足)數なれば則ち煩心し(火熱盛)大なれば則ち病進む(邪方に張る)上盛なれば則ち氣高ぶり

△寸を上と爲す、上盛は邪か上に壅る也、氣高は喘滿の謂

下盛れば則ち氣脹す

△關尺を下と爲す、下盛は邪か下に滯る、故に腹が脹滿を爲す

代なれば則ち氣衰へ

△脉變更多くして常ならざるを代と曰ふ、氣虚して主無き也

細なれば則ち氣少し

△脉來る微細正氣不足

澹なれば則ち心痛す

△澹は血少氣滯と爲す、故に心痛を爲す

渾渾として革の如くに至て、涌泉の如く、病進で而て色癢れ、繇繇として其去ること、弦の絶るか如きは死す

△渾渾は濁亂不明也、革は皮革の堅鞭の如き也、涌泉は其來ること汨汨とし序無く、但だ出るのみにして返らざる也若し此の脉を得て病日進し、色憔悴を加へ、甚くして繇々として漆を寫するが如く、及び弓弦の斷絶の如なる者は、皆眞氣已に竭く故に死す

○麤大は陰不足、陽有餘にて熱中を爲す

△粗大は浮洪の類、陽實し陰虚す故に内熱す

來ること疾く去ること徐に、上實し下虚するは厥巔疾を爲す

△來ること疾くとは、其來る急也、去ること徐とは、其去ること緩也、上實は寸口盛也、下虚は尺脉弱也、皆陽強の脉、故に陽厥頂巔の疾を爲す○滑伯仁か曰察脉は須らく上下、來去、至止の六字を識る可し、此の六字を明めざれば則ち、陰陽虚實別たざる也、上は陽と爲す、來は陽と爲す、至は陽と爲す、下は陰と爲す、去は陰と爲す、止は陰と爲す、上は尺部より寸口に上る、陽か陰より生ずる也、下は寸口より尺部に下る、陰か陽より生ずる也、來は骨肉の分よりして、皮膚の際に出づ氣の上也、去は皮膚の際よりして、骨肉の分に還る、氣の降也、應を至と曰ひ息を止と曰ふ

來ること徐に去ること疾、上虚下實は、惡風を爲す也、故に惡風に中る者は陽氣受くる也

△來徐、上虚は皆陽不足也、陽風氣を受く、故に陽虚者は必ず風を惡む、而して惡風の人に中るも亦必ず陽氣之を受く

脉俱に沉細數有る者は少陰の厥也

△沉細は腎の脉體也數を兼れば則ち熱す、陰中に火有る也故に少陽の陽厥を爲す、鴻曰此れ足下より熱氣逆上す

沉細にして數散なる者は寒熱也

△沉細は陰と爲す、數散は陽と爲す、陰脈の數散は、陰固からず、故に或は入て陰に之き、或は出て陽に之て、往來寒熱を爲す

浮にして散は胸忤を爲す

△浮は陰不足、散は神守らず、浮にして散は陰氣脱す故に胸忤を爲す、胸は眩暈也、鴻云胸字典音懸諸○浮○に○して○躁○なら○ざる○者○は、皆陽に在れば、則ち熱を爲す、其躁有る者は、手に在り

△脈浮は陽と爲す、而て躁は則ち陽中の陽なり、故に但だ浮にして躁ならざる者は、皆陽脈に屬して、未だ熱を爲すを免れず、若し浮にして躁を兼るは、乃ち陽極と爲す、故に當に手に在る可し、手に在る者は、陽中の陽なり、手の三陽經を謂ふ、此れ終始篇に「人迎一盛は病足の少陽に在り一盛にして躁は病、手の少陽に在り」と云へると義同じ詳は鍼刺類二十九に見ゆ、鴻云此れ靈樞禁服篇

諸○細○に○して○沉○は○皆○陰○に○在○れ○ば○則○ち○骨○痛○を○爲○す、其○靜○有○る○者○は○足○に○在○り

△沉細は陰と爲す、而て靜は則ち陰中の陰也、故に脈但だ沉細は病、陰分に在り、當に骨痛を爲す可し、若し沉細にして靜は陰極と爲す、故に當に足に在る可し、足に在る者は陰中の陰なり、足の三陰經を謂ふ

數○動○に○して○一○代○す○る○者○は、病○か○陽○に○在○る○脈○也、洩○し○及○び○膿○血○を○使○す

△數動は陽脈也數動にして一代する者は陽邪か其血氣を傷る也故に洩を爲し及び膿血を使す、洩は泄と同じ諸○過○は○之○を○切○す、瀉○は○陽○氣○有○餘○也、滑○は○陰○氣○有○餘○也

△脈其常を失ふを過と曰ふ切するに因て知る可き也、陽有餘は則ち血少し、故に脈滑也、陰有餘は則ち血多

し、故に脈滑

陽○氣○有○餘○は○身○熱○無○汗○と○爲○す、陰○氣○有○餘○は○多○汗○身○寒○と○爲○す

△陽有餘は陰不足也故に身熱して汗無し、陰有餘は陽不足也故に汗多く身寒す、汗は本と陰に屬す

陰○陽○有○餘○は○無○汗○に○して○寒○す

△陽有餘無汗は、表實する故也陰有餘身寒は陰盛の故也、陰陽有餘は陰邪か表を實するの謂

○推○し○て○之○を○外○に○す○れ○ど○も、内○に○し○て○外○な○ら○ざる○は、心○腹○に○積○有○る○也

以下察病法なり、脈を推し求て以て其疑似を決する也、凡そ病か表に在るか若くにして、之を外に求んと欲するも然も脈は則ち沉遲にして浮ならざるは是れ内に在て外に非らず、故に心腹に積有るを知る也、諸釋、推動の推と作すは非なり

推○し○て○之○を○内○に○す○れ○ど○も、外○に○し○て○内○な○ら○ざる○は、身○に○熱○有○る○也

△凡そ病か裏に在るか若くにして、内に推し求んと欲すれども、然も脈は浮數にして、沉ならず、是れ外に在て、内に非ず、故に其身に熱有るを知る也

推○し○て○而○て○之○を○上○に○す、上○に○し○て、而○て○下○な○ら○ざる○は、腰○足○清○也

△凡そ上部に推し求て、然も脈止だ上に見はれて、而て下部は弱し、此れ升有て降無く、上實し下虚するを以ての故に、腰足之れか爲めに清冷也

推○し○て○而○て○之○を○下○に○す、下○に○し○て○而○て○上○な○ら○ざる○は、頭○項○痛○也

△凡そ下部を推し求て、然も脈止だ下に見はれて、而て上部は則ち虧く、此れ降有て升無し、清陽上達する能

脈に由て病の内
外上下を決す

本註は甲乙經の不當を辨ず

脈を按して病を知る

鴻云繩を引く如く大小齊等と云へば二者一脈の如く感ずるも然らざる可し何となれば第二十二章に「人迎と寸口の氣と小大等き者病已へ難してとあり

はず、故に頭項痛を爲す也、或は陽虚を以て而て陰之に洩るも亦頭項痛を爲す也○按るに甲乙經に「上にして下らざるを以て、下にして上らず」と作し又下にして上ならずを、上にして下ならず」と作す、上文と相類して而て順なるに似たり、但だ既に下にして上ならずと曰へば則ち氣脈下に在り何を以てか腰足反て清へんや、且つ本經前の二節は反て之を言ひ、後の二節は順に之を言ふ也一は反し一は順にして兩ながら其義を得たり仍ほ本經を以て正と爲す可し

之を按して骨に至り脈氣少き者は腰脊痛て而て身に痺有る也

△之を按して骨に至るは沉陰勝つ也、脈氣少きは血氣衰ふ也正氣衰て陰氣盛也故に痺を爲す痺の義は疾病類六十七に見ゆ、鴻曰此れ素問瘕論也

第二十二 關 格

○素問六節藏象論曰故人迎一盛は、病少陽に在り、二盛は病太陽に在り、三盛は病陽明に在り四盛已上なるを格陽と爲す

△人迎は足の陽明胃脈也頸下の結喉の傍一寸五分に在り、一盛二盛等は猶ほ一倍二倍と言ふか如し、人迎と寸口と相較るに或は彼より大、或は彼れ此より大なり、而て三倍四倍の殊る有る也○禁服篇に曰寸口は中を主り、人迎は外を主る、兩者の相應じて俱に往き、俱に來ること、繩を引て大小齊等なるか若し、春夏は人迎微大、秋分は寸口微大、是の如き者を命て、平人と曰ふ、故に人迎寸口にして盛衰相倍するに至る者は、乃ち病

り又第三十三の章に「一は若也成文れば也是れ本文に若つ春夏は人迎微大秋分は寸口微大の語あり所以なり向ほ第二十五に九候相應ずる上下一の如く云々參閱
格陽とは陽か陰を格す格は防く也
關陰とは陰か陽を關す關は拒む也

也、然して人迎は陽を候ふ、故に一盛は病少陽に在り膽と三焦と也、二倍は病太陽に在り膀胱と小腸也、三盛は病陽明に在り胃と大腸と也、四盛已上は陽脈の極盛なるを以て、陰以て通する無し故に格陽と曰ふ○此の義終始と禁服二篇分別尤も詳なり鍼刺類二十八と九に見へたり、又經脈篇に載る所も亦明なり疾病類十に見ゆ
寸口一盛は病厥陰に在り、二盛は病少陰に在り、三盛は病太陰に在り、四盛已上なるを關陰と爲す
△寸口は手の太陰肺脈也寸口は陰を候ふ故に一盛は病厥陰に在り肝と心主と也、二盛は病少陰に在り心と腎と也、三盛は病太陰に在り脾と肺と也、四盛已上は陰脈極盛にして陽以て交ること無し故に關陰と曰ふ○終始、禁服二篇に詳なり

人迎と寸口と俱に盛ること四倍已上なるを關格と爲す、關格の脈、羸て天地の精氣を極ること能はざれば則ち死す

△俱に盛なること四倍已上とは、平常の脈より四倍を謂ふ也、物以て過盛なる可からず、盛極れば則ち敗る凡そ脈盛にして關格に至る者は陰陽離絶して相營む能はず故に羸敗に至るなり極は盡也、精氣は天稟也其天年を盡す能はずして夭折するを云ふ○脈度篇に曰邪か府に在れば則ち陽脈和せず、陽脈和せざれば則ち氣之に留る氣留れば則ち陽氣盛なり陽氣太だ盛れば則ち陰利せず、陰利せざれば則ち血之に留る血留れば則ち陰氣盛なり、陰氣太だ盛なれば則ち陽氣榮する能はず故に關と曰ふ、陽氣太だ盛れば則ち陰氣榮する能はず故に格と曰ふ、陰陽俱に盛にして相榮するを得ず故に關格と曰ふ、關格する者は期を盡すを得ずして死す○按るに關格の脈症本經垂訓極て明なり世人此を病む者少からず而て歷代の醫師各々名目を立てて以て相傳訓す甚ふして其大義

寸口氣口脈口
三者皆同じ

此の註陰血の
其た人生に大
切なるを論し
人の精液を浪
費す可からざ
るを云ふ

を并て之を失ふに至る其謬や甚し夫れ關格は陰陽否絶して相榮運せず乖離離敗の候也故に人迎獨盛は病三陽の府に在る也、寸口獨盛は病三陰の藏に在る也蓋し大陰は氣を三陰に行ふ而て氣口の脈も亦大陰也、陽明は氣を三陽に行ふ而て人迎の脈は結喉の傍に在る也故に古法は三陽の氣を人迎に診し、三陰の氣を寸口に診せり云々關格の症は陰陽偏盛の極を以て或は人迎に見はれ、或は氣口に見はる云々六府の陰脫を格陽と曰ふ、陽か陰を格と曰ふ、五藏の陰脫を關陰と曰ふ、陰か陽を拒む也、藏府の陰俱に脫す故に關格と云ふ、然も既に陰陽關格と曰へば必ず彼此れ否絶す、當に陰陽對し言ふ可きは似たり、而て余か皆之を陰脫謂ふ者は何そや、正に脉盛の極を以て無陰と爲すなり、無陰なれば則ち根無し而て孤陽か外に浮露するのみ、凡そ此を犯す者必ず死す云々故に本神篇に曰五藏は精を藏するを主る者也、傷る可からず傷れば守を失て陰虚す、陰虚すれ無氣にして死すと、即ち關陰格陽の謂歟又按るに六節藏象、脉度、終始、禁服、經脉等の諸篇に關格脉を言ふこと再四蓋し其明の難きを恐れて也故に之を反覆して宣ふ誠に之を重する也後世の諸賢其旨を得る者鮮し云々○三難に曰脉に太過有り、不及有り、陰陽相乘有り覆有り溢有り關有り格有り何の謂そや、然り(荅の語)關の前は陽の動也、脉當に九分に見はれて浮なる可し、過る者を法に太過と曰ひ減する者を法に不及と曰ふ、遂て魚に上るを溢と爲し外關内格と爲す此れ陰乘の脉也、關以後は陰の動也、脉當に一寸に見はれて沉なる可し、過る者を法に太過と曰ひ、減する者を法に不及と曰ふ、遂て尺に入るを覆と爲し、内關外格と爲す、此れ陽乘の脉也○仲景之を宗として、曰尺に在るを關と爲し、寸に在るを格と爲す、關は小便するを得ず、格は吐逆す」と夫れ人迎四倍、寸口四倍は、既に尺寸の謂に非ず、而て吐逆と曰ふ者は、隔食の一症のみ、小便するを得ずと曰ふ者は癰閉の一症のみ、二症必しも死に至らず、繼で。王叔和より以後俱に能く辨すること莫し、悉に尺寸を以

後世改竄の關格

是れ人迎を左手と爲せし故に惑亂を云ふ

馬氏の說

て關格を言ひ且つ左を人迎と爲し、右を氣口と爲し、以て後世の惑亂を致し遂に陰陽表裏の大義を并せて皆之を失ふ○東垣が脉經を宗とするに及ては、則ち亦左を以て人迎と爲し、右を氣口と爲して、曰氣口の脉大さ人迎に四倍なる、此れ濁氣反て清道を行く也、故に關と曰ふと、其仲景を宗とする者は、則ち亦曰格は則ち吐逆、關は則ち不便と、甚きは○丹溪に至て、則ち特に關格の一門を立てて曰此の症多くは死す、寒上に在り、熱下に在り、脉兩寸俱に盛ること四倍以上と「夫れ兩寸俱に盛ること四倍なる、安そ寒上に在り熱下に在りと爲すを得んや、其說愈々乖て其義愈く失ふ、後學をして茫然辨知する所無らしむ、獨り近代の馬玄臺、諸子の非を知て曰關格の義は隔食癰閉の症に非ず、嗚呼痛哉軒岐の旨や、秦張王李朱は後世の醫を業とする者の宗とする所なるに、尙ほ内經し渺然たること此の如し、能く後世の下工をして、誰か能く關格の病名に非らざること知らしめ、又能く關格脉の死生を決して謬り無らんやと此の馬子の說誠に是也云々、鴻云本註論する所詳を極め其旨遠し我一々之を譯出するも人の倦厭せんことを恐る故に其要を撮録するに止めたり

○素問脉要精微論に岐伯曰四時に反する者有餘なるは精を爲し、不足なるは消を爲す

△此れ四時陰陽脉の相反する者も亦關格を爲すを言ふ也禁服篇に曰春夏は人迎微大、秋冬は寸口微大是の如きを命て平人と曰ふ、人迎は陽脉を爲りて春夏を主り、寸口は陰脉と爲して秋冬を主るを以て也、若し其反する者は春夏は氣口當に不足なる可きに反て有餘、秋冬は人迎當に不足なる可きに反て有餘なり此れ邪氣の有餘なり、有餘なる者は反て精を爲す也、春夏は人迎當に有餘なる可きに反て不足す、秋冬は寸口當に有餘なる可きに反て不足す、此れ血氣の不足なり、不足なる者は日に消を爲す」鴻今素問の註を見るに曰夫れ四時に反する者

鴻云此の精字
前註の關格は
陰脫也とある
に反して不陰
脱を云ふ歟

の諸不足は皆血氣の消損と爲し諸有餘は皆邪氣の勝精と爲す

應に太過なる可くして不足なるは精を爲し、應に不足なる可くして有餘なるは消を爲す、陰陽相應せざるは、病名けて關格と曰ふ

△春夏の如き人迎太過なる可く而て寸口は不足なる可き者か反て有餘にして精を爲す、秋冬は寸口太過なる可く而て人迎不足なる可き者が反て有餘にして精を爲す、是れ不足なる者の精を爲す也、春夏は寸口不足なる可く而て人迎有餘なる可き者か反て不足して消を爲す、秋冬は人迎不足なる可く而て寸口有餘なる可き者が反て不足して消を爲す、是れ有餘なる者消を爲す也、不足なる可くして而て有餘は邪の日に盛なる也、有餘なる可くして而て不足なるは正必ず日に消す、是の若き者は是れ陰陽相反し氣相營まずと爲す皆關格と名く「鴻曰素問次註は曰諸不足は皆血氣の消損と爲す諸有餘は皆邪氣の勝精と爲す也陰陽の氣相應合せず相營むを得ず故關格と曰ふ

第二十三 孕 脉

○素問平人氣象論に曰婦人手の少陰脉動甚き者は子を任む也

△手の少陰は心脉也○脉要精微論に曰上、上に付き、左の外は以て心を候ふ故に心脉當に左寸を診す可し、動甚とは流利滑動也心は血を生ず、血王すれば能く胎む、婦人心脉動甚は血王して然り、故に妊む可し、啓玄子

云手の少陰脉は掌後の陷者中、小指動に當て、而て手に應する者を云ふ也、蓋し心經の脉を指す即ち神門穴也、其説甚た善し然も余が驗を以てするに左寸も亦應す

○素問陰陽別論に曰陰、搏ち陽別るは之を子有り」と謂ふ

生子男女

△陰は前の手の少陰の如き也、或は足の少陰を兼て言ふも可なり、蓋し心は血を主り、腎は子宮を主る皆孕胎を主る、搏は手を搏撃する也、陽別るとは、陰脉手を搏つ陽邪に似たり然て其鼓動滑利本と邪脉に非ず、蓋し陰中に陽を見はして別に和調の象有るを以て、陰搏ち陽別ると謂ふ也○腹中論に曰何を以てか懷子の生れんとするを知るや、曰身に病有て邪脉無しと又王氏か脉經に曰尺中の脉之を按して絶へざるは妊娠也又滑伯仁か曰三部の脉浮沉正等に他病無して不月は妊也○生子の男女を知ること如何ん叔和か脉經に曰左疾は男と爲す、右疾は女と爲す又曰左手沉實は男と爲す、右手浮大は女と爲す又曰尺脉左偏へに大は、男と爲す、右偏へに大は、女と爲す又曰太陰の脉を得るを、男と爲し、太陽の脉を得るを、女と爲す、太陰は脉沉、太陽は脉浮と「自後凡そ妊脉を言ふ者總て此に出でず」滑伯仁に及へば、則ち曰左手の尺脉洪大を男と爲し、右手の沉實を女と爲す「近代徐東草か曰男女の別は陰陽を審にす可し、右肺盛に陰狀多きは俱に弄瓦を主る、左尺盛に陽狀多きは俱に弄璋を主ると」然れども多く矛盾し「憑據し難し」若し不易の理は、陰陽の二字に在り、左右を以て陰陽を分てば、左を陽と爲し右を陰を爲す、寸尺を以て陰陽を分てば、寸を陽と爲し尺を陰と爲す、脉體を以て陰陽を分てば、鼓搏沉實を陽と爲し、虛弱浮澁を陰と爲す、諸陽實を男と爲し、諸陰虛を女と爲す、庶くは一定の論と爲らん、然して猶ほ孕婦の強弱老少及び平日の偏左、偏右、尺寸の素よりの強弱を察す可し、斯に

其妙を盡すに足らん

第二十四 諸經脈症死期

○素問大奇論に曰肝滿腎肺滿皆實すれば即ち腫を爲す

腫滿

△滿は邪氣滯滞して脹滿を爲す也、此れ肝腎肺經皆能く滿を爲す、若し其脈實すれば、當に浮腫を爲す可し、而て辨は下文の如し

肺の雍る喘して而て兩胠滿す

△肺は膈上に居て其系横に腋下に出づ、故に肝雍れば則ち喘して兩胠滿す○雍塞同じ、胠音區、腋下の脇也

小便閉

肝雍れば兩胠滿す臥すれば則ち驚て小便するを得ず

△肝經の脈は陰器を環り脇肋に布く、故に肝雍れば則ち兩胠滿して小便するを得ず、肝は驚駭を主る、臥すれば愈々雍る故に驚多し

跛と偏枯

腎雍れば胠下より少腹に至るまで滿し、脛に大小有り、髀胫大に、跛し易し、偏枯す

△腎脈は内踝の後を循りて臑に上り、臑の内廉に出で股内に上り、腎に屬し膀胱に絡て上行す、故に腎經雍れば則ち胠の下より少腹に至るまで脹滿す、足脛或は腫れ或は消す是を大小と謂ふ、髀より胫に至る或は大を爲し或は跛を爲し或は掉易して力無し或は偏枯して用られず、是れ皆腎經雍滞して運行し能はざるの致す所なり○胠下諸本に脚下に作る、甲乙經に胠下に作る今之に従ふ

癰瘰筋擊

心脈滿大は癰瘰して筋擊す

△心脈滿大は火有餘也心は血脉を主る火盛なれば則ち血潤る故に癰瘰して筋擊す○癰は癰癰也、瘰は音熾抽搦也擊は音戀、拘攣也

同上

肝脈小急は癰瘰して筋擊す

△肝は血を藏す小は血不足、急は邪有餘と爲す、故に是の病を爲す、夫れ癰瘰筋擊は病一也、而て心肝の二經皆之れ有り、一は内熱一は風寒なり、寒熱同じからず、血衰は一也、故に同く是の病なり

肝脈驚暴なるは、驚駭する所有り、脈至らず若くは瘡するは、治せずして、自ら已ゆ

△驚は馳驟也暴は急疾也、驚駭は肝病なり故に肝脈急亂驚駭に因て然り、甚ふして脈至らずして聲瘡する者有り、思ふに卒に驚けば則ち氣逆す、逆すれば脈通せず、而て肝經の脈は喉嚨を循る、故に聲瘡して出てざる也、然れとも此れ一時の氣逆のみ、氣通れば則ち已ゆ、故に治せずして自ら已ゆ、瘡は聲不出

腎脈小急、肝脈小急、心脈小急にして鼓せざれば皆瘡爲す

△三脈細小にして而て急は、陰邪が陰分に聚る也故に當に三經の位に隨て瘡を爲す可し瘡は癥瘕也、鴻曰腹中塊腎と肝と并せて沉なるは石水と爲す、并せて浮なるは風水を爲す

石水風水

△此れ水病に陰陽有るを言ふ也腎肝は下に在り肝は風を主る、腎は水を主る、肝腎俱に沉は陰中の陰病也、當に石水を病む可し、石水は少腹に凝結し沉堅にして下に在る也、肝腎俱に浮は陰中の陽病也、當に風水を病む可し、風水は四體に遊行し上に浮泛する也、諸篇水症の詳義は會通類の水脹症を考ふ可し

死症

并せて虚は死と爲す

△腎は五藏の根と爲す、肝は發生の主と爲す、根本空虚なるは表有て裏無し、故に死す

驚を欲す

并せて小弦は驚せんと欲す

△肝腎并て小は眞陰の虚也小にして弦を兼るは、木邪か勝つ也、氣虚し膽怯の故に驚を欲す

腎脈大にして急沉、肝脈大にして急沉は皆疝を爲す

疝病

△疝は寒氣結聚の爲す所也脈急は肝邪を挟む、脈沉は陰分に在り、沉急にして大は、陰邪盛也、肝腎の脈は少腹に絡ひ陰器に結る、寒邪之に居る故に疝を病む○按るに疝病は寒か肝邪を挟む症なり、或は少腹に結し或は畢丸に結し或は畢丸の左右上下に結して筋急絞痛す、脈必ず急に搏つ者は多くは寒邪が陰分に結聚して風木の氣を挟むを以て也、四時刺逆從論に曰肺風疝、脾風疝の類皆一の風字を兼ぬ必ず肝邪を挟む知る可し、畢音高陰丸也

心脈、搏滑にして急は心疝と爲す、肺脈沉搏は肺疝と爲す

△心脈搏滑急は寒か肝邪を挟て心は乗する也、肺脈沉搏は寒か肝邪を挟て肺に乗する也

三陽急は瘕と爲す三陰急は疝と爲す

△三陽は手足の太陽經也、三陰は手足太陰經也、邪か三陽に乗すれば瘕聚を爲し、邪か三陰に聚れば疝氣を爲す、凡そ脈の急なる者は皆邪盛也前には肝腎心肺を言て此には脾經を言ふは五藏六府皆疝有る所以

二陰急は痲厥と爲す、二陽急は驚と爲す

痲と瘕
五藏六府皆疝
あり

痲厥と驚

以下數項腸澼
即下痢又痢血

△二陰は少陰也二陽は陽明也、脈急は風寒と爲す、邪か心腎に乗す、故に痲を爲し、厥を爲す、木邪か胃に乗す故に驚を發す、陽明脈解篇に曰胃は土也故に木音を聞て驚く者は、土か木を惡めば也と是れ亦此の義

脾脈、外に鼓して沉を、腸澼と爲す、久くして自ら巳ゆ

△沉は裏に在りと爲す外鼓を兼る者は邪甚深ならず、腸澼を爲すも、久ふして自ら巳ゆ可し、腸澼は下痢也、凡そ心肝脾腎皆陰分を主る、或は寒濕或は熱各々傷る所有れば、大腸より下血す均く腸澼と云と

肝脈小緩は腸澼を爲す治し易し

△肝脈急大は邪盛愈へ難し小緩は邪輕く治め易し

腎脈小に搏ち沉は腸澼下血と爲す、血温かに身熱する者は死す

△腎は下部に居る、其脈本と沉、若し小にして搏つは、陰氣不足にして陽氣之に乗すと爲す、故に腸下血を爲す若し其血温に身熱するは、邪火有餘にして眞陰敗る故に死す

心と肝と澼するも亦下血す、二藏同く病む者は治す可し

△心は血を生じ肝は血を藏す故に二藏の澼も亦下血す而て獨り腎のみならざる也、然して心肝二藏は木と火にて同氣の故に、同く病むは順と爲す、治す可し、若し肝と脾と同く病むは、是れ土敗木賊と爲す、難治なること明なり

其脈小沉にして澼は、腸澼と爲す、其熱する者は死す、熱見はれて七日に死す

△心肝の脈、小沉にして澼は、陰不足にして血傷るを以て腸澼を爲す、然して脈沉細は熱す可からず、然るに

偏枯

脉小に身熱は逆と爲す、故に死す可し、七日は六陰敗れ盡る也

胃脉沉にして鼓して濇、胃外鼓して大、心脉小堅にして急は、皆鬲して偏枯す

△沉して鼓濇は陽不足也、外鼓して大は陰か傷を受る也、小堅にして急は陰邪勝つ也、胃は水穀の海と爲す、心は血脉の主と爲す、胃氣既に傷れ血脉又病む、故に上下鬲して半身偏枯す

男子は左に發し女子は右に發す、瘖せずして舌轉ずるは治す可し、三十日に起つ

鴻云全體男は左、女は右なるに今之を顛倒する者は何ぞや蓋し重陽重陰の故に其偏倚甚き也

△男子は左を逆と爲し右を順と爲す、女子は右を逆と爲し左を順と爲す、今偏枯して男は左に發し女は右に發す是れ逆症也、若し聲瘖せず舌轉ず可きは、經に逆すと雖も未だ藏に甚しからず治す可し、一月に起つ可し、脉解論に曰内奪れて脈すれば則ち瘖俳を爲すと今偏枯して瘖する者の腎氣竭くること知る可し、鴻云俳は廢也其從なる者は瘖す、三歲にして起つ

△若し男は右に發して左に發せず、女は左に發して右に發せず、之を從と謂ふ然して症は從たりとも聲は瘖す是れ外軽く内重ければ也必ず三歲に起つ

年二十に満たざる者は三歲に死す

△氣力方に剛き年を以て偏枯廢疾を見はす此れ稟賦不足の故也

脉至て搏ち血衄身熱する者は死す、脉來ること懸鉤にして浮なるは常脉と爲す

△搏は脉弦強なり、陰虛者最も之を忌む、凡そ諸失血鼻衄の疾、其脉搏して而て身熱するは、眞陰脫敗也、故に死す、然て失血の症多くは陰虛す、陰虛の脉、多くは浮大なり、故に懸鉤にして浮は、乃ち其常脉なり、慮

死症及懸鉤の脉症

死症

るに足ること無し、懸は高からず、下からず、浮ならず、沉ならず、物の空に懸るか如し、脉浮鉤と雖も未だ中和の氣を失はず

脉至ること喘ぐか如きを名て暴厥と曰ふ暴厥者は人と言ふことを知らず

△喘は氣喘の如し急促を云ふ暴厥は卒然厥逆して人を知らざる也

脉至ること數の如きは、人をして暴驚せしむ、三四日に自ら已ゆ

△數脉は熱を主る而て數の如き者は實は眞數の脉に非ず蓋し卒然肝心の火を動す故に然る也三四日に氣衰へて自愈

○脉至ること浮合す、浮合は數の如く、一息十至以上なり、是れ經氣、不足に予る也、微見して九十日に死す

△以下皆死期を言ふ、浮合は浮波の合ふか如し、後へ以て前を催し、泛泛として常無き也、一息十至以上なり、其狀數の如くにして實は數熱の脉に非ず、是れ經氣の衰極也、微見は始見也初て此の脉を見はす也、九十日は時候季節の變更にして人氣之に従ふ也、予は與也黨與の意

脉至ること火薪の然か如くなる是れ心精の奪ふに予る也草乾て死す

△火薪の然の如しとは、來ること焰の銳の如く、去ること滅の速の如し、此れ火藏無根の脉にして心經の精氣か奪に與する也、夏令は火王す猶ほ支ふ可し、草乾て死す陽盡る時也

脉至ること散葉の如きは、是れ肝氣虛に予る也、木葉落て死す

暴驚と數に似たる脉

暴厥

以下死期

△散葉とは浮泛にして無根也此れ肝氣大虚を以て收斂無し、木葉落は金勝ち木敗る、肝死する時也

脉至ること省客の如し、省客とは、脉寒て鼓す、是れ腎氣不足に予る也、棗華を懸去して死す

△省客は省問の客なり、或は去り或は来る也、寒は或は無にして止む、鼓とは或は有て搏つ也、是れ腎原固からずして主持する所無き也棗華の候は初夏の時也、懸とは華の開、去は華の落なり棗華開落の時を言ふ火王して水敗す腎虚者死す

脉至ること丸泥の如きは、是れ胃精不足に予る也、榆莢落て死す

△丸泥は泥彈の状ち、堅強短濇の謂なり、此れ胃精中氣の不足也、榆莢は春深くして落つ、木王する時、土敗る者死す

脉至ること横格の如きは是れ膽氣不足に予る也禾熟して死す

△横格は横木の指は格るか如く長にして且つ堅し、是れ木の眞藏にして、膽氣の不足と爲す、禾は秋に熟す金令王す故に木敗死す

脉至ること弦縷の如きは是れ胞精不足に予る也病て善く言ふ、霜下て死す

△弦縷は弦の急の如く縷の細の如し眞元虧損の脉也、胞は子宮也、命門は元陽の聚る所也（鴻云腎藏の處）胞の脉は腎に繋る、腎の脉は舌本に繋る、胞氣不足は當に靜にして無言なる可し、今反て善く言ふは、是れ陰氣藏せずして、虚陽か外に見はる、霜下る時に及て、虚陽消散して死す、故に善く言ふ者より無言の者に若かず云々

脉至ること交漆の如し、交漆、左右傍より至る也微見れて三十日に死す

△交漆は寫漆の交るか如し、左右傍至は纏綿として清からざる也、微見は初見也三十日は月建の易るなり而て陰陽偏敗する者は一月の期に過ぎず

脉至ること湧泉の如く浮て肌中に鼓するは、太陽の氣不足に予る也氣少し、韭の莢を味ふて死す

△湧泉は泉の湧くか如く升有て降無し而て浮て肌肉の中に鼓す是れ足の太陽膀胱の氣不足也膀胱は三陽と爲す而て外を主る其外實して、内虚し陰精不足故に少氣を爲す、當に韭莢を味ふ時に至て死す可し是れ冬盡て春の初め水漸く衰ふを以て也鴻云韭の花は八月也、本註の誤ならん

脉至ること顔土の状の如く之を按せとも得ず、是れ肌氣不足に予る也。五色先づ黒を見はす、白壘發して死す

△顔土の状は虚大にして無力而て之を按せとも即ち得可からず、肌氣は脾氣なり脾は肌肉を主る也黒は水色なり土敗れ極て水反て之に乗ず故に死す、壘は藁と同じ蓬藁の屬なり五種有り白者春に發す、木王する時土敗る脉至ること懸雍の如し、懸雍は浮にして之を揣切すれば益く大なるは、是れ十二俞の不足に予る也水凝て死す

△懸雍は喉間下垂の肉乳也、懸雍の如く浮にして之を揣切すれば益く大とは、浮短孤懸にして、上無く下無き也、兪は皆背に在り十二經藏氣の繋る所なり、水凝て死は、陰氣盛にして弧陽絶する也「鴻云揣字典量也」
脉至ること偃刀の如し、偃刀は之を浮ふれば、小急に、之を按せば堅大にして急なり、五藏菟熱

し、寒熱獨り腎に并する也、此の如きは、其人坐することを得ず、立春に死す

△偃刀は臥刀也、之を浮て小急とは、刀口の如く也、之を按して堅大にして急とは、刀背の如く也、此れ五藏
菑熱を以て發して寒熱を爲す、陽王すれば陰消す故に獨り腎に并す也、腰は腎の府也腎陰既に虧れば起坐する
能はず、立春は陽盛に陰日に衰ふ故に死す菑は鬱と同じ

脈至ること丸の如く、滑にして、手に直らず、手に直らずとは、之を按して得可からざる也、是れ
大腸の氣不足に予る也、棗葉生して死す

△丸とは短にして小也、直は當也、滑小にして無根而て按に勝ざる也、大腸は庚金に應ず、棗葉は初夏に生
ず、火王する時なり金衰て死す、鴻曰庚金は金を陽金陰金に分つ其陽金也

脈至ること華の如くなるは、人をして善く恐れしめて、坐臥するを欲せず、行立して常に聴くは、
是れ小腸の氣不足に予る也、季秋に死す

△華は草木の華、輕浮柔弱也小腸は丙火(陽火)に屬して心と表裏たり、小腸不足すれば則ち氣、心に通ず、
善く恐れて坐臥を欲せずとは心氣怯にして安からざる也、行立常に聴くとは恐懼多くして疑を生ずる也、丙火
は戌に墓す故に季秋に死す

第二十五 死生を決す

○素問三部九候論に帝曰死生を決すること奈何ん

△其形症、脈息に因て豫め其死生を知らんと欲す

岐伯曰形盛に脈細く少氣して以て息するに足らざる者は危し

△是れ外有餘にして中不足し枝葉盛にして根本虚す故に危亡近し

形瘦せ脈大にして胸中多氣は死す

△是れ陰不足して陽有餘也、陰形既に敗れて孤陽獨り留るの理無し、故に死す

形と氣と相得る者は生く

△體は形也陰と爲す、運行は氣也陽と爲す、陰は靜を主る、陽は陰無れば成らず、陽は動を主る、陰は陽無れ
ば生せず、故に形は以て氣を寓し、氣は以て形を運す、陰陽相す可し相失ふを得ず故に相得る者は生く、此に
反する者は危し

參伍して不調の者は病む

△三以て相參へ、伍以て相類して、或は大或は小或は遅或は疾、往來出入して常度無きを不調と云ふ皆病脈也

三部九候皆相失ふ者は死す

△三部九候の義は前第五を見る可し、皆相失ふとは、其常を失ふを謂ふ、下文の乍ち疎乍ち數、眞藏、脫肉、
七診の類是れ也

上下左右の脈相應すること、參春の如き者は病甚し、上下左右相失して、數ふ可からざる者は死す

△上下左右は三部九候也參春は大數にして數すること杵春の如し陽極の脈也、故に病甚と曰ふ、甚ふして息と

數と相失ふて、計數す可からざるは死す、脈法曰人一呼に脈再至、一吸に脈亦再至を平と曰ふ、三至を離經と曰ひ、四至を脫精と曰ひ、五至を死と曰ひ、六至を命盡と曰ふ、今相失て數ふ可からず必死知る可し

中部の候、獨り調ふと雖も衆藏と相失ふ者は死す、中部の候相減する者は死す

△三部の脈、上部は頭に在り中部は手に在り下部は足に在り、中部の脈獨り調ふと雖も頭足衆藏の脈已に其常を失ふ者は死す、若し中部の脈、上下二部より減する者は中氣大に衰ふ故此も亦死す

目内に陷る者は死す

△五藏六府の精氣皆上て目に注ぐ之れか精を爲す、目内に陷る者は陽精脱す故に死す

左の手足の上、上みに踝を去ること五寸を按し、庶くは右の手足の踝に當て之を彈く

△手足の絡、皆取て之を驗す可し、手踝の上は手の太陰の絡也、足踝の上は足の太陰脾の絡也、肺は氣を藏し而て治節を主る、脾は土に屬して灌漑を主る、故に取て以て吉凶を察す可し

其應、五寸以上を過て蠕蠕然たる者は病まず、其應、疾く、手に中ること、渾渾然たる者は病む、手に中ること徐徐然たる者は病む、其應、上み五寸に至ること能はず、之を彈て應せざる者は死す

△應は動也、應か五寸以上に過るに氣脈充る也、蠕々は蟲行く貌なり、其稟滑にして勻和を云ふ、是を不病の脈と爲す、疾は急疾也、渾々は濁亂也徐々は遲緩也、五寸に至る能はざるは氣脈の衰也之を彈て應せざるは氣脈絶す故に微は則ち病と爲す而て甚は死す蠕音如

鴻曰本條に由れば手脈のみ診は不備に似たり尚ほ第三十二頭書參閱

是を以て脱肉して身去らざる者は死す

△脾胃竭れば肌肉消す、肝腎敗れば筋骨憊る、肉脱し身重は死期至る、去らずとは、動搖來去する能はざる也

中部乍ちに疎、乍ちに數は死す

△中部は兩手脈也本脈は氣脈敗亂の兆故に死す

其脈代にして而て鉤は病、絡脈に在り

△代にして鉤は俱に夏氣に應ず、而て夏氣は絡に在り

九候の相應するや上下一の若くして相失ふを得ず

△一の若しとは其大小遲疾皆和平を貴ふ也 (鴻曰第三十二に相反する如き者あり曰小大相等き者は病已へ難しと本節の一は和平の二字に在る可し)

一候後るれば則ち病む、二候後れば則ち病甚し、三候後れば則ち病危し、所謂後るとは應、俱ならざる也

△應、俱ならずとは脈常度を失て逆順無倫也鴻云春の脈は弦、夏の脈は鉤の類是れ常度ならん

其府藏を察して以て死生の期を知る

△死生の期は其尅賊、生王を察して知るし可鴻曰五行生尅を云ふ、

必ず先づ經脈を知て然後ちに病脈を知る

△經脈は常脈也其常脈を知らざれば其病變の脈を知る能はず

眞藏の脉見はるる者は、勝たれて死す

△眞藏脉の義は後文、勝れて死とは其已に勝つ時に遇ふて死す、肝か庚辛を見、脾か甲乙を見るの類

足の太陽の氣絶する者は其足屈伸す可からず、死すれば必ず戴眼す

△足の太陽の脉の下なる者は腦中に合し腦内に貫き外踝の後に、上なる者は、目の内眥に起る、其脉、項に通して腦に入る者有り、目本に屬す、眼系と曰ふ、故に太陽氣絶者は、血枯れ筋急にして、足屈伸す可からず、死すれば必ず、戴眼す、是れ睛上視して瞪する也

帝曰冬は陰、夏は陽、奈何（時死を言ふ也）岐伯曰九候の脉、皆沉細懸絶する者は陰と爲す、冬を主る故に夜半を以て死す、盛躁喘數は陽と爲す夏を主る、故に日中を以て死す

△夜半は一日の冬也、陰盡て陽生ず、故に陰極る者死す、日中は一日の夏也、陽盡て陰生ず、故に陽極る者死す

是の故に寒熱病は平且を以て死す

△平且は一日の春、陰陽の半也、（鴻曰夜明方也明暗の交）故に寒熱病者陰陽出入の時に死す

熱中及熱病者は日中を以て死す

△陽を以て陽を助けば眞陰竭く

風を病む者は日夕を以て死す

△日夕は一日の秋也風と木は同氣也金に遇ふて死す
水を病む者は夜半を以て死す

△亥子に生王して邪盛極る

其脉乍疎に乍ち數、乍ち遲に乍ち疾は、日か四季に乗じて死す

△脉變常ならざる者は中虚にして無主也、日の四季は辰戌丑未の時也、四季は五行の墓地と爲す、故に敗竭の藏、之に遇て死す

形肉已に脱するは九候調ふと雖も猶ほ死す

△脾は肌肉を主て五藏の本たり、故に脾氣脱して生る者有らず

七診見はると雖も九候皆從ふ者は死せず

△七診の義は前の第六に見ゆ、從は順也所謂脉か四時の令に順ひ及び諸經の體を得る者は、獨大獨小等の脉有るも死せず

死せずと言ふ所の者、風氣の病、及び經月の病は、七診の病に似て而も非也、故に死せずと言ふ

△風は陽病也故に偶く風に感すれば、陽分の脉或は大或は疾也、經月は常期也、故に適々去血に遇へば陰分の脉、或は小或は遲或は陷下を爲す、此皆七診の脉に似て實は非也、皆以て死と言ふ可からず、然らば則ち外感及び經月の病に非ずして、七診の脉を得る者は吉兆に非ず

若し七診の病有て其脉候も亦敗る者は死す、必ず噦噫を發す

診察の順序次第

△此れ上文を承て言ふ、風氣經月の病は本と七診の類に非ず、若し其れ果して脉息症候の敗に係る者は又不死の比に非ず然して其死するや必ず嘔噦を發す、蓋し嘔は胃に出づ土氣の敗也、噦は心に出づ、陰邪勝つ也○嘔は呃逆也、噦は噦氣也

必ず審かに其始て病む所と今の方に病む所とを問て、而後に各々其脉を切循し、其經絡浮沉を視、て上下逆從を以て之に循ふ

△凡そ病を診するの道、必ず其始て病むを問ふは、病原を察する也、今の病を求るは、現在症を察する也本末既に明にして、而後に、其脉を切按し以て其經に在り絡に在るを參合す、或は浮或は沉、上下逆從、各々其次に因て之を治す

其脉疾き者は病ます、其脉遲き者は病む、脉往來せざる者は死す、皮膚著く者は死す

△疾は力強く神有るを言ふ、遲は氣衰不足を言ふ、若し脉往來せざる者は陰陽俱に脱す、皮膚著くとは血液已に盡て、皮膚枯槁して、骨に着くを云ふ

帝曰其治す可き者奈何岐伯曰經病者は其經を治す

△經脉は裏と爲す、支にして横なる者を絡と爲す、其經を治すとは其經に即て之を刺す也

經絡經絡の解絡病治

孫絡の病は其孫絡の血を治す

△絡の小者を孫と爲す、即ち絡脉の別て肌膚に浮ぶ者也經脉篇に曰諸々絡脉を刺す者は、急に之を取て以て其邪を寫して、而て其血を出す、之を留れば發して痺を爲すと故に曰其血を治むと

血病治

血病身に痛有る者は、其經絡を治す

△血病て身痛む者は孫絡に止らず、經も亦滯有る也、當に其經絡に隨て之を刺す可し

其病の奇邪に在る、奇邪の脉は則ち之を繆刺す

△奇邪は經に入らずして絡に病む也、邪か大絡に容すれば則ち左は右に注ぎ、右は左に注で其氣常處無し、故に當に之を繆刺す可し、鍼刺類三十に詳なり「鴻云此れ素問繆刺論也類註曰繆刺とは左を以て右を取り右を以て左を取る、又類經二十卷四十七丁の註曰繆は異也左の病には右を刺し、右の病には左を刺す、其處を異にす、故に繆刺と云ふ

留瘦して、移らず、節して之を刺す

△留は病留滯也、瘦は形消瘦也、移らずとは遷動せざる也、凡そ邪久留し移らざる者は、必ず四支八絡の間に於て結聚す、故に當に節の會する處に於て、索めて之を刺す

上實下虛の治
上み實して、下も虚すれば切して之に従ひ、其結絡の脉を索め、刺して其血を出して以て之を通するを見る

上視及戴眼
△當に其脉を切して之を求め其經に従て之を取る可し結滯去て通達見はる
腫子高き者は、太陽不足す、戴眼する者は太陽已に絶す、此れ死生を決するの要なり、察せざる可からず

△腫子高くとは、目上視する也、戴眼は上視甚く定直にして、動かざる也此れ重て上文足の太陽の症を明にし

脱簡文

て、其輕重を分て以て死生を決す
手指及び手の外踝五指に鍼を留む

△本節の義相屬せず、及び前節には單に太陽を言て他經に及ばず、必ず古文の脱簡

第二十六 脉に陰陽眞藏有り

人の四經十二
脉は四時十二
月に應ず

○素問陰陽別論に黃帝問て曰人に四經十二從有りと何の謂ぞ、岐伯對て曰四經四時に應じ、十二從
十二月に應じ、十二月十二脉に應ず

△四經四時に應ずとは、肝木は春に應じ、心火は夏に應じ、肺金は秋に應じ、腎は冬に應ず、脾を言はざるは脾は
四經を主て四季に王すれば也、十二從十二月に應ずとは、手に三陰三陽有り、足に三陰三陽有り、以て十二月の氣
に應ず而て人の十二經脉に應ずる也、所謂從とは手の三陰は藏より手に走る等の義也

脉に陰陽有り、陽を知る者は陰を知り、陰を知る者は陽を知る

△是れ最も詳知す可し必ず陽脉の體を知て而後に能く陰脉を察す、陰脉の體を知て而後に能く陽脉を察す、又
陽中に陰有るは陽に似て陽に非ず、陰中に陽有るは陰に似て陰に非ず、陰陽を辨することは未だ必しも難から
ず、眞假を辨するを難しと爲す、誤認する者は人を反掌に殺す、鴻曰寒極て熱に似たり、熱極て寒に似たるか
如き之を假と謂ふ

凡そ陽に五有り、五五二十五陽あり

五五二十五陽
陽は胃氣也

眞藏脉是れ陰
也胃氣無き也

△陽は下文に云ふ胃脘の陽の如し即ち胃氣也、五は五藏の脉なり、肝は弦、心は鉤、脾は柔、肺は毛、腎は石
也一藏を以て五脉を兼るときは則ち五藏五に見はる、是を五五二十五脉と爲す、然して皆以て胃氣無る可から
ず故に又五五二十五陽と曰ふ也

所謂陰は眞藏也見はるれば則ち敗を爲す、敗すれば必ず死する也

△陰とは無陽なり、無陽とは即ち胃氣無くして本藏の陰脉獨り見はる也、只弦、只鉤の類なり、之を眞藏と爲
す、胃氣無し故に必死

所謂陽とは胃脘の陽也

陽は胃氣也

△胃は陽明に屬す、胃脘の陽は胃中陽和の氣則ち胃氣也、五藏之に賴て養はる故に五藏の本と爲す、人胃氣無
きを逆と曰ふ逆者は死す

陽を別つ者は病處を知る也、陰を別つ者は死生の期を知る

陰陽を別つ人
の事

△陽和の胃氣を別ては則ち一も不和有れば便ち疾病の所を知る、純陰の眞藏を知れば則ち生尅に遇へば便ち死
生の期を知る○玉機眞藏論に曰陽を別つ者は病の從來を知る、陰を別つ者は死生の期を知ると義此れと互に發
明有り、藏象類二十四に見ゆ【鴻曰是れ素問玉機眞藏論也】

三陽は頭に在り三陰は手に在り所謂一也

人迎脉と氣口
脉

△三陽頭に在りとは、人迎脉を指す、三陰手に在りとは、氣口脉を指す○太陰陽明論に曰陽明は表也之か爲め
に氣を三陽に行ふ」と蓋し三陽の氣は陽明胃氣を本と爲す、而て陽明の動脉を人迎と曰ふ結喉の傍に在り、故

に曰三陽は頭に在りと又曰足の太陰は三陰也、之が爲めに氣を三陰に行ふと、蓋し三陰の氣は太陰脾氣を以て本と爲す、然して脾脈は本と氣口に非ず、何ぞ手に在りと云ふや五藏別論に曰五味口に入り胃に藏して以て五藏の氣を養て而て變して氣口に見はる、氣口も亦太陰也と、故に三陰は手に在りと、上文には眞藏と胃氣を以て陰陽を言ひ、此の節には人迎と氣口を以て陰陽を言ふ、蓋し彼には脈體を言ひ、此には脈位を言ふ二者相依る所謂一也、氣口の義藏象類十一に見ゆ、鴻云是れ素問五藏別論又云所謂一也の語迷ひ易し二脈同一にあらず各異なり後の三十二三十三參閱

重て陰陽を別つる利を云ふ

陽を別つ者は病の忌時を知る、陰を別つ者は死生の期を知る

△此れ前節と稍や同ふして復た之を言ふ者は蓋し前には眞藏と胃氣を以て言ひ、此には陰陽と表裏を以て言ふなり、正に玉機眞藏論と同じ、二義相關す皆缺く可からず、觀者會通す可し、忌時とは氣に王衰有り病に時忌有るを言ふ

謹て陰陽に熟して衆と謀ること無れ

△陰陽の理を熟知し練達するを要す故に謹と曰ふ、獨聞獨見は衆の知る所に非ず故に曰與に謀る勿れと鴻曰天下百官あつて一の明眼者無きを常とす、衆議の衆愚、一人の獨往獨見に如かざるや知る可し、俗醫の立會など愚の至り也、常に失敗に歸するを見る

所謂陰陽とは、去る者を陰と爲し、至る者を陽と爲す、靜者を陰と爲し、動者を陽と爲す、遲者を陰と爲し、數者を陽と爲す

陰陽の脈形

△脈の陰陽其概此の如し、陽を得る者は生く、陰を得る者は死す此れ其要也

第二十七 骨枯れ肉陷り眞藏見はる者死す

○素問玉機眞藏論に曰大骨枯葉し、大肉陷下し、胸中氣滿ち、喘息便ならず、其氣が形を動す、期六月に死す、眞藏脈見はるれば乃ち之に期日を予ふ

△太骨大肉は皆通身を以て言ふ、肩脊腰膝の如き皆大骨也、尺膚臂肉は皆大肉也、肩垂れ項傾き腰重く膝敗は大骨枯葉也、尺膚既に削られ臂肉必ず枯は大肉の陷下也、腎は骨を主る、骨枯れば腎敗る、脾は肉を主る、肉陷れば則ち脾敗る、肺は氣を主る、氣滿ち喘息すれば則ち肺敗る、氣が原に歸せざれば形體振動し孤陽外に浮て眞陰虧く、三陰虧損すれば死期六月を出でず六月は一歳陰陽の更變也、若し其眞藏脈已に見るれば則ち六月の例に在らず、尅賊の日に因て其期を定む可し

大骨枯葉し大肉陷下し、胸中氣滿ち、喘息便ならず、内痛て肩項を引くは期一月に死す、眞藏見はるは乃ち之に期日を予ふ

△内痛肩項引は病か心經に及ぶ、前に較すれば甚し、期一月に死す一月は斗建移て而て氣易る也

大骨枯葉し、大肉陷下し、胸中氣滿ち喘息便ならず、内痛て肩項を引き身熱し腕肉破腫し眞藏見はるは十日の内に死す

△身熱は陰氣去る也脱肉は肌肉消盡也破胸は臥久く骨露れて筋肉敗る也是を五藏俱に傷ると爲す而て眞藏又た見る當に十日の内に死す可し、十日は天干盡て旬氣易る也原書月字は誤也日に作る可し胸は筋肉結聚の處大骨枯葉し大肉陷下し肩髓内消し動作益々衰へ眞藏未だ見はれず、期一歳に死す、其眞藏を見はすは乃ち之に期日を予ふ

△骨枯肉陷は脾胃已に虧く之に肩髓内消、動作益衰を兼るは、諸症未だ全からずと雖も、敗竭已に兆す云々大骨枯葉し大肉陷下し胸中氣滿ち腹内痛み心中便ならず肩項身熱し破胸脱肉し目匡陷り眞藏見はれ、目人を見ざるは立ところに死す、其人を見る者は、勝ざる時に至て則ち死す

△五藏の敗症俱に見て目匡陷り云々は神氣已に脱す云々若し人を見る者は尅賊の時を待て死す急に虚し、身の中らること卒に至り、五藏絶閉し、脉道通せず氣往來せざは、墮と溺とに譬ふ、期を爲す可からず、其脉絶て來らず、若くは人の一息に五六至、其形肉脱せず、眞藏見はれずと雖も猶ほ死す

△急虚とは元氣暴に傷れて忽甚也、其中邪卒然也、之を墮者溺者に譬ふ、常期を以て論す可からず、若し脉絶又は一呼に五六至は皆藏氣竭て命盡く可し、故に其形肉脱して、眞藏見るを必せず原文息字は呼に作る可し

○眞肝の脉至るは中外急にして刀刃を循か如く責責然として、琴瑟の弦を按すか如く、色白不澤、毛折れて乃ち死す

肝の眞藏死

卒死の期を爲し難き者

△以下皆置藏脉を言ふ、肝の眞藏刀刃の如く琴瑟の弦の如しとは、細急堅搏にして微弦の本體に非ず、青色は木色にして白く不澤を兼るは、金か木を尅する也、五藏率ね毛折れて死するは、皮毛は血氣を得て充つ、毛折れば則ち精氣敗る、故に皆死す

○眞心脉の至るは、堅にして搏ち、薏苡の子を循るか如く累累然たり、色赤黒にして不澤、毛折て乃ち死す

△堅にして搏ち薏苡の子を循るか如しとは短實堅強にして微鉤の本體に非ず、心の眞藏脉也赤は本と火色而て黒不澤を兼るは水か火を尅する也

○眞肺の脉至るは大にして虚し毛羽を以て人の膚に中るか如く、色白赤不澤にして、毛折て乃ち死す

△大にして虚、毛羽を以て膚に中るか如しとは、浮虚無力の甚にして微毛の本體に非ず、白は本と金色而て赤不澤を兼るは、火か金を尅する也

○眞腎の脉至るは搏て而て絶し、指にて石を弾て、辟辟然たるか如し、色黒黄不澤にして、毛折て乃ち死す

△搏て絶は搏の甚也、石を弾て辟辟然は沉にして堅也皆微石の本體に非ず、黒は本と水色なり、黄不澤を兼るは土か水を尅する也

○眞脾の脉至るは、弱にして乍ち數、乍ち疎なり、色黄青不澤にして、毛折れて乃ち死す

脾の眞藏死

死肺の眞死

心の眞藏死

毛折死の理

腎の眞藏死

胃氣と眞藏との結論

△弱にして乍に數、乍に疎は和緩全く無し、微^〇弱^〇の^〇本^〇體^〇に非ず黃は本と土色なり而青不澤を兼るは木か土を尅する也

諸く眞藏脉見はるる者は、皆死す不治也

△無胃氣を即ち眞藏と名く

黄帝曰眞藏を見はすを死と曰ふは何そや岐伯曰五藏は皆氣を胃に稟く、胃は五藏の本也

△胃は水穀の海として五藏を養ふ故に本と爲す

藏氣は自ら手の太陰に至ること能はず、必ず胃氣に因て乃ち手の太陰に至る也

△穀、胃に入て以て肺に傳へ、五藏六府皆以て氣を受く、故に藏氣必ず胃氣に因て手の太陰に至るを得る、而て脉は則ち氣口に見はる云々

故に五藏各々其時を以て自ら爲して手の太陰に至る也

△時を以て自ら爲すとは、春にして弦、夏にして鉤の類を云ふ

故に邪氣勝つ者は精氣衰ふ也、故に病甚き者は胃氣之れと俱に手の太陰に至ること能はず、故に眞藏の氣獨り見はる、獨り見はる者は、病か藏に勝つ也、故に死と曰ふ帝曰善し

△凡そ邪氣盛にして正氣竭る者は是れ病か藏に勝つ也云々

第二十八 眞藏脉の死期

○素問陰陽別論に曰凡そ眞脉の藏脉を持つ者は、肝の至ること懸絶して急なるは、十八日に死す

△此れ眞藏也懸絶にして急とは全く和平を失て弦搏異常也、十八日は木金成數の餘と爲す、金か木に勝て死す

○此より下死期は悉く王氏の意に遵ふて河圖を以て計り數ふ誠に理を得たりと爲す、然れども或は生數を言ひ或は成數を言ふて一に歸せざるか若し疑無き能はず別に愚按有り鍼刺類六十四に在り參正す可し、鴻云々近き將來に鍼刺類譯出す可し又河圖及び生數成數は前第五に載す周易の書に在り就て見る可し

心の至ること懸絶なるは九日に死す

△九日は火水生數の餘と爲す、水か火に勝つ也

肺の至ること懸絶なるは十二日に死す

△十二日は金火生成の餘と爲す、火か金に勝つ也

腎の至ること懸絶なるは七日に死す

△七日は水土生數の餘と爲す、土か水に勝つ也

脾の至ること懸絶なるは四日に死す

△四日は木の生數の餘と爲す、木か土に勝つ也、凡そ皆尅賊の氣に勝へず故に眞藏の獨見は氣敗て而て危し

○素問平人氣象論に曰肝の見はるるは庚辛に死す

△眞藏脉見、尅賊の日に死す庚辛は金なり、肝木を伐つ也

心の見れば壬癸に死す

眞藏死は五行尅賊の日に於てす

△壬癸は水也心火を滅す

脾の見れば甲乙に死す

△甲乙は木也脾土を尅す

肺の見れば丙丁に死す

△丙丁は火也肺金を燠す

腎の見れば戊己に死す

△戊己は土也腎水を傷る

是を眞藏見はるれば皆死すと謂ふ

△此れ三部九候論に所謂眞藏の脉見はるる者は勝たれて死と云ふ義也

第二十九 陰陽虚搏病候死期

○素問陰陽別論に曰陰搏ち陽別る之を子有りと云ふ

△前の二十三に註せり

陰陽虚して腸辟するは死す

△陰陽虚とは尺寸脉俱に虚也、腸辟は膿血を利する也、胃氣留らず魂門（肛門也）（五里をたし）禁せずして陰陽虚する者は、藏氣竭く故に死す○通評虚實論に曰滑大なる者を生と曰ふ、懸澹者は死す

妊娠脉

腸辟死腸辟は
痢病也

汗の病理

陽、陰に加ふ之を汗と謂ふ

△陽は脉體を言ふ、陰は脉位を言ふ、汗液は陰に屬す、而て陽か陰に加ふれば、陰氣泄る、故に陰脉に陽多きは汗多し

陰虚し陽搏つ之を崩と謂ふ

△陰虚する者は沉て取て、足らず、陽搏つ者は浮て取て、餘り有り、陽實し陰虚す故に内崩失血の症を爲す

三陰俱に搏つは二十日の夜半に死す

△三陰は手の太陰肺と足の太陰脾也（鴻曰此の三陰は陰の位）搏は即ち眞藏の搏擧也、二十日は脾肺成數の餘也、夜半に陰極て氣盡く故に死す鴻曰脾の成數は十也肺の成數は九也故に二十日死す

二陰俱に搏つは十三日の夕時に死す

△二陰は手の少陰心と足の少陰腎也十三日は心腎の成數也夕時は陰陽相半し水火分争の會也

一陰俱に搏つは十日の平且に死す

△一陰は手の厥陰心主と足の厥陰肝也十日は肝と心の生成の數也平且は木火王し極て邪更に甚し故に死す

三陽俱に搏ち且つ鼓すれば三日に死す

△三陽は手の太陽小腸と足の太陽膀胱也水の生數は一火の生數は二故に死三日に在り、其死の速なるは既に搏ち且つ鼓して陽邪盛極を以て也

三陰三陽俱に搏ち心腹滿して發盡し隱曲するを得ざるは五日に死す

△三陰二陽は脾肺小腸膀胱也四藏俱に搏てば則ち上下俱に病む、故に上に在ては心腹脹滿して發盡するに至る發盡とは脈の極也下に在ては隱曲するを得ず、陰道不利也四藏俱に病む惟胃氣を以て主と爲す、土の生數は五なり五數盡て死す」鴻曰隱曲の義種々處に依て異也或は女子の不月を指し或は陽道の病と云ひ或は陰中に瘡あり互に陰股を引くと記し或は便時ならずと註す之を要するに前陰後陰の病を云ふ其處に依りて解す可き者と信す

二陽俱に搏て其溫を病むは治せず、十日を過ぎずして死す

△二陽は手の陽明大腸と足の陽明胃也十日は腸胃生數の餘也○此の篇獨り一陽搏を缺くは必ず脫簡也六經の次序は疾病類七に詳なり、鴻曰此れ素問陰陽類論也次序は三陰二陽等の類

第三十 精明五色

精明と五色は氣の華

○素問脈要精微論に曰夫れ精明五色は氣の華也

△精明は目に見はる、五色は面に顯る皆五氣の精華也六節藏象論に曰天人を食に五氣を以てす、五氣鼻に入て、心肺に藏れ、上五色をして修明ならしむと、又本類の首章に曰、脈の動靜を切して精明を視、五色を察し此を以て、參伍して死生の分を決すと、皆此の謂也

赤は白に朱を裏が如きを欲す赭の如きを欲せず

△白に朱を包めば陰然紅潤にして露れす、赭は代赭石也色赤して紫なり、此れ火色の善惡也

赤色の善惡

白色の善惡

白は鷺羽の如きを欲す、鹽の如きを欲せず

△鷺羽は白にして明なり、鹽色は白にして暗し此れ金色の善惡也

青色の善惡

青は蒼壁の澤の如きを欲す、藍の如きを欲せず

△蒼壁の澤は青にして明潤也藍色は青にして沉暗也是れ木色の善惡也

黄色の善惡

黄は羅の雄黄を裏が如きを欲す、黄土の如きを欲せず

△羅の雄黄を包むは光澤にして隱なり、黄土の色は沉滯し神無し此れ土色の善惡也

黑色の善惡

黒は重漆の色の如きを欲す、地蒼の如きを欲せず

△重漆の色は光彩あつて潤ふ、地の蒼黒は枯暗にして塵の如し、此れ水色の善惡也

五色精微の象見はるれば其壽久しからず

△此れ皆五色精微の象也凶兆既に見はるれば壽遠からず」王註曰赭色、鹽色、藍色、黄土色、地蒼色は皆精微の敗象也故に壽久しからず

精明の盛衰

夫れ精明は萬物を視て白黒を別ち短長を審にする所以なり、長を以て短と爲し、白を以て黒と爲す、是の如くなれば則ち精衰ふ

△五藏六府の精氣皆上て目に注で之か精を爲す、故に精聚れば則ち神全し、若し顛倒錯亂すれば、精衰へ散す、豈に久安の兆ならんや

第三十一 五官五閱

○靈樞五閱五使篇に黄帝問て曰余聞く刺に五官五閱有て以て、五氣を觀る、五氣は五藏の使也、五時の副也、願は其五つ當に安じて出づ可からしむることを聞ん

△刺法は當に藏氣を知る可し、藏氣を知らんと欲せば、當に五官五閱に於て之を察す可し、五官は下文の鼻は肺の官の如し、閱は外候也、使は使ふ所也、副は配合也

岐伯曰五官は五藏の閱也

△五藏は中に藏る、五官は外に見はる、内外相應す故に五藏の閱と爲す

黄帝曰願は其出る所を聞て、常と爲す可からしめん、岐伯曰脉は氣口に出で、色は明堂に見はる、五色更るく出でて以て五時に應ずること各々其常の如し、經氣藏に入らば、必ず當に裏を治む可し

△常と爲す可しとは、常行の法なり、五藏脉は氣口に察し、五藏色は明堂に察す明堂は鼻也、色其時に應ずるは乃ち其常也、然して色外に見はれて病は内に在り、是を經氣藏に入ると爲す、故に當に裏を治む可し

帝曰善し五色獨り明堂に決するや、岐伯曰五官以に辨ち、闕庭必ず張り、乃ち明堂を立つ、明堂廣大に、蕃蔽外に見はる、方壁高基、引き垂れて外に居る

△此れ五官諸部皆當に詳に辨す可し、惟だに色を明堂に察するのみに非ず、闕は眉間也、庭は顔也、張は布列也、蕃は頰側也、蔽は耳門也、壁は墻壁也、(鴻曰類經七卷一丁に曰内を牆と爲す其註に曰肉は墻垣に象る故

に能く血氣を蓄藏す) 基は骨體也、引垂外に居るとは明顯開豁を謂ふ也此れ五色の外に於て其部位の隆厚を言ふ也」鴻曰此の諸件は下文及び次章を讀て之を詳にす可し

五色乃ち治り平博廣大なれば、壽百歲に中ゆ

△形色皆佳なれば、百歲は中す中は宜也堪也治は亂れざるを云ふ

此を見はす者は、之を刺せば必ず已ゆ、是の如き人は血氣餘り有て、肌肉堅緻なり、故に苦ましましむるに鍼を以てす可し

△緻は密也此の若き人は苦むるに鍼を以てす可し、然らば則ち血氣内虚、形色弱き者は、鍼に宜しからず

黄帝曰願は五官を聞ん岐伯曰鼻は肺の官也目は肝の官也口唇は脾の官也舌は心の官也耳は腎の官也

△鼻は肺の竅也目は肝の竅也口唇は脾の竅也舌は心の竅也耳は腎の竅也、官とは職守の謂、以て呼吸を司り顔色を辨し水穀を納れ滋味を別ち聲音を聽く所也

黄帝曰官を以て何を候ふや岐伯曰以て五藏を候ふ、故に肺病者は喘息し鼻張る、肝病者は皆青し、脾病者は唇黄なり、心病者は舌卷て短く顔赤し、腎病者は顔と顔と黒し

此れ五藏の色を以て五藏の病を見ると雖も各部互に見る者有り又當に其理に因て變通す可し」鴻曰五官を以て五藏の病を察する今其大要を擧示するのみ其詳は諸篇中に見る可し例へば赤眼の如き全く肝熱也又顔は目下の

大骨

黄帝曰五脉安じて出で、五色安じて見はれ、其常の色にして殆き者如何ん

壽相及治

虚者は鍼に宜しからず

五官とは何そや

五官を以て五藏の病を知る

是れ貧の富者に優る大寶也富貴何そ羨むに足らん

△安見安出は脉色安然として羨無きを言ふ也、常色にして殆しとは、色本と常の如くにして身危きを云ふ
岐伯曰五官辨せず、闕庭張らず、其明堂小に蕃蔽見はれず、其又墻埤く、墻下に基無く、角を垂れて外に去る是の如き者は平常と雖も殆し況や疾を加るおや

△此の若き者は部位骨節既に善き所無し則ち脉色平と雖も殆と免れず尙ほ何の疾か能く堪ん是を以て人壽は尤も骨節を主と爲す可し○埤卑同じ○略は字典音格禽獸の骨

黄帝曰五色の明堂に見はる、以て五藏の氣を觀る、左右高下、各々形有るや岐伯曰府藏の中に在るや、各々次舍を以てす、左右上下各々其度の如き也

△明堂は中央に居る、府藏は腹中に居て各左右上下の舍有り、故に面部に於ても明堂を中心として、其左右上下に配列する旨を註せり註の文不明の故に譯出す、又曰詳に藏府肢節面部圖に具す」と是れ圖翼四卷に載する圖の事也本書冊尾に寫載す但次章を讀みつゝ觀るを佳とす

第三十二 色藏部位脉病の易難

○靈樞五色篇に雷公問て曰五色獨り明堂に決するや黄帝曰明堂は鼻也闕は眉間也庭は顔也蕃は頰側也蔽は耳門也其間、方大にして、之を去ること十歩にして、皆外に見はれんことを欲す、是の如き者は壽必ず百歲に中ゆ

△顔は額角也即ち天庭也蕃蔽は四傍を屏蔽す即ち藩籬也十歩の外にして骨節明顯なるは其方大豊隆なること知る可し、故に壽百歲を終ふ、蓋し五色の決、獨り明堂のみに非ず

雷公曰五官の辨奈何黄帝曰明堂骨高し以て起り、平にして以て直く、五藏は中央に次し、六府は其兩側を挟み、首面は闕庭に上り、王宮は下極に在り、五藏胸中に安れば眞色以て致し、病色見れず、明堂潤澤にして以て清し、五官惡んぞ辨無きを得んや

△肺心肝脾の候は皆鼻中に在り、六府の候は皆四傍に在り、下極は兩目の中に居る、心の部也、心は君主と爲す故に王宮と曰ふ、五藏和平にして胸中に安ければ、其正色自ら致して、病色見はれず、明堂清潤なり、此れ五官の辨也、部次諸義の詳は下文

雷公曰其辨せざる者得て聞く可きや黄帝曰五色の見はるるや各其色部に出づ、骨陷る者は必ず病を免れず、其色部乘襲する者は、病甚しと雖も死せず

△辨せずとは、色常度を失て變易し、辨し難き也、五色の見はる各其部有り、只其部骨弱く陷る處あつて、然後ち邪を受け易し而て病を免れず、若し其色部變見有りと、但だ彼此生玉して互に乗襲するを得て、尅賊の見はれ無き者は、病甚きも死せず

雷公曰五色を官こと奈何ん黄帝曰青黒は痛と爲し黄赤は熱と爲し白は寒と爲す是を五官と謂ふ
△官は主也

雷公曰病の益々甚と、其方に衰ると如何ん、黄帝曰外内皆在り、其脉口を切するに、滑小緊にして以て沉は、病益々甚しくして中に在り、人迎の氣大緊にして以て浮は、其病益々甚しくして外に在

病の其微と其脉候

五色と病症

大陰は肺經也寸脈を云ふ

り

△益甚は病の進む也、方衰は病の退く也、外内皆在りとは、表裏俱に察す可しと也、脈口は大陰の脈也故に中に在りと曰ふ、而て五藏を主る、人迎は陽明の脈也故に外に在りと曰ふ、而て六府を主る、脈口滑小緊沉は陰分の邪盛也、人迎大緊にして以て浮は陽分の邪盛也故に病皆益々甚し

其脈口浮滑は病日に進む、人迎沉にして滑は病日に損す

脈口は陰と爲す浮滑は陽を以て陰に加ふ、故に病日に進む、人迎は陽と爲す、沉滑は陽邪漸く退く、故に病日に損減す

其脈口滑にして以て沉は、病日に進て内に在り、其人迎脈、滑盛にして以て浮は、其病日に進て外に在り

脈口人迎は經を表裏に分つ、故に其沉滑浮滑にして、病日に進む者は内外の辨也

脈の浮沉、及び人迎と寸口の氣と、小大等き者は病已へ難し

△人迎寸口の脈、其浮沉大小相等き者は陰に偏するに非ざれば則ち陽に偏するなり故に病已へ難し按るに禁服篇に曰春夏は人迎微大、秋冬は寸口微大是の如き者を命て平人を曰ふと則ち義知る可き有り「鴻云又次の三十三にも同一の語なり

病の藏に在る沉にして大は已へ易し、小を逆と爲す、病の府に在る浮にして大は其病已へ易し

△病藏に在るは六陰に在り、陰は本と沉なる可し、而て大は神有るなり、神有る者は陰氣充つ、故に已へ易

藏府病已へ易き脈候

小大等き者病已へ難し

寒傷脈

食傷脈

古脈診と今脈法の優劣

寸口診の不備尚ほ第二十五頭書參閱

色診及治

色の内外、治の内外

人迎盛堅は寒に傷らる、氣口盛堅は食に傷らる

し、若し沉にして細小は、眞陰衰ふ逆と爲す、病の府に在るは六陽に在り、陽病に陽脈を得るを順と爲す、故に浮にして大は病已へ易し、若し浮小は逆候也

△人迎は表を主る脉盛にして堅は、寒が三陽を傷る也是を外感と爲す、氣口は裏を主る脉盛にして堅は、食か三陰を傷る也、是を内傷と爲す、此れ右の法也、今は則ち止だ寸口診を用ゆ妙ならずと爲さず、然れども、本と左右を以て内外を分つの説無し、王叔和より以來謬て左を以て人迎と爲し右を氣口と爲し表裏の義を失ふや久し、詳に藏象類十一に見ゆ鴻之を閱するに王叔和の説を辨駁する詳也

雷公曰色を以て病の間甚を言ふこと奈何ん黄帝曰其色麤にして、以て明に、沉天なる者は甚と爲す、其色上行する者は、病益々甚し、其色下行して、雲の徹散するか如き者は、病方に已ゆ

△間甚は輕重也麤は顯也色顯明なるを言ふ、若し沉天は其病必ず甚し、上行は濁氣升て色日に増す病日に重し、下行する者は滯氣將に散せんとす、色漸く退く病將に已へんとす

五色各々藏部有り、外部有り、内部有り、色外部より内部に走る者は、其病外より内に走る、其色内より外に走る者は、其病内より外に走るなり、病内に生ずる者は、先づ其陰を治して後に其陽を治す、反する者は益々甚し、其病陽に生ずる者は、先づ其外を治して後に其内を治す、反する者は益々甚し

△各藏部有りと云は色藏の所屬各々分部有るを云ふ、外部は六府の表を言ふ、六府は兩側を挾む也(鴻云面の)

病外より来る
脉候及治

内部は五藏の裏を言ふ五藏は中央に次する也故に凡そ病色先づ外部に起て後ちに内部に及ぶ者は其病表より裏に入る、是れ外を以て本と爲し、内を標と爲す、故に先づ其外を治て後に其内を治す可し云々之に反する者は皆誤治と爲す病必ず益々甚し是れ標本病論傳と異文同義なり、互考す可し標本類四と五に詳なり」鴻曰此れ素問標本病傳論也又黄帝曰病は必ず其本を治むと

其脉滑大にして以て代して長は病外より来る、目見る所有り、志、惡む所有り此れ陽氣の并す也變して而て已ゆ可し

△滑大にして代して長とは、陽邪の脉也、陽邪外より裏に傳ふ、故に人をして目に妄見し志に惡む所有らしむ、此れ陽か陰に并せて然り、治法、或は陰或は陽、或は先或は後、其要を擇て、變易して治すれば愈ゆ

雷公曰小子聞く風は百病の始也厥逆は寒濕の起也と、之を別つこと奈何ん黄帝曰常に關中を候ふ、薄澤なるを風と爲し、冲濁なるを痺と爲し、地に在るを厥と爲す、此れ其常也各々其色を以て其病を言ふ

△關中は眉間也風病は陽に在り、皮毛之を受く、故に色薄くして澤ふ、痺病は陰に在り、肉骨之を受く、故に色冲して濁る、冲は深也、厥逆の病の四支に起るか如きに至ては、病下に在て、色亦地に見はる、地は面の下部也、此れ其常候なり、故に其色に因て以て其病を言ふ可し

雷公曰人病まずして卒に死す何を以て之を知らん黄帝曰大氣、藏府に入る者は、病まずして卒に死す

卒死の理

風、痺、厥三
病の色診

病小愈して卒
死の病候

不病卒死の兆
候

死の期日

顔の病色

眉心上と咽喉
病色

眉心と肺病色

兩目間と心病
色

鼻柱と肝病色

△大氣は大邪の氣也、大邪の入るは元氣大に虚して後ち、邪襲に由らざる無し

雷公曰病小愈して卒に死する者何を以て之を知らん黄帝曰赤色兩顔に出て大さ母指の如き者は病小し愈と雖も必ず卒に死す、色庭に出て大さ母指の如くなるは、必ず病まずして卒に死す

△母指の如しとは塊を成し、條を成し、聚て散せざる也、此れ最凶の色と爲す、赤は固に佳ならず、而て黒者尤も甚しと爲す、皆卒死の色也

雷公再拜して曰善哉其死、期有るや黄帝曰色を察して以て其時を言ふ

△五色に衰王有り、部位に尅賊有り、色藏部位を辨察して時を知る

雷公曰善哉願は卒に之を聞ん黄帝曰庭は首面也

△庭は顔也相家に之を天庭と云ふ天庭最も高し色の此に見はる者上み首面の疾に應ず

關の上は咽喉也

△關は眉心に在り關上は眉心の上也其位も亦高し咽喉の疾に應ず

關中は肺也

△關中は眉心也中部の最高者也肺に應ず

下極は心也

△下極は兩目の間也相家之を山根と云ふ心は肺の下に居る故に下極は心に應ず

直下は肝也

肝の左臍病色

肝の左は臍也

△下極の下は鼻柱と爲す相家に之を年壽と云ふ肝は心の下に在り故に直下は肝に應ず

面王即ち明堂と脾の病色

下は脾也

△臍は肝に附く短葉なり故に肝の左は臍に應ず而て肝の左右に在也。鴻曰左右とは不審後の圖にも肝の左と記す

脾の左右即ち鼻の左右は胃の病色

方上は胃也

△肝の下は相家之を準頭と云ふ是を面王と爲す亦明堂と云ふ準頭は土に屬して面の中央に居り以て脾に應ず

中央は大腸の病色

中央は大腸也

△準頭の兩傍を方上と爲す即ち迎香の上なり鼻隆是れ也相家之を蘭臺廷尉と云ふ胃脾と表裏たり脾は中に居て胃は外に居る方上は胃に應ず

大腸を挟む者は腎也

△中央は面の中央なり迎香の外額骨の下を云ふ大腸の應也、鴻云後圖左右に記す後文小腸參照

△大腸を挟む者は腎の上也、四藏皆一なり腎は兩有り四藏は腹に居り腎は脊に附く故に四藏は中央に次して腎獨り兩頰に應ず

腎に當る者は臍也

△腎と臍と對す故に腎の下に當て臍に應ず

面王より以上は小腸也

面王即ち鼻以下膀胱及子宮の病色

面王以下は膀胱子宮也

△面王は鼻準也小腸は府と爲す兩側を挟む故に面王の上兩額の内は小腸の應也

顔色を以て肩病を察す

額は肩也

△以下肢節の應を言ふ也額は骨の本と爲す而て中部の上に居る以て肩に應ず
△面王以下とは人中也是を膀胱子宮の應と爲す、子宮は子宮也凡そ人の人中平淺にして髭無き者、多くは子無し、是れ正に子處の應なり、以上は皆五藏六府の應也

額後を以て臂を察す

額の後へは臂也

△臂は肩に接す故に額後は以て臂に應ず

臂下を以て手を察す

臂の下は手也

△手は臂に接す

内背の上に膺乳を察す

目の内背の上は膺乳也

△目の内背の上は闕下の兩傍也胸の兩傍の高き處を膺と爲す膺乳は胸前に應ず

頰の外より上に背を察す

繩を挟むより而上は背也

△頰の外を繩と曰ふ身後を背と爲す挟繩の上に應ず

牙車以下股を察す

牙車を循る以下は股也

△牙車は牙床也、牙車より下部を主る故に股に應ず

中央は膝也

△兩牙車の中央也

膝以下は脛也脛に當て以下は足也

△脛は膝に接し足は脛に接す次を以て下る也

巨分は股ノ裏也

△巨分は口の傍の大紋の處也、股裏は股の内側也

巨屈は膝臑也

△巨屈は頰下の曲骨也膝臑は膝蓋骨也此れ蓋し膝部を總稱す

此れ五藏六府肢節の部也

△以上藏府肢節の部位なり、色の面部に見はるる三圖は、圖翼四卷に有り一鴻曰此れ本書冊尾の者是れ也

各部分有り、部分有れば、陰を用て陽を和し、陽を用て陰を和す、當に部分を明にす可し、萬舉萬當なり

△部分既に定て陰陽乃ち明なり、陽勝つ者は陰必ず衰ふ、當に其陰を助けて之を和す可し、陰勝つ者は陽必ず衰ふ、當に其陽を助けて之を和す可し、陰陽の用、往くとして在らざる無し、其盛衰を知れば萬舉萬當也

能く左右を別つ是を大道と謂ふ、男女位を異にす故に陰陽と曰ふ、審に澤と天とを察す之を良工と謂ふ

陽を和し陰を和すには左右を識別するを要す

膝の病色

脛足の病色

内股の病色

膝蓋骨の病色

萬舉萬當

△陽は左に従ひ、陰は右に従ふ、左右は陰陽の道路也、故に能く左右を別つを大道と謂ふ、男女位を異にすとは、男子は左を逆と爲し右を從(順)と爲す女子は右を逆と爲し左を從と爲す故に陰陽と曰ふ陰陽既に辨すれば又能く其潤澤、枯天を察し以て善惡の機を察す之を良工と謂ふ「鴻按るに左は元來東方にして陽なり故に男は左を貴ふ然るに今左を以て逆と爲す者は陽上に陽を加ふ病色なるを以て也即ち陽盛陰衰にして中和の氣を失ふを以て也女子の右を逆と爲すも亦陰盛陽衰にして其中和を失ふ故也

沉濁を内と爲し浮澤を外と爲す

△内は病裏に在り藏に在るを主る、外は表に在り府に在るを主る皆色を言ふ

黄赤を風と爲し、青黒を痛と爲し、白を寒と爲し、黄にして膏潤なるを膿と爲し、赤甚者を血と爲し、痛甚を癢と爲し、寒甚を皮不仁と爲す

△凡そ五色の面部に見はるる者は、皆此に因て其病を知る可し、不仁は麻痺して知ること無き也

五色各々其部に見はる、其浮沉を察して以て淺深を知り、其澤天を察して以て成敗を觀る、其散搏を察して以て遠近を知り、色の上下を視て以て病處を知る

△浮は病淺く、沉は病深し、澤者は傷無く、天者は必ず敗す、散者は病近く、搏者は病遠し搏は聚也、上者は病上に在り、下者は病下に在り

神を心に積て以て往今を知る、故に相氣微れず、是非を知らず、意を屬して去ること勿れば、乃ち

五色を以て病の淺深成敗遠近及病處を知る

色を見て内外病を知る

色を見て病種を知る

神醫の診法

新故を知る

皆註也細字且つ下け

△神を心に積むときは明なり（鴻云餘念無きを云ふ所謂無心所謂三昧所謂醫なる者は意也）、故に既往來今の事を知る、相氣微ならずとは、氣隠ること能はず、是非を知らずとは、是非の惑無き也（鴻曰此れ是非好惡の心なき太極中正の不動心也孔子の所謂至善堯舜の所謂執中也）、意を屬して去ること勿れとは、專にして貳無き也、鴻曰前記の不動太極三昧等は是れ也、新故は往今の義（鴻曰新舊と云ふか如し）

色の明、あはは麤ならず、沉天を甚と爲す、不明不澤は其病甚しからず

△色の明粗ならずとは、色の明澤不顯にして但だ沉天を見はす者は、其病必ず甚し、若し不明澤なるも、亦沉天の色無き者は、其病必ず甚しからず

其色散し駒駒然として、未だ聚ること有らず、其病散して而て氣痛む、聚未だ成らざる也

△稚馬を駒と曰ふ駒々然とは、駒の定り無きか如く、散して聚らざるの意也故 其病たるや尙ほ散す、若し痛處有るは氣に因るのみ、積聚形を成す病に非らず

腎か心に乘すれば先づ病む、腎應を爲す色皆是の如し

△水邪火を尅するは、腎か心に乘する也此の場合心先づ中に病て、而て腎の色は則ち外に應ず、下極を以て黒色を見はすか如きは是れ也惟だ心腎諸藏のみ然るにあらず、凡そ肝部に肺色を見はし、肺部に心色を見はし腎部

色の明暗

色の散して聚らざる症候

腎か心に乘すれば心先づ病みて腎色を見はす藏府尅賊皆是の如し

男子面王上下の色と諸病

男子、色面王に在るを小腹痛と爲す、下を卵痛と爲す、其圓直を莖痛と爲す高を本と爲し、下を首と爲す狐疝瘻陰の屬也

に脾色を見し、脾部に肝色を見はし、及び六府の相對する者其色皆是の如し

△面王上下は小腸膀胱子處の部と爲す故に小腹痛より下卵痛を主る圓直とは色垂れて面王の下を繞る也莖は陰莖也高を本と爲し下を首と爲すとは、色の上下に因て莖の本末を分つ也瘻癩同じ、鴻曰此れ罌丸疝也

女子面王に在るを膀胱子處の病と爲す、散を痛と爲す、搏を聚と爲す方圓左右は各々其色形の如し、其隨て下るは臍に至て淫を爲す、潤ふこと膏狀の如き有るは暴食不潔と爲す

△面王の部は男子と同ふして病か男と異なるは血海有る故也色散を痛と爲すは氣滯て無形也、色搏を聚と爲すは、血凝て積有る也、然て其積聚の或は方或は圓或は左或は右は各々其外色の形見の如し、若し其色下行は當に尾紙に至て、浸淫帶濁（鴻云白淫白濁尿赤白帶下等）を爲す可し、潤て膏狀の如き者有るは或は暴に飲食に因て即ち不潔を見はす、蓋し前後陰を兼て言ふ、臍は臍に作る可し尻臀の間也

左を左と爲し、右を右と爲す、其色邪有て、聚散して端からざるは面色の指す所也

△色左に見はる者は病左に在り、右に見はる者は病右に在り、凡そ色邪有て聚散端しからざるは、病の在る所也、故に但だ面色指す處を察して病知る可し

色は青黒赤白黄なり皆端く滿て別郷有り、別郷赤き者其色も亦大なること榆莢の如く、面王に在る

邪色の在る所即ち病處也

五色の正色と邪色

は、不日と爲す

△色とは正色を言ふ也正色五つ皆端滿に宜し、端は無邪也、滿は充足也、別郷有りとは、方位時日各々主る所の正向有るを言ふ也、別郷赤とは正向の外にして邪色の見はれ有るを言ふ也、赤榆莢の如く面玉に見はるるは、其位に非ざる也、見はる可からずして、見はるは其時に非ず、是を不日と爲す、不日とは、其常度を失ふを云ふ也、此れ單に赤色を擧て喩と爲す而て五色の謬て見る者皆類推す可し○郷向同じ

其色か上に鏡なるは、首空上に向ふなり、下に鏡なるは下に向ふなり、左右に在る法の如し

△凡そ邪は色見に隨て各向ふ所有り、而て尖銳の處は、即ち其虚に乗じて進む所の方なり、故に上鏡なる者は、首面の空虚に邪乗じて上向する也、下鏡も亦同く然り、其左右に在るも皆此れと同じ

五色を以て藏に命く、青を肝と爲し、赤を心と爲し、白を肺と爲し、黄を脾と爲し、黒を腎と爲す肝は筋に合し、心は脉に合し、肺は皮に合し、脾は肉に合し腎は骨に合する也

△此れ上文を總結して五色五藏の配合を言ふ、青は肝に屬し肝は筋に合するか如き凡え色青く筋病む者は即ち肝邪と爲す而て其見はる部を察して以て其病情を參酌す諸藏の吉凶此に倣て類推す可し「鴻云脾部に肝色を見るは本邪が土を尅するの類也」鴻曰普渡慈航小兒門に小兒の診察法及び面部觀察法を載す予既に和譯し了るも未だ出版し得ず後日の爲め附記して觀客に報すること爾り

第三十三 色脉諸診

諸病の目診

○靈樞論疾診尺篇に曰目赤色は病、心に在り、白は肺に在り、青は肝に在り、黄は脾に在り、黒は腎に在り、黄色名く可からざるは、病脇中に在り

目痛診法

△五藏六府目之か候爲り、故に目の五色各々其氣を以て本藏の病を見はす、脾は中州に應ず胸中は脾肺の部也目痛を診するに、赤脉上より下る者は太陽病なり、下より上る者は陽明病なり、外より内に走るは少陽病なり

△足の太陽經は上の網と爲す、故に赤脉上より下る者を太陽病と爲す、足の陽明經は目の下網と爲す、故に赤脉下より上る者を陽明病と爲す、足の少陽經は外、銳眥の後に行く、故に外より内に走る者を少陽病と爲す

寒熱病死の目診

寒熱を診するに赤脉上下より腫子に至るは、一脉を見せば一歳に死す、一脉半を見せば一歳半に死す、二脉を見せば二歳に死す、二脉半を見せば二歳半に死す、三脉を見せば三歳に死す

△此れ邪か陰分に入て病、寒熱を爲す、當に其目を反して視る可し中に赤脉有て形ち紅線べんせんの如く腫子を貫く其多少に因て其死の遠近を知る也寒熱篇の文此れと同じ但だ彼れには専ら瘰癧の毒か發して寒熱を爲すを言ひ此の節には單に寒熱を以て言ふ理は則ち同じ疾病類九十に詳「鴻曰此靈樞寒熱篇也

齶齒痛の診

齶齒痛を診するには、其陽の來るを按す、過ること有る者は獨り熱す、左に在るは左熱し、右に在るは右熱し上に在るは上熱し、下に在るは下熱す

△齶齒は齒痛也足の陽明は上齒中に入り、手の陽明は下齒中に入る、故に其陽脉の來るを按す、其脉太過は經必ず獨り熱す、而て其左右上下も亦其部に因て察す可し「鴻云齶齒此處には汎く齒痛と註す然るに類經七卷二

絡脈の色診

十九丁には齶は齒齲病と記し儒門事親には牙斷腐爛と記し字典には蟲齒と記す
血脈を診する者は多く赤は、多く熱し、多く青は、多く痛み、多く黒は、久痺と爲す、多く赤、多
く黒、多く青皆見るる者は寒熱す

黃疸病候

△血脈は各部の絡脈を言ふ、赤黒青皆見はるる者は陰陽互に勝の色なり故に或は寒し或は熱す
身痛て色微黄は齒垢黄なり爪甲の上黄は黃疸也安臥して小便黄赤に、脈小にして瀉は、食を嗜ます
△黃疸は黃病也疸に陰陽有り、脈小にして瀉は陰疸と爲す陰疸は脾土弱し、故に食を嗜まず、疾病類五十九に
詳し鴻曰此れ靈樞五癰津液別篇也

寸口脈人迎脈
と小大等き者
病已へ難し

人の病其寸口の脈と人迎の脈と、小大等しく及び其浮沈等き者は、病已へ難し

△氣口は陰を候ひ、人迎は陽を候ふ、故に春夏は人迎微大、秋冬は寸口微大なり、此れ陰陽表裏の分ち也若し
寸口人迎大小浮沈相等き者は、陰に偏するに非ざれば、則ち陽に偏す此れ病の已へ難き所以なり、五色篇此れ
と稍や同じ前の三十二に見へたり

妊娠脈候

女子手の少陰脈動甚き者は子を妊めり

△是れ左寸心脈也平人氣象論と同じ

嬰兒頭毛逆上
と死

嬰兒の病頭毛皆逆に上る者は必ず死す

△嬰兒漸く成るは、水之か本たり、髪は腎水の榮なり頭毛逆に上るは、水不足髪乾焦す、草の枯る必ず勁直に
して堅か如し、老子曰人の生や柔弱なり、其死や堅強なり、萬物草木の生や柔脆なり、其死や枯槁す、故に堅

強は死の徒なり、柔弱は生の徒なりと、此の理也然して此には既病を以て言を爲す若し無病にして頭毛逆上も
吉兆に非ず

耳間青脈と掣
痛

耳間青脈起る者は掣痛

△耳は膽經也青は肝の色なり、肝と膽と表裏たり、青は痛を主り、肝は筋を主る故に掣痛す

大便赤辦し、飧泄し脈小者、手足寒るは已へ難し、飧泄脈小に手足温なるは泄已へ易し

△赤辦は血穢條を成し片を成す也、赤辦飧泄は火か血分に居る、若し脈小に手足寒は是を相反と爲す、已へ難
き所以也、若し飧泄に止て、赤辦無きは火症に非らず、脈小と雖も手足温は、脾か四肢を主るを以て脾氣尙ほ
和す、已へ易き所以なり辦は瓣に作る可し瓜瓠の類

四時の變、寒暑の勝つ、陰を重ねれば必ず陽、陽を重ねれば必ず陰、故に陰は寒を主り、陽は熱を主
る、故に寒甚れば則ち熱し、熱甚ければ則ち寒す、故に曰寒は熱を生し熱は寒を生ずと、此れ陰陽
の變也、故に曰冬、寒に傷れば、春、瘧熱を生ず、春、風に傷れば、夏、後泄、腸澼を生ず、夏、
暑に傷れば秋、痲瘧を生ず、秋、濕に傷れば冬、咳嗽を生ず是を四時の序と謂ふ也

△陰陽の氣極れば必ず變す、故に寒極れば熱を生し熱極れば寒を生ず此れ天地四時消長の道也陰陽應象大論と
同じ○瘧は温熱病

陰陽の變化寒
極れば熱を生
じ、熱極れば
寒を生ずる等
是れ四時の序
也

大便血穢及飧
泄の治愈難易

第三十四 能く脈色を合すれば萬全

脈は指を以て別つ可し

脈の小大滑滯
浮沉の形體

五藏の象は類を以て推知す

○素問五藏生成論に曰夫れ脈の小大滑滯浮沉は指を以て別つ可し

△小は細小也陰陽俱に不足す、大は豁大也陽強く陰弱し、滑は往來流利也血實して氣盛る、滯は往來艱難也氣滯り血少し、浮は軽く取る以て表を候ふ所なり、沉は重く按す以て裏を候ふ所なり、是の如きは之を手にて得て之を心に應ず故に指を以て分別す可し。鴻曰是れ東洋醫道の天理に親切なる所以到底器械診の及ぶ所にあらず五藏の象は類を以て推す可し

△象は象氣也、肝は木の曲直に象て而て應は筋に在り、心は火の炎上に象て而て應は脈に在り、脾は土の安靜に象て而て應は肉に在り、肺は金の堅斂に象て而て應は皮毛に在り、腎は水の潤下に象て而て應は骨髓に在り、凡そ此の如き者は藏象の辨なり、各々主る所有り、皆類を以て推す可し。鴻云藥治にも往々之を用ゆ、例へば人の身半以下の病には藥根の中半以下即ち稍を用ゆ又深き突き傷には杉菜の根を粉にして藥に和し以て速愈して傷底の化膿を豫防す杉菜の根は深く地中に達するに象るの類其他例多し

五藏の相音を
知る事

五藏の相音は意を以て識る可し

△相は形相也、音は五音也相音は靈樞陰陽二十五人篇に所謂木形の人を上角に比するの類也又肝音は角、心音は徵等の如し、若し勝負を以て相參れば臧否自ら見はる、耳聰に心敏なる者皆意會して識る可し。鴻曰此の故に醫は哲人たるを要す凡愚の業に非ず

五色の目診

五色の微診は目を以て察す可し

△五色は肝青、心赤、脾黃、肺白、腎黒此れ其常色也互に生尅を爲すに至りては、診に精微有り、目明に智圓

脈合色診萬全

能く脈を色と合せて以て萬全なる可し

なる者視察して知る

△脈に因て以て其内を知り、色に因て以て外を察す、脈色明なれば、則ち參合して遺すこと無し、内外明なれば、則ち表裏具に見はる、萬全無失

以下脈色を合す

赤脈の至るや喘して堅し、診に曰積氣の中に在る有て、時に食に害あり、名て心痺と曰ふ、之を外疾に得たり思慮して心虚す故に邪之に従ふ

△以下脈色を合する也赤は心の色なり、脈喘して堅とは、急盛なること喘の如くにして、堅強を云ふ也、心藏は高に居り病めば則ち脈喘狀を爲す、故に心肺二藏に於て獨り之れ有り、喘は心氣の不足と爲す、堅は病氣の有餘と爲す、積は病氣の積聚と爲す、痺は藏氣の行れざると爲す、外疾は外邪也、思慮して心虚す故に外邪之に居る

赤脈至喘堅、
心痺

白脈至喘浮、
肺痺寒熱

白脈の至るや喘して浮なり、上虚し下實して驚く、積氣の胸中に在る有て喘して虚す、名て肺痺寒熱と曰ふ之を酔て内を使うに得たり

△白は肺色の見はれ也、脈喘にして浮は、火か金に乗じて、病か肺に在る也、喘は氣の不足と爲す、浮は肺虚と爲す、肺が上に虚すれば、氣行はれずして、下に積む、故に上虚すれば驚を爲し、下實すれば積を爲す、氣か胸中に在れば喘して且つ虚す、病を肺痺と爲す者は、肺氣行はれずして其治節を失へば也、寒熱は金火相爭ふなり、金勝てば寒し、火勝てば熱す、酔に因て房に入れれば火必ず熾にして、水必ず更に虧ぐ、腎虚して母氣

青脉至長彈、
肝痺及疝

に盗み及ぼす、故に肺病是の如し一鴻曰母氣は肺金此れ肺結核の起る所以也
青脉の至るや長にして左右彈ず、積氣の心下支脉くに在る有り名て肝痺と曰ふ之を寒濕に得たり、疝と法を同ふす、腰痛み足清へ頭痛む

△青は肝色の見はれ也、長にして左右彈とは、兩手俱に長にして弦強也、彈は搏擊の義なり、此れ肝邪有餘の故に、氣か心下に積み支脉くに及て因て肝痺を成す、之を寒濕に得て而て心下支脉くに積む者は、則ち肝痺を爲し小腹前陰に積む者は、則ち疝氣を爲す、總て厥陰の寒邪に屬す、故疝と同法と云ふ、肝脉は足の大指に起り督脉いたきと巔いたきに會す、故に病必ず腰痛み足冷へ頭痛す肘腋腋下の脇

黄脉至、大虛
厥疝

黄脉の至るや大にして虛す、積氣の腹中に在る有て、厥氣有り、名て厥疝と曰ふ女子同法なり、之を疾とく四支を使ひ汗出で風に當るに得たり

△黄は脾色の見はれ也脉大は邪氣盛也虚は中氣の虚也中虚すれば脾運する能はず、故に積氣腹中に在る有り、脾虚すれば、木、其弱に乗ず、木畏る所無くして肝腎の氣上逆す、是を厥氣と爲す、且つ脾肝腎三經皆陰器に結あつる故に名て厥疝と曰ふ、而て男女無異也四支皆氣を脾に稟く、疾とく之を使へば、則ち脾氣を勞傷して汗泄れ易し、汗泄れば表虚して風邪之に客し是の病を爲す

黑脉至、上堅
大、腎痺

黑脉の至るや上み堅くして、大なり、積氣小腹と陰とに在る有り、名て腎痺と曰ふ、之を清水に沐浴して、臥するに得たり

△黑は腎色の見はれ也、上とは尺の上也即ち尺の外は以て腎を候ふ也、腎は下焦を主る、脉堅にして且つ大は

面色黄を兼る
者は不死
上に反する者
皆死す

腎邪有餘なり、故に積氣小腹と陰處とに在るを主る、因て腎痺を成す、清水に沐浴して臥するに得る者は、寒濕内に侵すを以て氣か同類に歸す、故に病下焦に在て、邪か腎に居る也
凡そ五色の奇脉を相みるに面黄にして目青く、面黄にして目赤く、面黄にして目白く、面黄にして目黒きは皆死せず

△凡そ此れ色脉の死せざる者は、皆面黄を兼ぬ、蓋し五行は土を以て本と爲して胃氣猶ほ存すれば也
面青く目赤く、面赤く目白く、面青く目黒く、面黒く目白く、面赤く目青きは皆死也
△此れ黄色無きを以て也、胃氣已に絶す故に死す、上文は脉色を合て以て萬全を圖ることを言ひ、此の二節は單に五色を以て死生を決す

第三十五 經に常色有り、絡に常の變無し

○素問經絡論に黄帝問て曰夫れ絡脉の見はるや其五色各々異ことにして青黄赤白黒の不同あり其故何そや岐伯曰經に常色有り而て絡に常の變無れば也

△經は五行の分ち有り故に常の色有り絡は陰陽の應を兼ぬ故に常の變無し

帝曰經の常色何如ん岐伯曰心は赤、肺は白、肝は青脾は黄、腎は黒皆亦其經脉の色に應ずる也

△五藏は五行に合す、故に五色各々主とする所有り、而て經脉の色も亦本藏と相應す、是を經の常色と爲す○

經に常色有り
絡にば常有る
者あり常無き
者あり下文參
閱

五藏六府三陰三陽皆上文の理に從ふ

絡に常色あり又常色無き理を明にす

按るに此節但だ五藏を言て六府に及ばざる者は大都經文皆五藏を以て主と爲す、五藏を以て言ふときは、六府の中に在り、凡そ三陰三陽十二經の常色皆此を以て類推す可し
帝曰絡の陰陽も亦其經に應ずるや岐伯曰陰絡の色は其經に應じ、陽絡の色は常無し、四時に隨て而て行はる

△此れ絡に陰陽有て色と經と應じ亦同異有るを言ふ也、脉度篇に曰經脉を裏と爲す支にして横る者を絡と爲す、絡の別る者を孫と爲す故に經絡を合て言へば經は裏に在て陰と爲す、絡は外に在て陽と爲す、若し單に絡脉を以て言へば又大絡孫絡有り、在る内外の別有り、深くして内に在るを陰絡と爲す、陰絡は經に近ふして色之に應ず、故に五行を分て以て五藏に配して而て色に常有る也、淺くして而て外に在る者を陽絡と爲す、陽絡は浮顯にして色經に應せず、故に四時の氣に隨て、進退を爲して變に常無き也、百病始生篇に曰陽絡傷れば則ち血外に溢れ、陰絡傷れば則ち血内に溢ると、其義知る可し、何ぞ近代諸家の註、皆六陰を以て陰絡と爲し、六陽を陽絡と爲すや、豈に陽經の絡は必ず常無く、陰經の絡は必ず變無きや皆誤也

陽絡變色の理

寒多れば則ち凝泣す凝泣すれば則ち青黒なり、熱多れば則ち渾澤なり、渾澤なれば則ち黄赤なり

△此れ陽絡の變色を云ふ泣瀝同じ渾音闊、濡潤也

此れ皆常色、之を無病と謂ふ、五色具はり見はる者之を寒熱と謂ふ

常色は無病也五色具見は寒熱病也

△前の五色の五藏に應ずる如き皆常色也常色は無病の色也若し五色具はり見はるれば陰陽變亂して其常を失ふ故に往來寒熱病む

帝曰善し

第三十六 新病、久病、毀傷脉色

○素問脉要精微論に帝曰故き病有り、五藏發動し因て脉色を傷る各々何を以て其久きと暴に至る病なるを知るや

△故病は宿病也、五藏の發動とは、感に觸て發する也

岐伯曰悉せる哉問や其脉を徵するに、小にして色奪れざる者は新病也

△徵は驗也脉小は邪氣盛ならず、色奪れざるは形神未だ傷れず、鴻曰後文脉色俱に不奪の新病あり

其脉を徵するに、奪れざれとも、色奪はるる者は此れ久病也

△病久して經氣奪れざる者は之れ有り病久ふして形色不變の者無し

其脉と五色と俱に奪る者は此れ久病也

△表裏俱に傷る

其脉と五色とを徵するに俱に奪れざる者は新病也

△表裏俱に無恙

肝と腎脉と並び至り、其色蒼赤は常に毀傷を病む可し、血を見はさず、已に血を見はすと、濕、水

久病は色奪れざれとも色奪はるる者あり或は脉色俱に奪はる者有り

新病は脉小にして色奪れず

脉色俱に不奪は新病也

毀傷の候

に中るか若き也

△肝脉は弦、肝は筋を主る、腎脉は沉、腎は骨を主る、蒼は肝腎色、青にして黒也赤は心色なり、脉弦沉を見
して、色蒼赤は筋骨血脉、俱に病む故に必ず當に毀傷を爲す可し、凡そ筋骨を毀傷する者は血を見ざると已に
血を見るに論無く、其血必ず凝り其經必ず滯る、氣血凝滯すれば、形必ず腫滿す故に濕氣の經に在るか如くし
て水に中るの狀に同じ

第三十七 五藏五色死生

惡青色と死

○素間五藏生成篇に曰故に色、青きこと草茲しげきの如きを見はす者は死す

△茲は滋と同じ草の滋るか如きは純青にして色深し、此れ木賊し土敗れて全く紅黃を失ふ也

黄なること枳實の如き者は死す

△黃黒不澤也

惡黄色と死

黒きこと始の如き者は死す

△始烟煤は也

惡黑色と死

赤きこと衄血の如き者は死す

△衄血は死血也赤紫にして黒し

惡赤色と死

白きこと枯骨の如き者は死す

惡白色と死

此れ五色の死を見はす也

以上五色の死兆

△藏氣か中に敗るれば神色か外に天す、三部九候論に曰五藏已に敗れば其色必ず天す天すれば必ず死すと

善五色生兆

青きこと翠羽せいのはねの如きは生く、赤きこと雞冠の如きは生く、黄なること蟹腹かにの如きは生く、白きこと

豕膏ぶたあぶらの如きは生く、黒きこと烏羽からすの如きは生く此れ五色の生き見はす也

△此れ皆五色の明潤光彩なる者

心に生すれば縞しろぎぬを以て朱を裏むが如く、肺に生すれば縞を以て紅を裏むか如く、肝に生す縞を以て
紺こんを裏むか如く、脾に生すれば縞を以て栝樓實からすりのみを裏むか如く、腎に生すれば縞を以て紫を裏むか如
し此れ五藏生する所の外榮也

△生き生氣也五藏所生の正色を言ふ縞は表帛也縞を以て五物を裏むは外皆白淨にして五色隠然として内に見は
る也、朱と紅と皆赤し朱は其深きを言ふ紅は其浅きを言ふ、紺は青にして赤を含む此れ五藏所生の正色也蓋
し氣か中に足るを以て色か外に榮ふ也前の第三十精明五色と互闕す可し

色と味と五藏に當れば、白は肺と辛あじとに當す、赤は心と苦とに當す、青は肝と酸とに當す、黄は脾
と甘とに當す、黒は腎と鹹とに當す

△當は合也此れ五色五味と五藏に合する者は皆五行の一理也

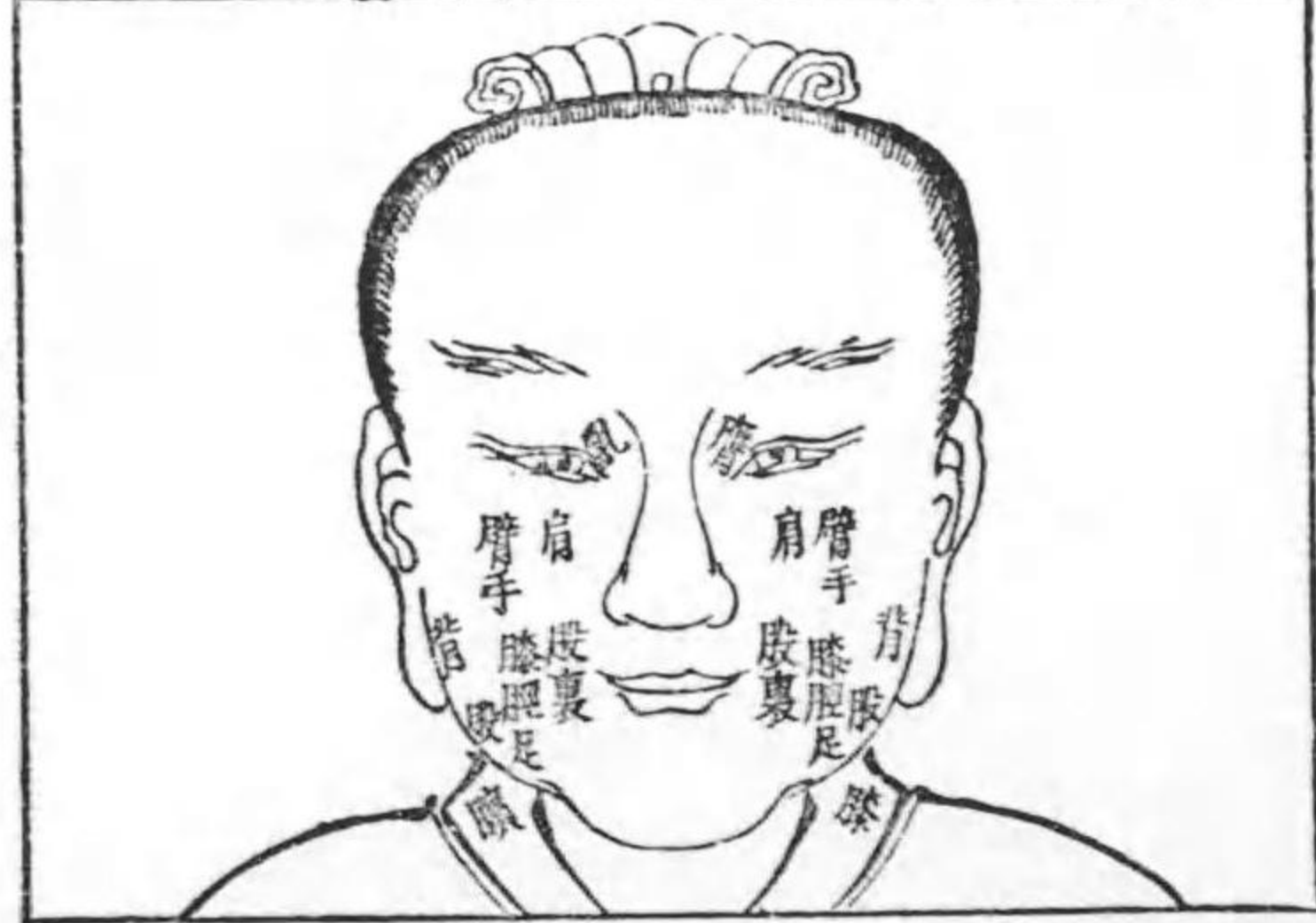
五色と皮脉筋
肉骨も亦合す

故に白は皮に當す、赤は脉に當す、青は筋に當す、黄は肉に當す、黒は骨に合す

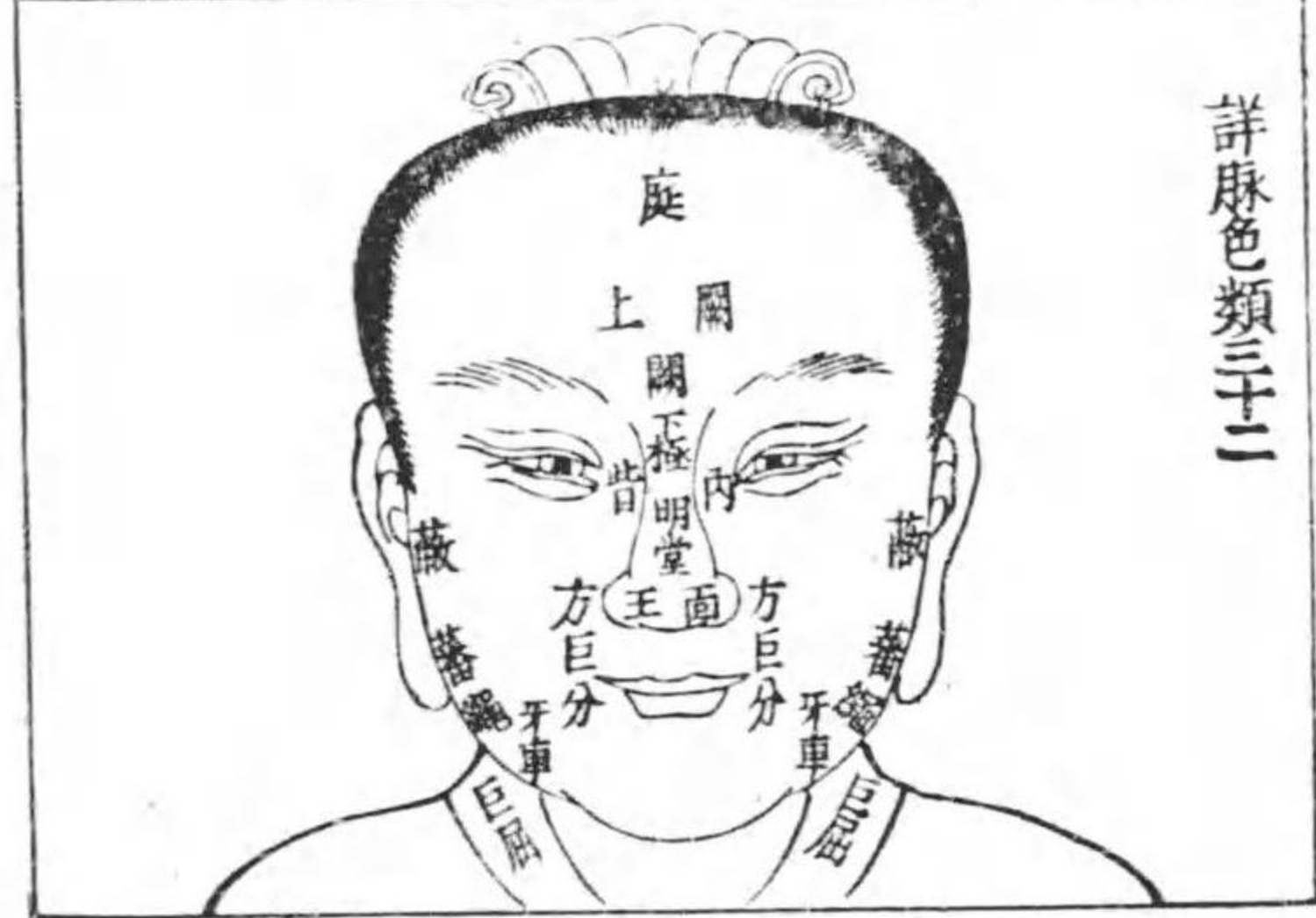
圖部面見色府藏



圖部面見色節肢



圖部面



詳脉色類三十二

類經圖翼の圖

△肺は皮毛を主る故に白は皮に當す、心は血脉を主る故に赤は脉に當す、肝は筋を主る故に青は筋に當す、脾は肉を主る故に黄は肉に當す、腎は骨を主る故に黒は骨に當る也

昭和八年五月十七日初版印刷

類經色脉篇(上製)

【正價金貳圓參拾錢】

昭和八年五月廿九日初版發行

著者

岸原鴻太郎

發行者

山口延次郎

印刷者

柴山則常

印刷所

合資社 杏林會社
右 同 舍所



不許
複製

東京市本郷區春木町二丁目角

發兌元

醫籍鍼灸書類及一般醫療及鍼灸器械
認各籍鍼灸書類及一般醫療及鍼灸器械
可大醫學部御用
各程度量衡計量器販賣

半田屋出版部

(電話)小石川八十七番
(振替貯金)口座東京三四六四番

半田屋

東京盲人教頭 吉田弘道先生校訂
技術學校教諭 森田蒿英先生校訂
日本鍼灸專門學院教諭 德田慈司先生著

文部省発表
簡明 竅孔穴圖 孔穴學
說明書附
送料十二錢
正價金壹圓

受驗 竅孔穴力ト
準備 (簡易記憶用)
送料二十錢
正價金壹圓廿錢

日本鍼灸專門 德田慈司先生賞讚
學院教諭 半田屋醫療器械部特製 (特價)
一具 送料 廿錢



岸原鴻太郎先生著(最新刊)
通俗萬病名灸集
附藥方及病理
菊判美裝本綴
紙頁百七拾五頁
全一冊及附錄一冊附
正價金貳圓

醫學中學が易くして効多き者は灸法なり古大醫曰灸法の道至り盡せり、大小の疾病皆之を行ふ可し」と然るに後世灸法は僅に疝氣腰痛脚氣等に
限る者の如く誤解せられ且つ下級の民間にのみ行はれしは醫家微力の致
す所なるやも知らざれども實は鍼灸醫書が餘りに専門的で其術語の註解
も無く又其記載の順序が經脈に従ひて主治效能の記事が各處に散在する
のみならず秘傳とか一子相傳とか云ふ弊風の爲め萬病に對する灸法が隠
蔽せられたるに基因す」此の故に本書は先づ萬病通治の灸法を記し次に
各種病治の方を載せたり是を以て巻を開けば直ちに其の病は某の穴と云
ふことが一見明瞭となりて更に隠れたる灸法無きに至り加るに病理と
藥方を附記する者鮮からず

今其灸法の例を擧ぐれば脱肛の如き頭の辻毛中に七八壯灸すれば直ぐに
愈ゆ」感冒の如き其始めに風池——身柱等に五七壯すれば忽ち頭痛止み
病去る」齒痛の如き肩尖の肩髃穴又手の中指等に五七壯すれば拭ふが如
く去る」又避妊の如き臍下二寸三分に三壯乃至四十九壯灸すれば終身孕
まず」又中風の如き最も灸法あり」癩癧積聚赤白帶下虎疫の如き萬病皆
效あらざる無し」凡そ古人が何病に何穴を用れば效ありと云ひ置かれし
者大概效有らざる者無し今や我が國民は其醫藥に乏しく且つ其料金に苦
めり故に最も簡易有效なる此の灸法を編集せり不肖和漢醫學の復興に志
してより茲に二十有六年今年七十八餘命幾何も無し依て僭越を顧みず之
を公にす若し本書が有効の者にあらざることあらば購求者に元價を返還
す可し余は斷じて世を益する者と信ぜり
尙ほ本書内容の主旨は其「ばしがき」と序例及第二章通治穴を一讀せられ
たし

昭和七年七月十日 著者識

發賣元 東京市本町二丁目 區角
半田屋醫籍及器械商店
電話小石川八十七番 (番四六四參京東座口替振)

辰井文隆氏著
明 鍼灸醫學 全一冊 金八圓五拾錢
系統的問題集

圖解 鍼灸解剖學講義 全二冊 前篇金貳圓 後篇金貳圓

實驗 鍼灸病理學 全二冊 前篇金四圓五拾錢 後篇金四圓五拾錢

假名讀 十四經發揮 全一冊 金貳圓八拾錢

圖解 經穴學 全一冊 金參圓八拾錢

杉山流 秘傳書 選鍼三要集 全二冊 金壹圓五拾錢

鍼灸學 則 全一冊 金壹圓

圖解 經穴學講義 (並ニ獨學受驗開業法) 全一冊 金參圓

新 經穴圖譜 全一冊 金壹圓五拾錢
古 瀨道三氏著 脈口傳集 全一冊 金壹圓五拾錢

福岡桂司先生著
新 鍼灸治療學 全一冊 金參圓

新 鍼灸技術學 全一冊 參圓五拾錢

類 鍼灸醫科學 金貳圓五拾錢

類 孔穴學 金貳圓五拾錢

臨 鍼灸病理學總論 金貳圓

受驗 實用改正孔穴學 金壹圓貳拾錢

富永 勇著 療學 第一篇(灸療學)金壹圓 第二篇(經穴學)金壹圓參拾錢

灸療 自在 金壹圓

灸療 要穴字典 金壹圓
灸療 長生法ト灸療 金壹圓

玉森貞助先生著

鍼灸經穴醫典

全一冊
金四圓五拾錢

山田國弼先生著

澤田流鍼灸道に就いて

全一冊
金參拾錢

山本新梧先生著

日本鍼灸學教科書

全三冊
前篇 金參圓五拾錢
中篇 金參圓五拾錢
後篇 金五圓

同

各府縣 試驗問題解答集

全一冊
金參圓五拾錢

山崎良齋先生著

最新鍼灸醫學教科書

全三冊
前篇 金五圓
中篇 金五圓
後篇 金參圓五拾錢

七十九翁 岸原鴻太郎先生著 (今回再版發行)

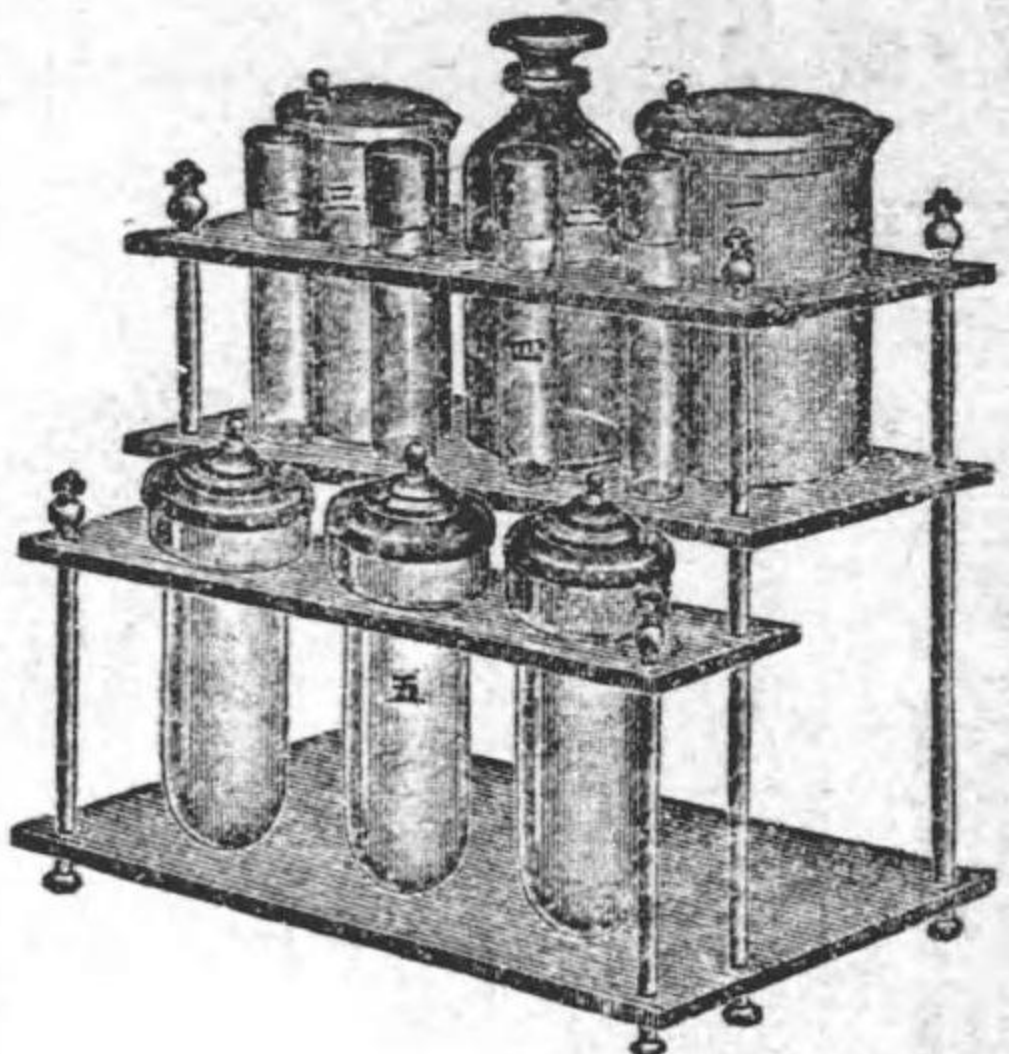
增補 訂正 萬病鍼灸全書

菊列美裝本綴
紙數三百三十餘頁
全一冊及附錄圖譜一冊附
正價金參圓五拾錢
送料拾四錢

本書は始め著者が漢方再興の大志願を以て數十年間刻苦勵精の結果として昭和三年出版せられし物也其賣切れき爲るや諸方より再版を促し來るを以て今回弊店に於て増補訂正を乞ひ出版せし次第に候
本書の價值に就ては世上既に定評あり今更々々の要無く左記書狀の如き即ち其一例に候併し今未知未見の方の爲めに其概要を述べれば其主治效能の如きは漢方第一の寶典たる類經及び圓翼千金方鍼灸賦等に由り「術語解病理説明の如きは十數大家の書に由れり」加るに鍼灸の總穴に對する概索引を以てして容易に其求むる治穴を獲せしむるが如き他の醫書に見ざる所にして本書に全書に命名しある所以也冀くは一本を購ひ之を諒せられ度候 謹白

貴著「萬病鍼灸全書」を購入益を得ること多大いに感謝いたし居るものに御座候小生は鍼灸を業となし居るものにて種々研究書類を入手研究いたし居るものにて田舎にて思ふ様書類ことに舊い書物等入手し難く困難いたし居る折柄前記書物を入手したる時は非常にこれ感謝いたし候

新卓上鍼消毒器 特價金八圓五拾錢



全部ニッケル製
高九寸、前九寸、
横六寸
1 綿花入
2 消毒瓶
3 艾入瓶
4 鍼貯藏瓶
5 鍼消毒及鍼山

醫學博士 富士川 游先生撰 人體內臟圖 全一幅 金參圓五拾錢



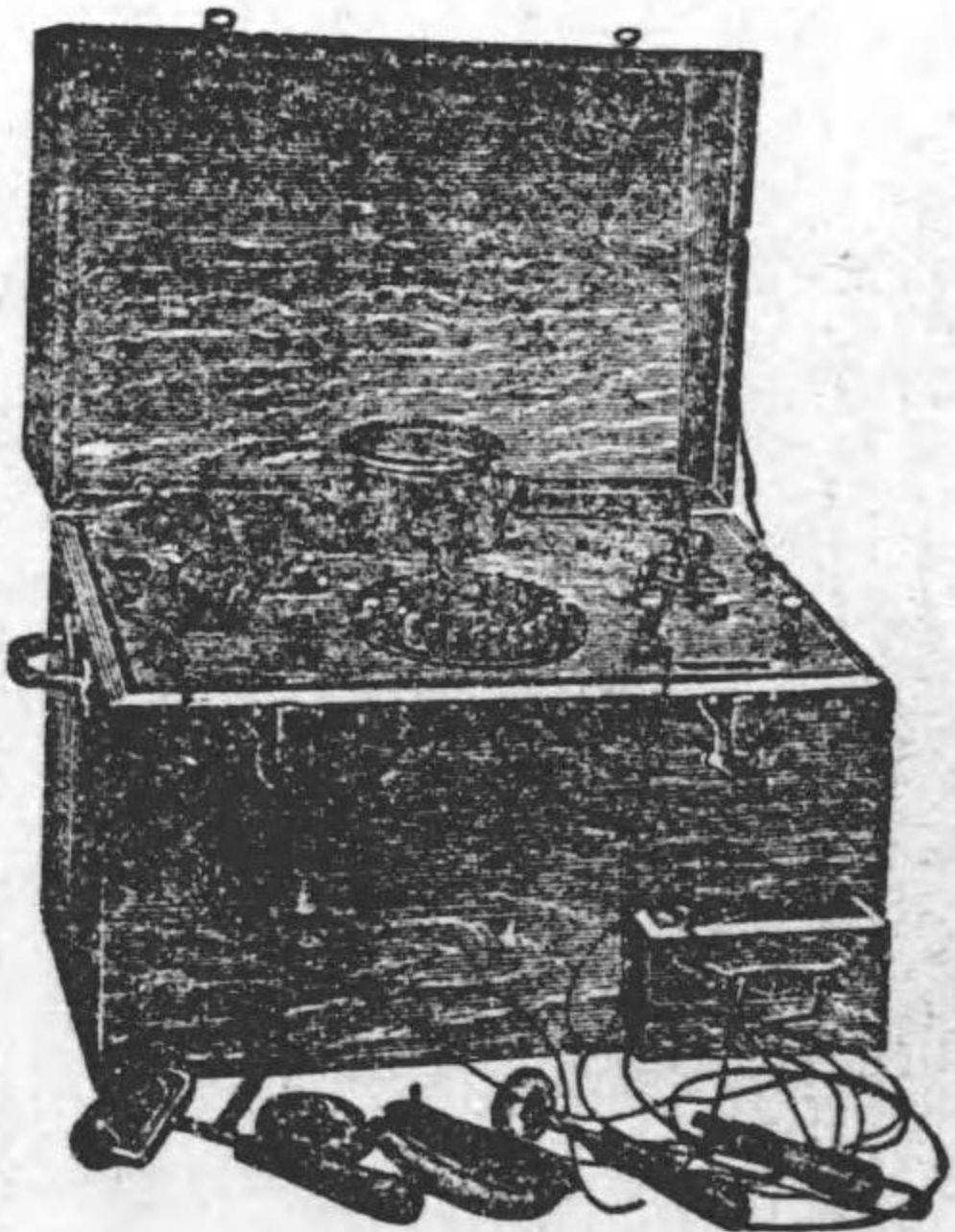
田中式 灸柱壓榨器 金壹圓八拾錢

田中式 灸點割出器(尺度) 金壹圓

半田屋醫療器械部特製 平流、感傳、混合電氣器械一具

▲乾電池及附屬品附▼

特價 金九拾圓

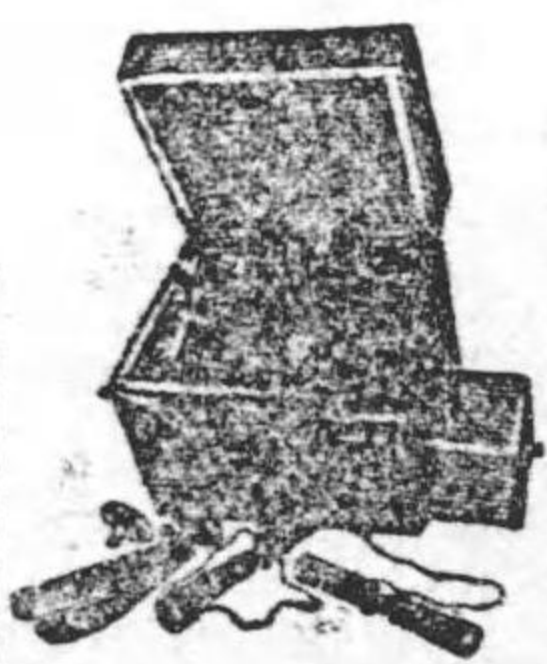


品體 質裁 堅優 牢美

半田屋特製

◎感傳電氣器械

乾電池 一個附 金拾六圓
同 二個附 金廿參圓



●聽診器

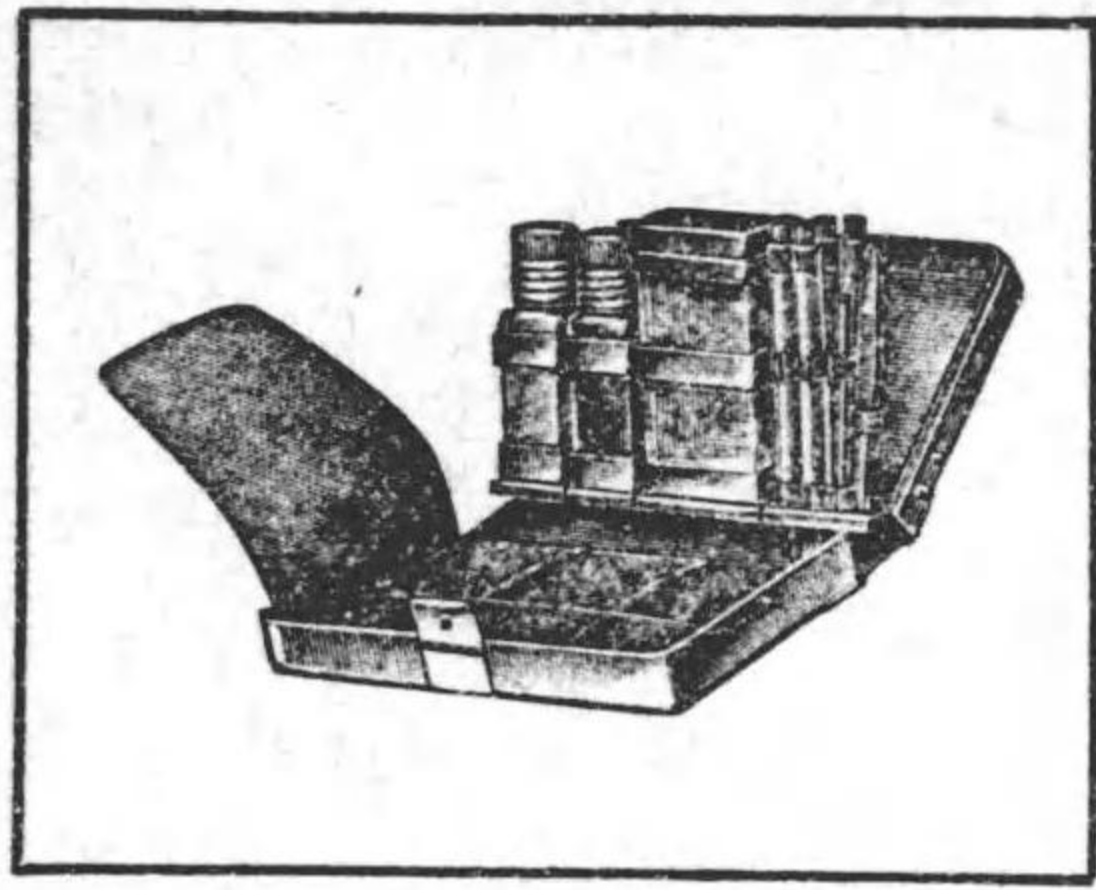


▲鬼束型 金五圓五拾錢
▲大學型 金五圓
▲高田型 金五圓
▲ベルツ型 金四圓
▲水牛製 金貳圓

東京盲人技術
學校教諭 森田蒿英先生賞讚 (ニツケル製
頗ル優美)

●新式 鍼灸用消毒鍼箱

一具 金五圓五拾錢
送料三拾錢

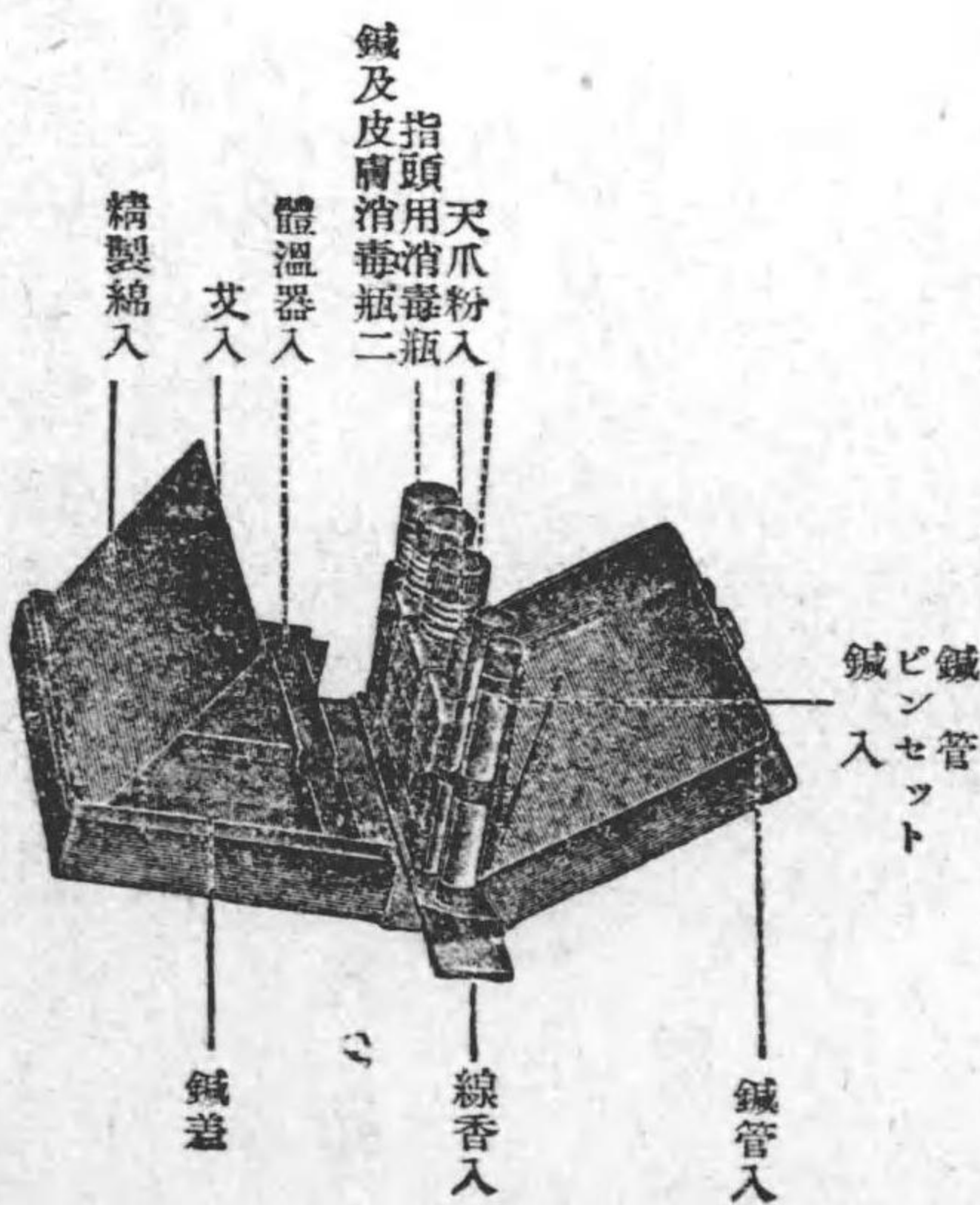


總檢校杉山一先生
杉山三流部書
全一冊金貳圓五拾錢

帝國鍼灸
醫報社長 小林北洲先生考案 (ニツケル製體裁優美)

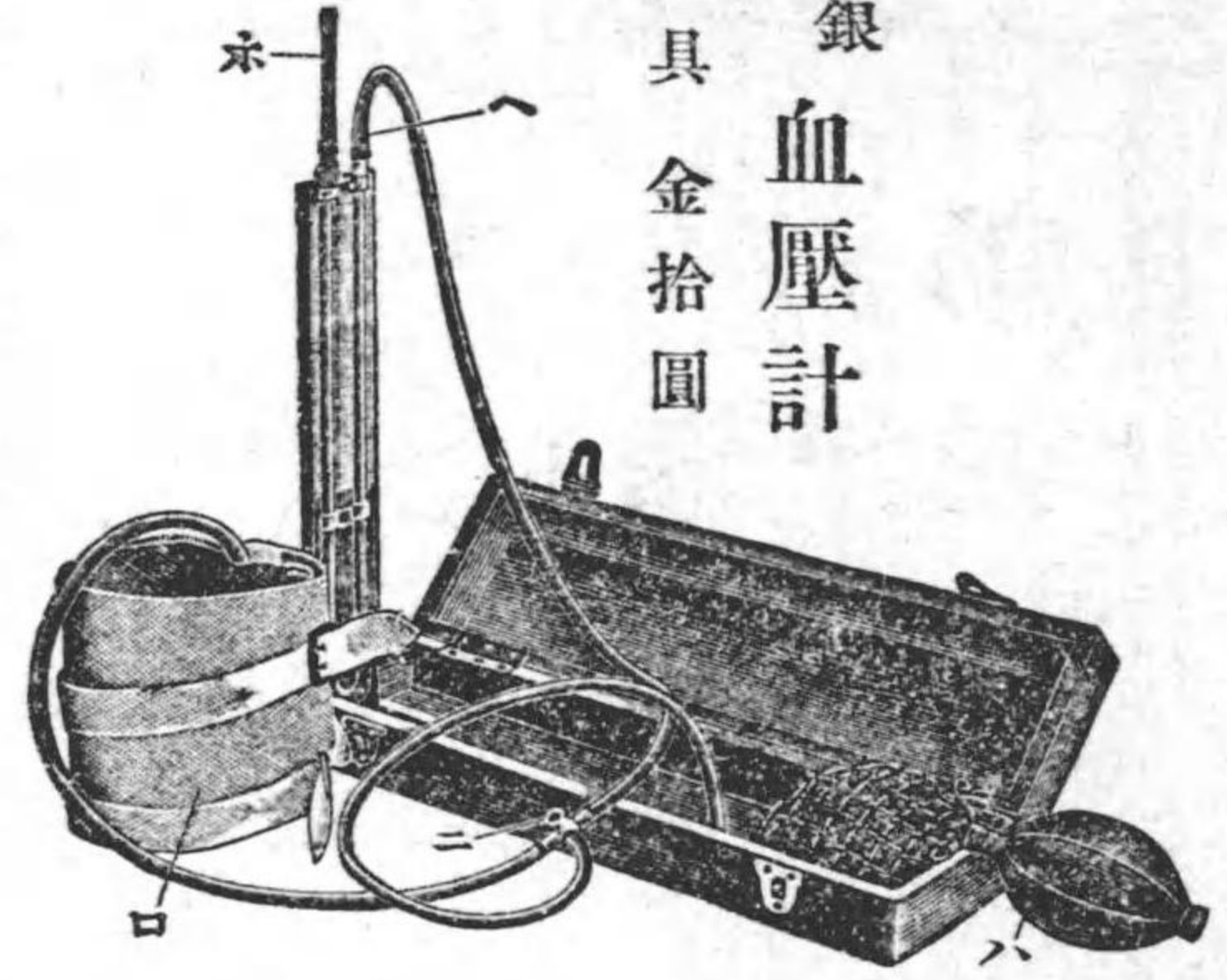
●小林式 三德 鍼灸消毒器 一具 金六圓
送料卅錢

●本器ハ從來アリ振レタ消毒器ノ値段計リ高クシテ大抵ハ鍼ノ消毒丈ヲ稀ニハ鍼灸ニ使用出來得ルモノガアル
●本器ハ其ノ不便ナ點ヲ補ヒ、一ツノ器具デ鍼治、灸治、マツサージ、三科ニ使用出來、備品トシテハ酒精、體溫計、線香、指頭消毒器、天爪粉容器、ナイ器具デ有リマス
●各自一個宛座右ニ御備ヘノ程ヲ御獎メスル

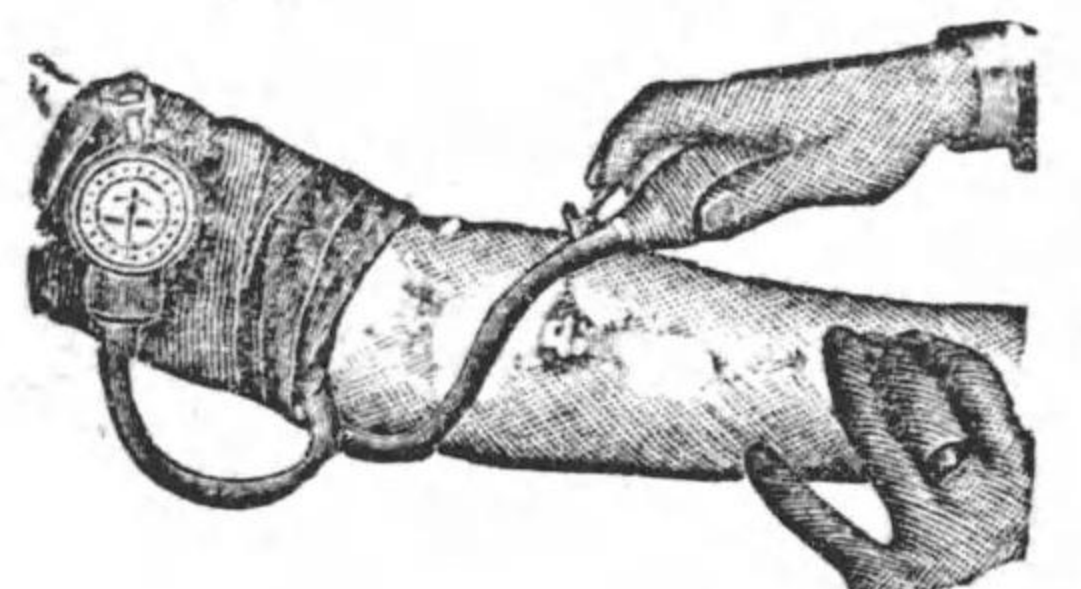


醫學博士 太田正隆先生
醫學博士 伊藤信次先生
日本鍼灸專門學院教諭 吉田弘道先生
醫學博士 森田蒿英先生
醫學博士 德田慈司先生著 最新刊
●試驗問題答案書 全一冊

●水銀 血壓計 一具 金拾圓



●時計型 血壓計 一具 特價 金貳拾四圓



小川春興先生著

本朝鍼灸醫人傳 全一冊

車戶壽衛先生著

●診斷及治療學 全二冊 上卷金六圓 下卷金六圓

宇山健二先生著

●中風症ト必治鍼灸療法 全一冊 金壹圓五拾錢

岸原鴻太郎先生編述

●通臨牀和漢醫方 全一冊 正價金貳圓 送料拾四錢

醫學士 江藤義成先生著

●血壓の話を 全一冊 正價金壹圓 送料拾貳錢

高村高先生著

●鍼灸術獨學案内 全一冊 正價金壹圓 送料拾貳錢

(合格秘訣受験及開業ノ實際)
本書ハ親切ナル獨學案内デアアルガ受験生ニハ試驗場ニ於ケル注意、答案ノ書キ方、實地問答ノ實際記ヲ述ベ合格ノ要領ヲ教フ

半田屋 金 鍍 代 價 表

五寸	四寸五分	四寸	三寸五分	三寸	二寸五分	二寸	一寸六分	一寸三分
(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(一、二番ヨリ五番マデ下記ノ通り)	各四十五錢	各四十五錢
(一圓千錢)	(一圓十錢)	(一圓十錢)	(一圓十錢)	(一圓十錢)	(一圓十錢)	(一圓十錢)	五十五錢	五十五錢
(一圓四十錢)	(一圓二十錢)	(一圓二十錢)	(一圓二十錢)	(一圓二十錢)	(一圓二十錢)	(一圓二十錢)	六十錢	六十錢
(一圓六十錢)	(一圓六十錢)	(一圓六十錢)	(一圓六十錢)	(一圓六十錢)	(一圓六十錢)	(一圓六十錢)	六十五錢	六十五錢
五寸	四寸五分	四寸	三寸五分	三寸	二寸五分	二寸	一寸六分	一寸三分
(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	(同)	各十錢	各十錢
(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	十一錢	十一錢
(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	十二錢	十二錢
(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	(一圓三十錢)	十三錢	十三錢

半田屋 銀 鍍 代 價 表

白金鍍

一本 金壹圓四拾錢

全自動鍍

一本 特價金八拾錢

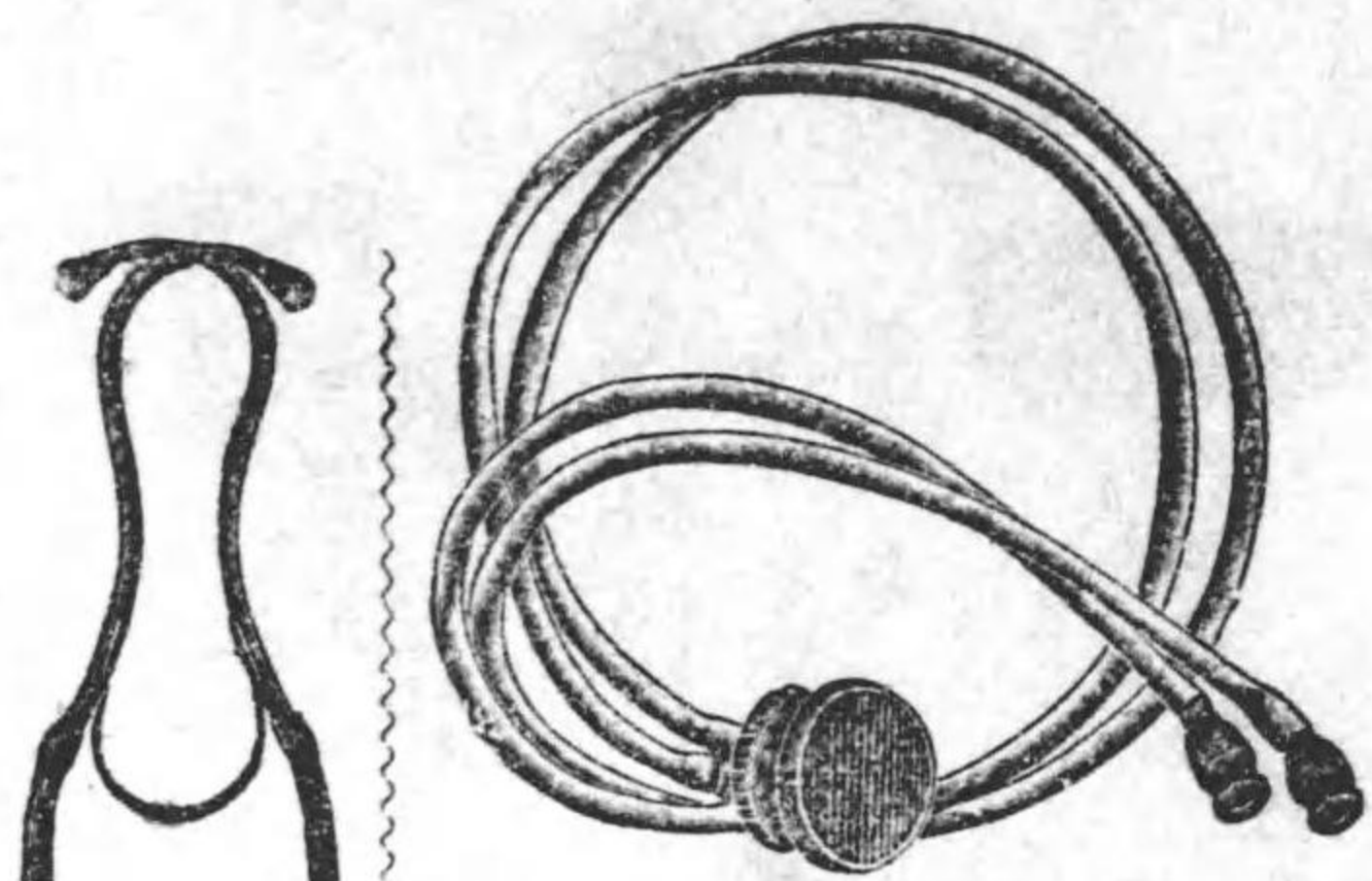
三稜針

一本 金貳拾五錢

灸點器

一個 金七拾錢

小兒用トシテ有效ナル



草間聽診器

(使用法附)

金四圓五拾錢

醫學博士長尾美知先生改良
●集音聽診器 Telephonskop
「使用說明附」美麗皮
サツク入

本聽診器ハ名聲噴々タル前千葉醫科大學教授長尾博士ノ先年歸朝ニ際シ攜帶セラレタル原器ニ基キ實驗研究ノ結果更ニ改良ヲ加ヘタルモノニシテ如何ニ微細ノ雜音ト雖モ明確ニ之ヲ聽取シ得ベク且ツ攜帶ニ至便ナリサレバ從來聽診上難解ノ疑點モ本器ヲ一度使用センカ自ラ釋然タルベシ敢テ世ノ實地醫家竝ニ學生諸彦ニ推獎ス

●本器ノ特長

本器ハ感應膜ヲ具備セル集音室傳音管及ビ耳管ヨリ成リ音波ノ感應極メテ鋭敏ナルガ故ニ如何ニ微細ノ雜音ト雖モ明確適確ニ特種ノ護膜管ヲ使用セルヲ以テ永ク變質スルコトナク傳音極メテ佳良ナリ
本器ハ特製サツク入ナルヲ以テ攜帶頗ル便利ナリ但、本器ハ嚴密ナル監督ノ下ニ作製シテ發賣スルモノナリ該器御購求ノ際ハ必ズ半田屋製ニ御注意アラントラ

指頭消毒器

(艾入ニモ應用シ得)



大形 金七拾五錢
小形 金五拾錢

慶應醫科大學醫學博士草間良先生改良
草間式聽診器(使用說明書附)

本器ハ慶應醫科大學草間先生ノ最近歸朝ニ際シ目下彼地ニ於テ最モ多ク使用セラレツ、アル原器(ホーマン式)ニ基キ更ニ改良ヲ加ヘタルモノニシテ如何ナル微細ノ雜音ト雖モ明確適確ニ聽取シ得ベキ特徴ヲ有ス而已ナラズ體裁優美ニシテ往診攜帶ニ便ナリ乞フ購求ノ上御住用セラレンコトヲ

(特長)本器ハ在來ノ聽診器ノ如ク外界雜音混入スル事絕對ニ無シ本器ハ圖ノ如ク集音器傳音管及耳管ヨリ成リ音波ノ感應極メテ鋭敏ナルガ故ニ如何ナル微細ノ雜音ト雖モ明確適確ニ聽取スル事ヲ得ベシ、集音器ハ二部ニ分レ肋間腔ノ狹隘ナル患者若シクハ小兒ノ胸廓ニハ末端(A)ヲハツシテ(B)ヲ使用ナス事ヲ得ベシ、傳音管ノ上部ハ金屬製ナルガ故ニ屈曲適度ニシテ彈機ニテ輕ク耳管ヲ耳孔ニ固定スルガ故ニ使用中ニ落ツルガ如キ事ナシ、耳管及集音室ハ非金屬故寒中ニテモ皮膚ニサワリテ冷タカラズ、本器ハ特種ノゴム管ヲ使用セルヲ以テ冬季ニ對スル耐久力ヲ有ス但シ本器ハ嚴密ナル監督ノ下ニ作製シテ發賣スルモノナリ該器御購求ノ際ハ必ズ半田屋製ニ御注意アラントラ

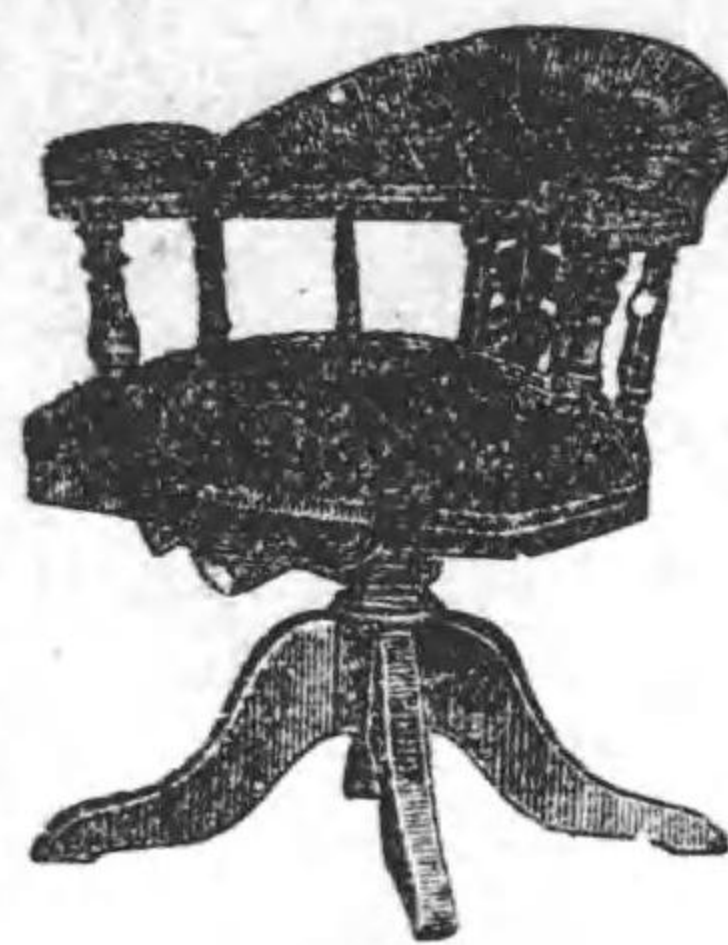
廻轉消毒器

(蓋附) 金貳圓



●醫師用廻轉椅子

舶來上等テレンプ張
金拾貳圓



●患者用廻轉椅子

舶來上等テレンプ張
金七圓



●脱衣容器

丸形 金參圓五拾錢
角形 金四圓



●新式

消毒器械
卓子

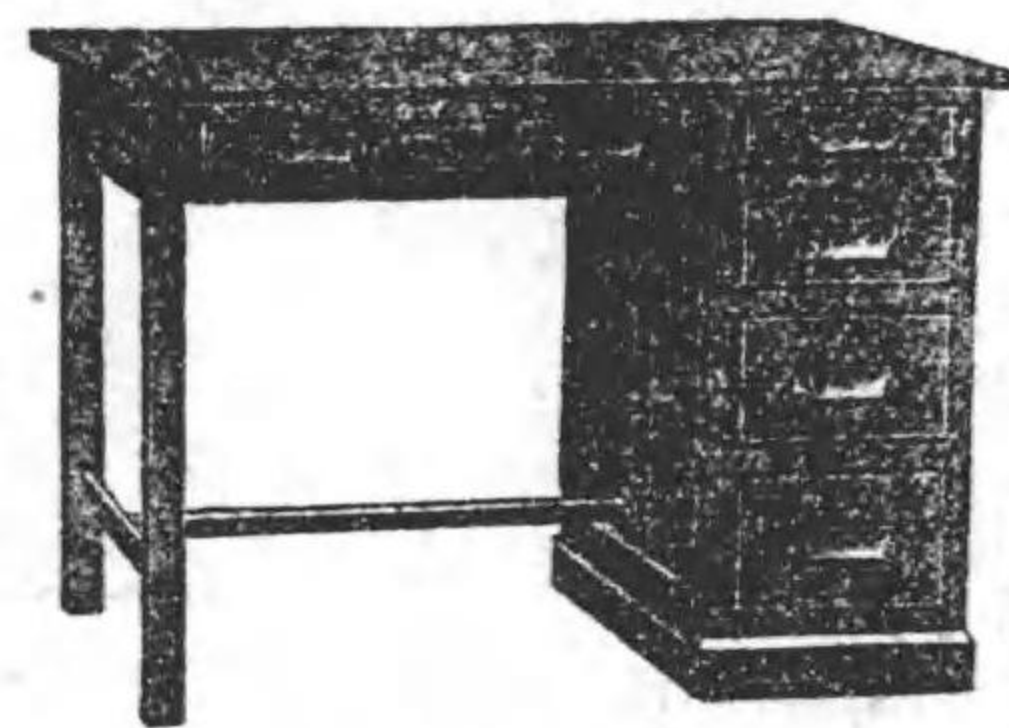
金拾五圓

厚硝子板



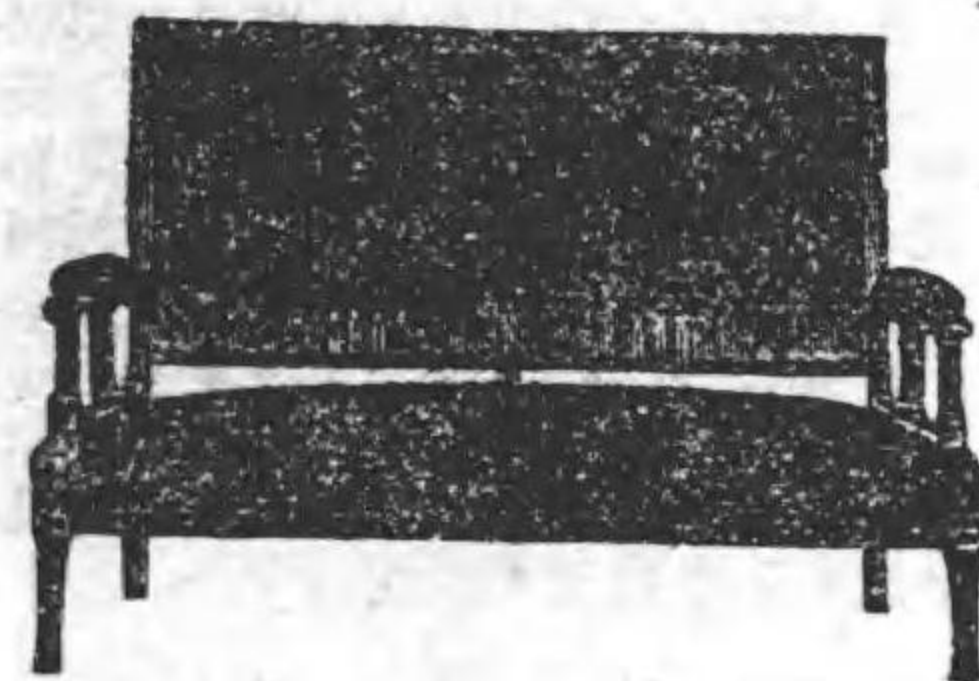
ニッケル製消毒盤

●片引出袖付テブル



圓貳拾貳金

●待合所用椅子



張ブンレテ 金七拾參圓
張ラニマ 金拾參圓
背張シナ 金四拾貳圓

●内科診察臺



張ザレ 角足 金九圓
同 丸足 金拾圓
張ブンレテ 丸足 金參拾貳圓

●普通椅子

メテンドレス張 金六圓
張 金四圓



右の外西洋家具類特價に上納可致候

終